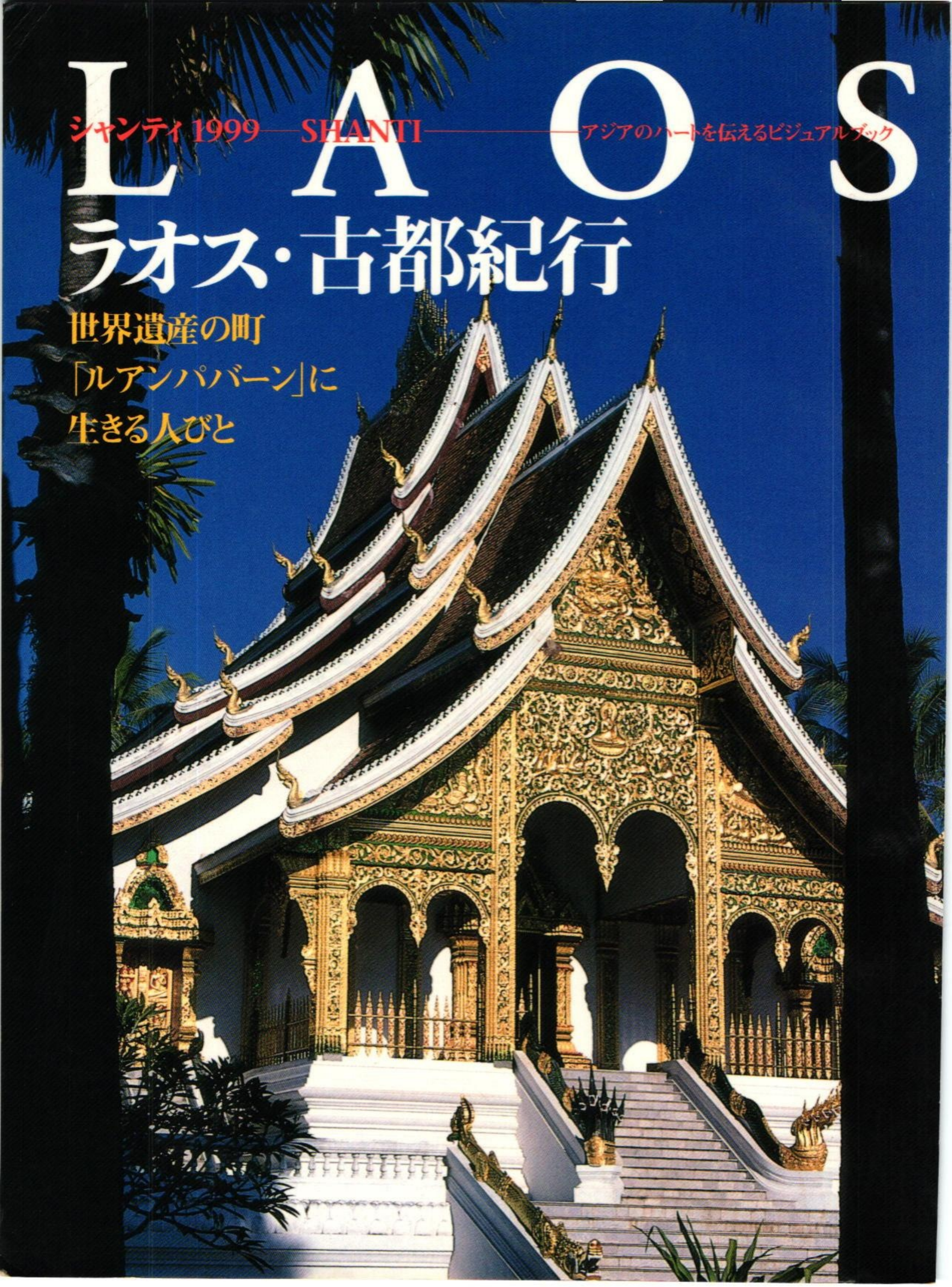
シャンティ1999——SHANTI——アジアのハートを伝えるビジュアルブック

LAOS

ラオス・古都紀行

世界遺産の町「ルアンパバーン」に生きる人びと



LAOS

ラオス・古都紀行

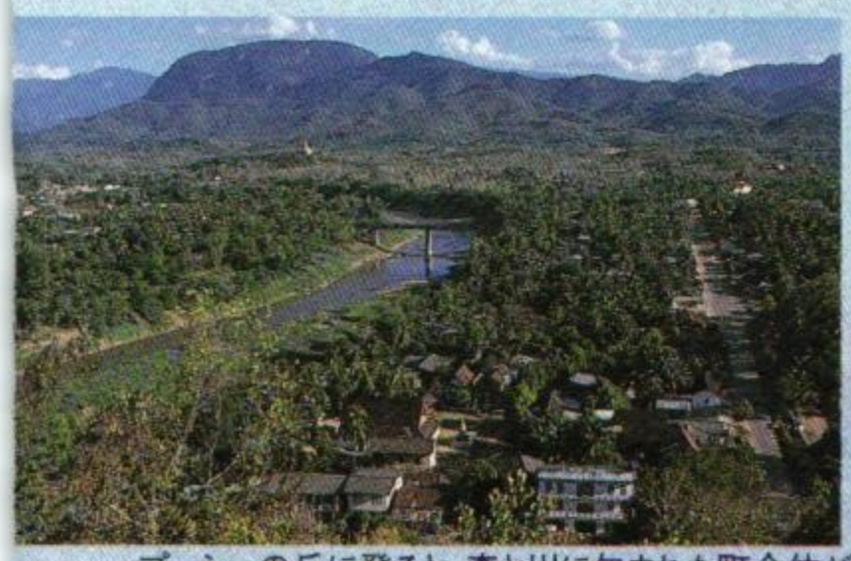
世界遺産の町「ルアンパバーン」に生きる人びと

ラオスの奈良、京都と呼ばれるルアンパバーン。メコン河とカーン川の合流点に位置し、森と河に包まれたこの町は、長い間王都として栄え多くの寺院が点在する。風光明媚で歴史の香り高い町である。

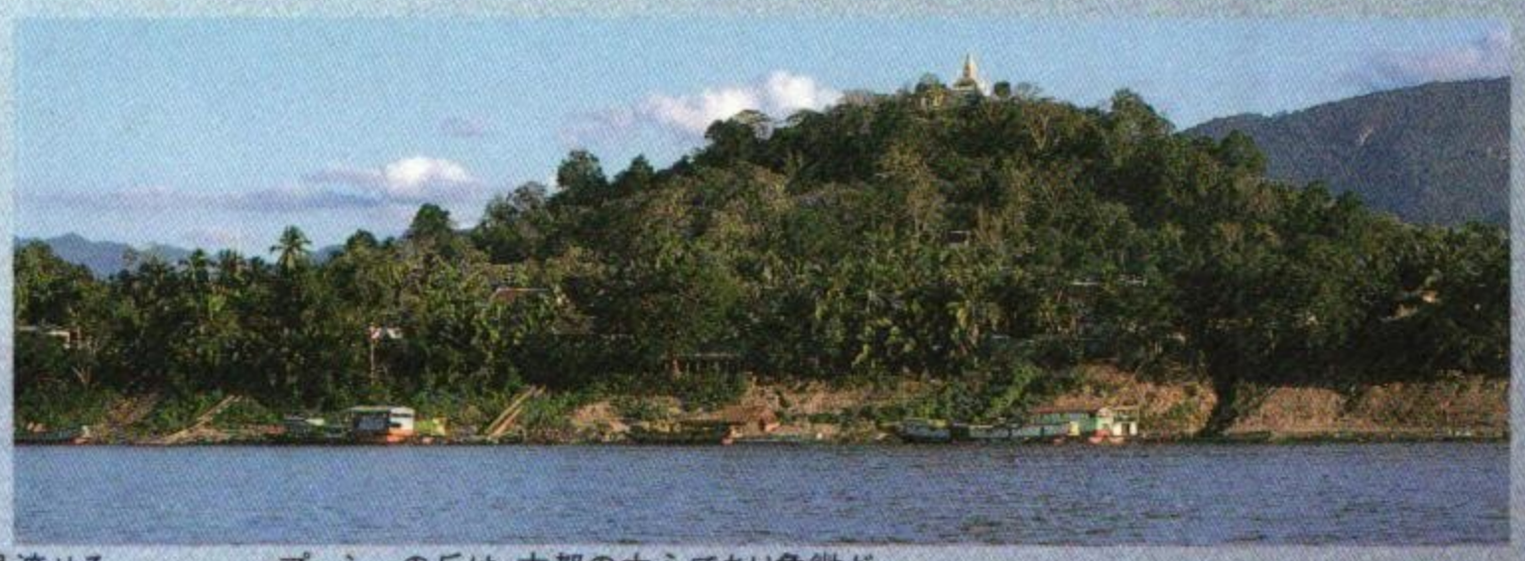
一歩裏通りに入ると、銀細工や菓子づくりなど、伝統の技を今に伝える匠たちがいる。河のほとりの村々では、手漉き紙や、地酒づくり、織物づくりなど、昔ながらの仕事に家族みんなで汗していた。

文・大菅俊幸／写真・篠田有史





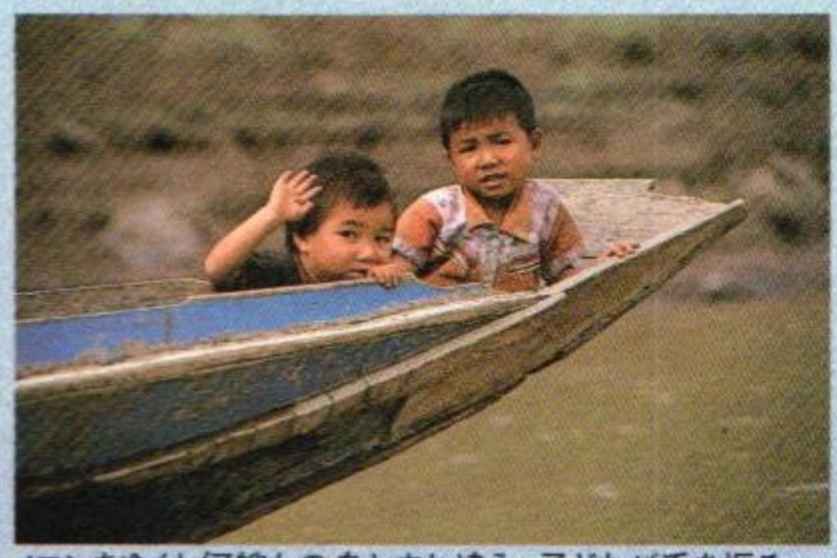
プーシーの丘に登ると、森と川に包まれた町全体が見渡せる。



プーシーの丘は、古都の中心であり象徴だ。

大河

大河滔々――メコンの畔の町、ルアンパバーン。この河は遠くチベット高原に淵源を発し、延々と雲南の山々を流れ、ラオスへと続く。「母なる河」と呼ばれ、親しまれ、崇められてきたメコン。そこは、人々にとって、生活の場であり、憩いの場であり、聖なる場でもある。河の流れは、今日も、人や物資や家畜を運ぶ。



メコンをゆくと何艘もの舟とすれ違う。子どもが手を振る。

王都

ルアンパバーンは、14世紀にファーグム王がランサン王国を建て、以来、16世紀にヴィエンチャンに遷都し、やがて1975年、王制が廃止されるまで、王都としてその栄華を誇った。もと王宮であった王宮博物館のあるシェントーン通りには、多くの寺院が建っている。ブッダの生涯が描かれた黄金のレリーフが見事なワットマイ、人々の篤い信仰を集めているワット・ノーンシークンムアン。そして、ワット・シェントーンは、かつて古い王宮のあった寺である。

王宮博物館。

ワット・シェントーン。

ワット・マイの黄金のレリーフ。

悠久

人々の1日は、僧侶の托鉢へ布施することからはじまる。朝6時過ぎ、表通りの道端には、パービエンというショールを肩にかけた女性たちが待機していた。黄色い衣をまとった僧侶たちがやってくると、女性たちは居ずまいをただしご飯を施す。僧侶たちが返礼することはありえない。返礼すると在家の人が功徳を積めなくなるからだ。こうして、沈黙のうちに、何百年と続いてきた早朝の儀礼が今日も行われる。



ワットタート前の道で、僧侶の托鉢に布施する女性たち。



祈り

彼らは信仰篤き人たちである。生活は寺院を中心に成り立っている。僧侶にまつわる儀式や、祭り、結婚式、葬式、家の新築の時など、仏教行事が生活を彩る。また、人々は古くからピー（精霊）を信仰している。恐ろしい病気や災害、そして幸せをもたらすのもピーだという。この土着の信仰に仏教やヒンドゥ教が混合したのが彼らの宗教生活である。

ワット・タム・プーシー。占いの石仏があり、願をかけて持ち上げ、願が叶うときは軽々と持ち上げられるという。

ブッダと対峙し、心静かに自分を見つめ直す場所、サンティ・チェディ（仏塔）。

この町はラオスで最も重要な観光地である。とくに1995年、ユネスコによって世界遺産に指定されてから、外国からの観光客が増えた。日用雑貨、食料品、衣料品、建築材料など、多くのものはヴィエンチャンから運ばれる。また、3年前までは、上流のダムが水不足になりがちで、3、4日に1度、電気が使えなくなることがあった。現在は、ナムドムダムができ、いつも使えるようになった。しかし、メコン河対岸の村にはまだ電気がいかない。今もランプ生活である。

暮らし

ルアンパバーン市内の街並み。



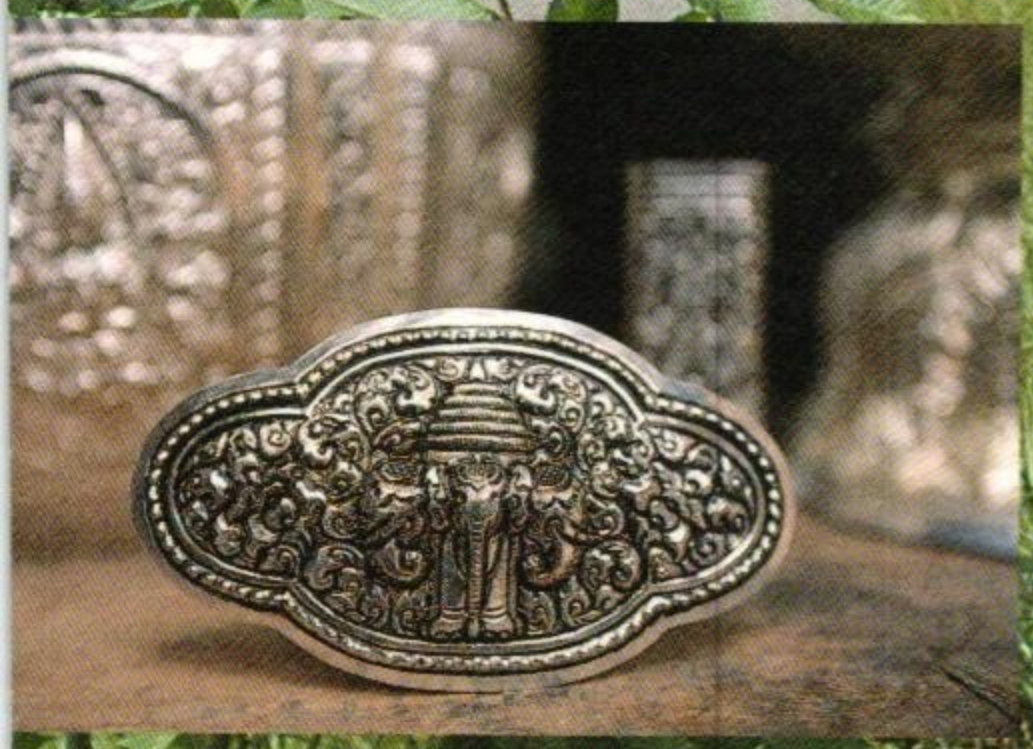
神々

左:ブーニュー、
中:シンケーオ・シンカム、
右:ニャーニュー。

この町は、新年の催し物の華やかさで有名である。旧暦5月(太陽暦の4月)の新年には、全国各地からたくさんの人々が集まる。何と言っても、着飾った少女たちが歩く新年のパレードが見ものである。そのとき、赤い面をかぶった獅子のような存在が練り歩く。それはブーニュー、ニャーニュー(ニューおじいさん、ニューおばあさん)と呼ばれる。天のカミであり、王さまの先祖であり、町の守り神でもある。年に1度だけ、祠から出され活躍する。不思議なご縁で、今回、祠の中で見せてもらうことができた。



匠たち



ルアンパバーンは、銀細工で有名である。そして、町の郊外、メコン河の畔にも名産品の村が点在している。タムティン洞窟にほど近いサンハイ村では、ラオラオという蒸留酒をつくっている。どの村でも、家族一緒に仕事をしていた。

銀細工の髪どめ（キッポン）と
ルアンパバーンの少女。

カーン川の畔にあるパノム村では、女性たちが丹精込めて機を織っている

サンコーン村では、赤いブーゲンビリアのような花を浮かべて手漉き紙がつくられている。

メコン対岸のチャン村では、地元の赤土を使って素焼きづくりを行っている。

食彩

朝も6時頃になると、町の市場（タラート・ダラ）は人混みでごった返す。野菜や果物、魚。そして、河海苔、納豆など、ルアンパバーンならではの食材も並んでいる。カノンモートーなど油で揚げたお菓子も大人気である。メコンの畔のレストラン。気さくな女主人は、代表的なルアンパバーン料理を用意してくれた。

ルアンパバーン市内にある市場（タラート・ダラ）にて。

ルアンパバーン料理。
❶ケンソンバー／トムヤンクンのように、すっぱく辛いスープ。タマリンドウの実や魚、トマト、きのこなどが入っている
❷モックパフォ／バナナの葉っぱに包み、ミルクに浸して蒸した魚
❸サイウォアモー／豚肉のソーセージ
❹カッネンカイ／鶏肉をココナッツミルクや唐辛子で煮込んだもの
❺ヌンパッ(ク)／キュウリのおひたし
❻マークトゥア／豆
❼バッカー／こまつな、ゆきなのようなもの
❽オッラム・サッカーン／鶏肉を香辛料で煮込んだもの。

シェントン通りに面した、ルアンパバーン幼稚園と小学校。校庭でお遊戯をしている子どもたちがこちらに向かって挨拶をした。

ラオスの小学校の就学率は約60%といわれる。未就学の子どもたちの大半は山岳地域に住んでおり、険阻な地形が通学の妨げとなっている。教師の数も不足している。給料が安いため兼業している教師も少なくないという。

子ども

県立病院にほど近いシーターン小学校では、5年生の生徒たちに、女性の校長先生が流暢にフランス語を教えていた。

SHANTI

CONTENTS

シャンティ'99——目次

ラオス・古都紀行

世界遺産の町、ルアンパバーンに生きる人びと

——文・大菅俊幸／写真・篠田有史

■天に一番近い都……●18

■メコンの畔の匠たち……●30

■遥かな山里、カミは森に棲んでいた……●40

●ナーガの眠る街

ルアンパバーンのボートレース……●48

——鈴木玲子

●ラオスの古典文学

新しい姿を求めて……●54

——ウティン・ブンニャウォン

●岩田慶治が語る

「アジア・奥の細道」……●62

ラオスから歩き始めたアニミズムの旅

◆少数民族の女たち

ドゥアへの応援歌……●70

——安井清子

◆アジアを見る視点

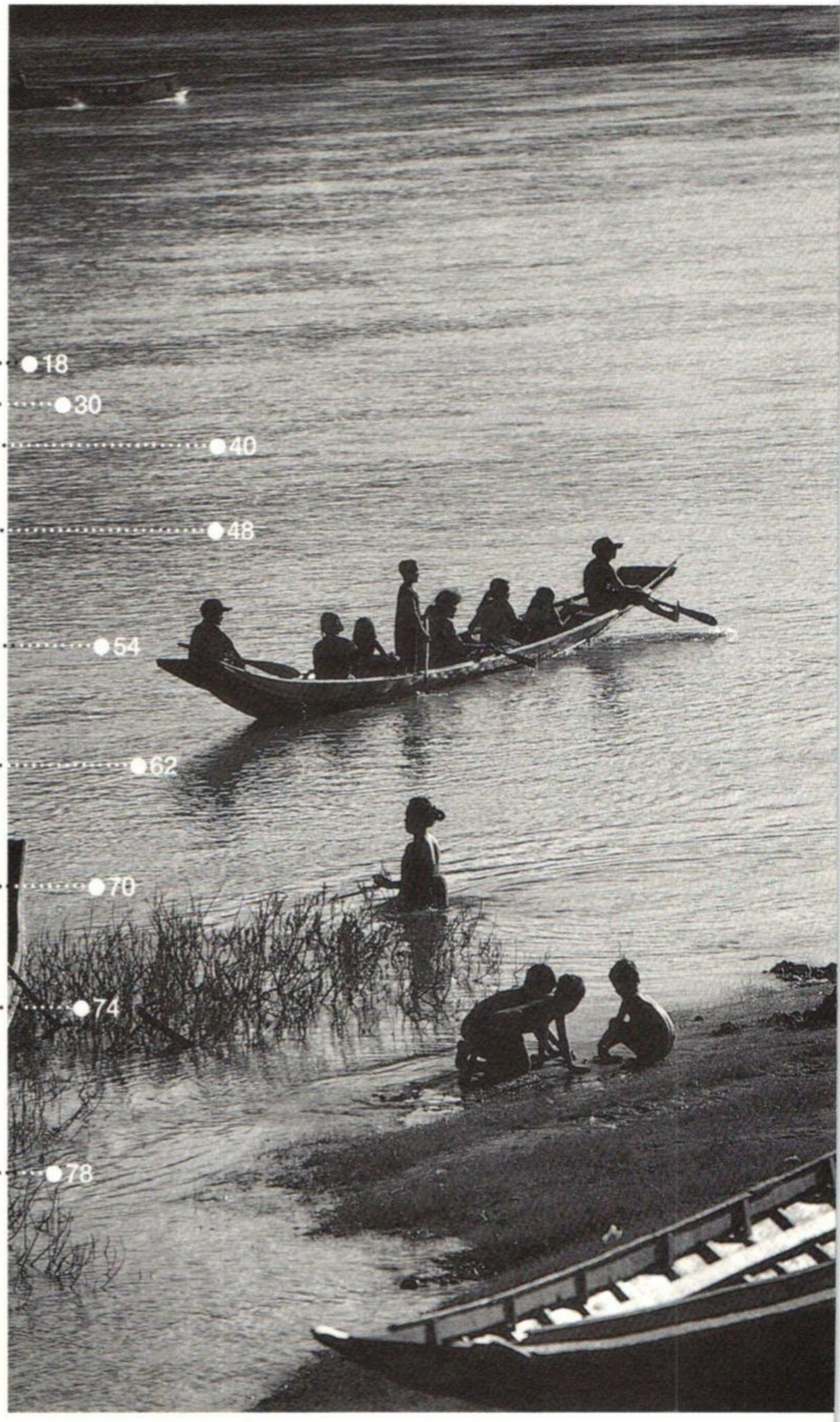
変わりゆくラオス……●74

——竹原　茂

◆東南アジアの音楽文化

世界へ向かって、ゆんたしょうら!……●78

——松村　洋



[表紙の写真]
ルアンパバーン、王宮博物館の敷地内にある「ホー・パバーン（仏殿）」。この華麗な屋根は、雛鳥を抱く親鳥をあらわす。博物館内にあるパバーン仏が、将来的にここに安置されるという。

◆ラオス古都紀行◆

世界遺産の町 ルアンパバーンに生きる人びと

天に一番近い都

●ルアンパバーンってどんな所？

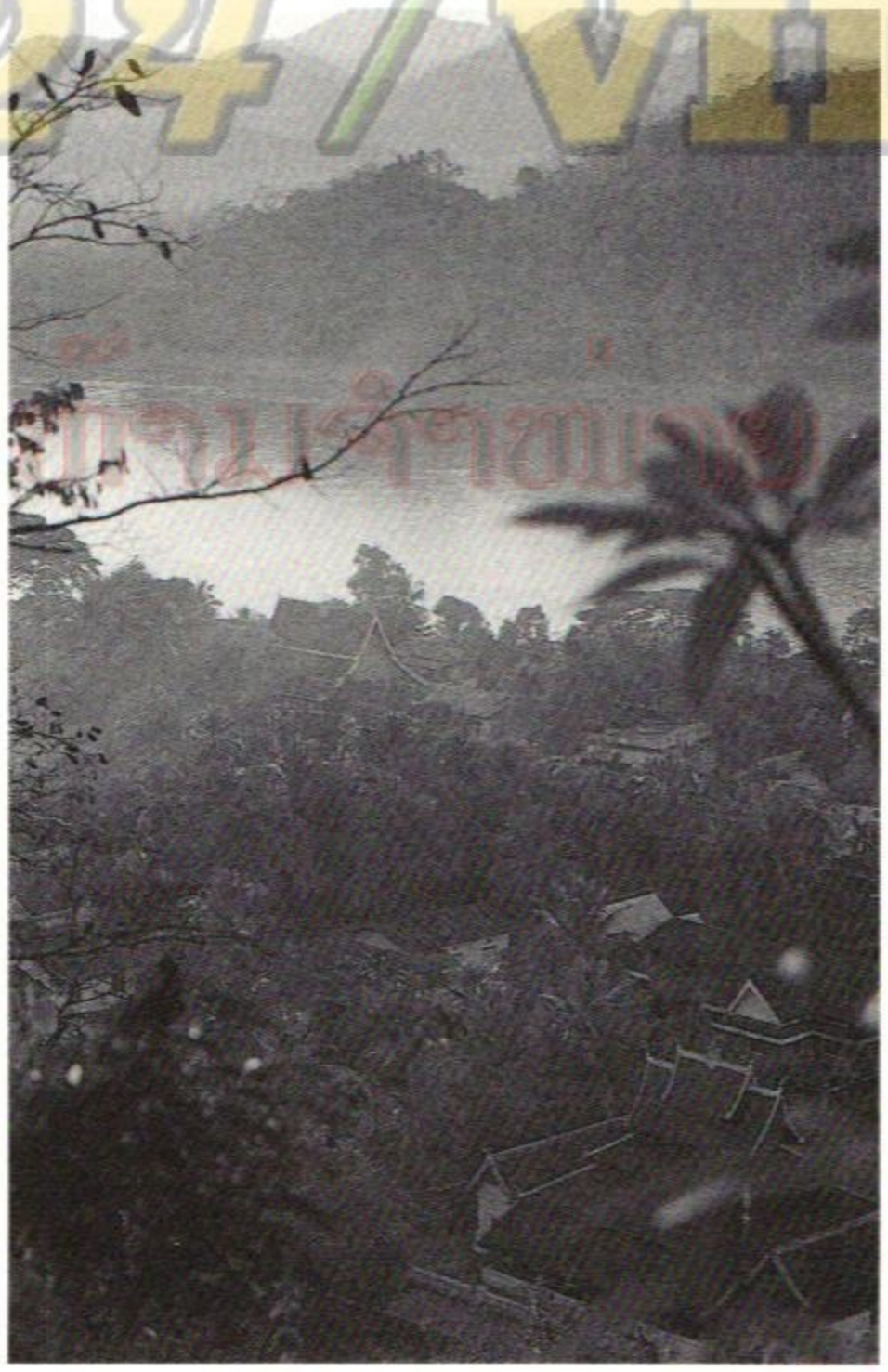
ルアンパバーンはラオスの京都や奈良である――。こんな風評を耳にするたび、いつかは訪ねたいと思っていたが、このほど、やっとその念願がかなった。

実は3年前に1度行こうと思ったことがある。4月のピーマイ・ラオ(ラオス正月)のルアンパバーンを見ようとその1カ月前に予約を申し込んだのだ。ところがヴィエンチャンからの飛行機は全部満席、ホテルも満員。しかたなく、陸路で行こうとしたら、現地の人から、山賊が出るかも知れないのでやめた方がいいと言われ、渋々断念せざるをえなかった。しかし、今はバスなどで問題なく行けるという。

ルアンパバーンのお正月は催し物の華やかさで有名である。古都で新年を迎えようと、全国各地からたくさんのラオス人が集まり、近年は海外からの観光客も多い。3日間の期間中、街は人々の熱気と笑い声で賑わう。だから、1カ月ぐらい前に思い立って予約してみても、時すでに遅しなのである。

ルアンパバーン――、首都ヴィエンチャンから、北へ約350キロの所に位置する古都である。14世紀にファーグム王がランサン王国を建てて以来、16世紀にヴィエンチャンに遷都し、3王朝時代をへて、やがて1975年王制が廃止されるまで、王都としてその栄華を誇った。ヴィエンチャンに都が移される時、黄金のパバーン仏が残されたので、ルアン(王の)パバーン(黄金仏)と呼ばれるようになった。

95年にユネスコの世界文化遺産に



写真右頁:プーシーの丘から望む町の佇まいは絶景である。メコンの畔に王宮博物館が見える。ここは、昔、王宮だった所である。
左頁右:文化遺産に指定されたルアンパバーンの町並みは、伝統の様式ににコロニアル様式がミックスされている。
左頁左:ワット・タム・プーシーには占いの石仏がある。軽々と持ち上げると願いが叶うという。

指定され、その文化や歴史的価値が脚光を浴びるようになり、今では観光客も増えた。遺跡など、個々の事物への指定はあるが「街」そのものが文化遺産に指定されるのは珍らしいという。

◆◆◆

12月2日、ヴィエンチャンから空路でルアンパバーンに向かった。約30分後、褐色の帯のように蛇行するメコン河が見えてくると、間もなく到着である。飛行機は尾根の間をくぐりぬけるように山間の小さな空港にすべり込む——。

昼下がりの街はひっそりと静かである。どの家にも軒先に赤い旗が立っている。ラオス人民革命党の旗である。実はこの日はラオスの独立記念日なのだ。この国が今も社会主義国であることを思い起こさせる風景である。しかし、とくに祝賀行事などを行うわけではないらしい。1975年の解放により現社会主義体制となったこの国であるが、お正月などの伝統行事ほどに民衆の心を動かさないのであろうか——。

「どこに行きますか?プーシーに登ってみますか」

同行したプッターがたずねた。

彼はかつて留学生として10年ほど日本に住んでいたことのある人だ。液晶工学を学んだというが、今は国に帰って通訳の仕事をしている。山梨県仕込みのジョークも飛び出すほど日本語が堪能である。

我々は迷わずプーシーに登ることにした。プーシーとは町の中心に位置する小高い山である。そこから町全体が一望できる。

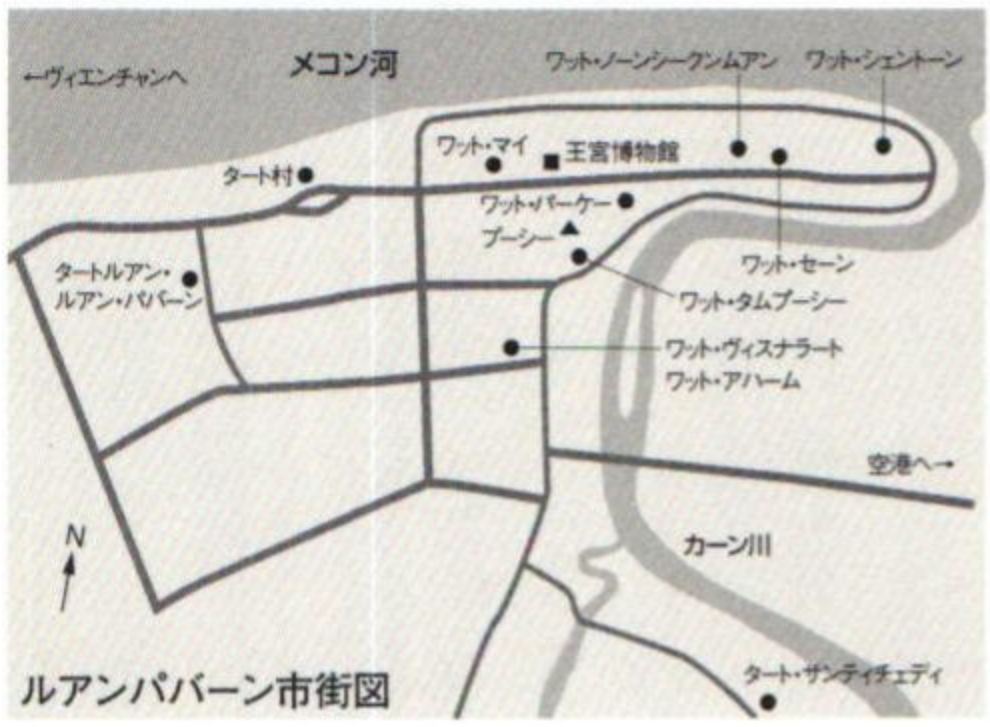
ルアンパバーンの町並みはもと王宮であった王宮博物館を中心に広がる。まわりを山に囲まれ、北の端にメコン河とカーン川が合流する、森と川に包まれた美しい町である。

王宮博物館の真向かいから一本の石段が延びている。そこを登ると、プーシーである。高さ150m、海抜700mだといわれる。

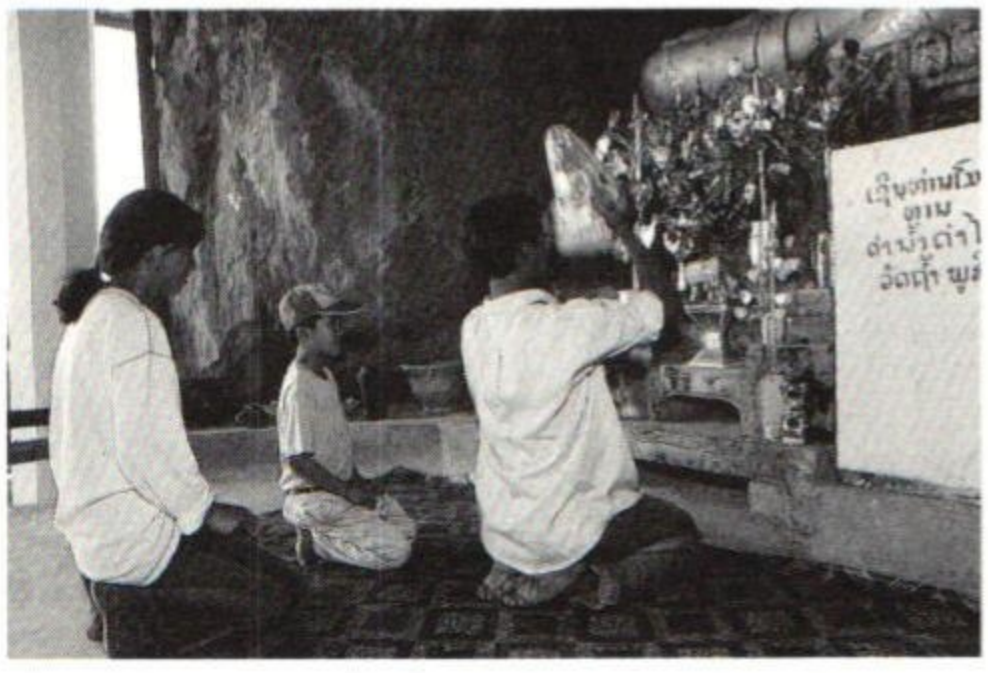
「ひぇーっ!どうしてラオス人って、こんな階段作るのかねえ」

プッターが悲鳴をあげた。プーシーの頂上までは329段の石段が続くのだが、どういうわけか、ラオスの階段というのはどこに行っても段差が高くて、うんざりしてしまう。これほど長い階段だと、辿り着くまで、さすがのラオス人でさえへとへとである。それだけに頂上からのすばらしい眺めにほっとする。

頂上は意外に狭く、チョームシーの仏塔が建っているだけなのだが、そこからの眺めは実に壮観である。太陽の光の向きが変化するとともにしだいに山々や河が色を変える。夕餉の支度であろうか、家々から天空に向かって煙がたなびいている。ここ



ルアンパバーン市街図





に流れているのは、近代的時間ではない。学者なら、神話的な時間が流れているなどと表現するところであろう。

たしかに、ここは神話の舞台である。伝説によると、ルアンパバーンの町の創設者は隠者の二兄弟といわれる。彼らはこのプーシーの山の洞窟に住み、この山頂で2本の柱を建てて天を祀ったという。プーシーの丘は、町の真ん中、王宮博物館の正面にあり、この伝承が語るように、天との通路、あるいは天そのものを象徴していると思われる。

山を王宮博物館の反対側に降りると、ワット・タム・プーシーがある。ここに安置されている仏像はシェンクァーンから運ばれたものといわれる。パ・シアンと呼ばれる占いの石仏があり、願をかけて持ち上げ、願がかなうときは軽々と持ち上げられるという。

●河の畔に太鼓が響いた

——伝説の寺、ワット・シェントーン

プーシーを降りて町を歩く。

王宮博物館のあるシェントーン通りには、たくさんの寺院が建っている。

黄金のレリーフが見事なワット・マイ。霊験あらたかで人々の篤い信仰を集めているというワット・ノーンシークンムアン。周辺がケー（まめ科の木）の森だったことから名付けられたというワット・パーケー。7mあまりの大きな仏像があるワット・セーン。

そして、東の端に位置するワット・シェントーンは、かつて古い王宮のあったあった寺である。

ドンドンドコドコ、ドンドンドコドコ——。シェントーンの境内にあるお堂では、僧侶が勢いよく合図の太鼓を鳴らしていた。2人でお互いに頭を剃っている僧侶もいる——。

由緒ある寺らしく、ここには、色々な伝説があるそうだが、この太鼓にまつわる話もある。その昔、鬼がやってきて、町の人間をすべて食べてしまった。王女だけは大太鼓に隠れたため、難を逃れた。やがて、タオカッタナームが王女を発見して助けたため、町はよみがえったという——。

「コニチワ！」

河から首を出しながら、一人の若い僧侶が、こちらに向かって日本語で挨拶した。ワット・シェントーンの裏側はすぐメコンが流れているのだが、暮れなずむ河のなかで10人ほどの僧侶たちが水浴びを楽しんでいる。川の水で歯を磨いている僧侶もいる。

「今日は水が出ない日だから、川でこうして過ごすんです。いつもこうしているわけじゃないんです」

さっきの僧侶が説明してくれた。日本のどこに住んでいるかとか、こちらも色々と質問を受けた。愛想のいいお坊さんである。

実は、この河辺一帯も由緒ある場所である。

1904年、ルアンパバーン王家最後の即位式が行われた時、新しくなる王は、メコン河をはさんでこの対岸にあるロンクーン寺に入り、8日の間、白衣を身につけ戒律を守って過ごしたという。そして最後の日、ブラーマンが王を招き、王位に就くために還俗するように言うと、王は舟に乗って川を渡った。途中、寺の前

写真右頁：1560年、セーターティラート王によって建てられたワット・シェントーン。様々な伝説が伝わる、由緒ある寺である。
左頁右：ワット・シェントーンの裏手を流れるメコン河では、お坊さんたちが水浴をしていた。
左頁左：早朝6時頃、僧侶たちは托鉢に歩く。通りには銀の器をもった村人が待機している。何百年と続いた伝統の行事が今日も行われる。



にある中州で最初の灌水儀礼を受け、次に舟を降りてワット・シェントーンに入るところで、二度目の灌水を受けた。その後、ワット・シェントーンで白衣から王の服に着替えた後、輿に乗って王宮へ向かい、王宮の前で三度目の灌水を受けたという。

東南アジアの各地に出現した王国や王朝の起源は、水の世界との結びつきを語っているといわれるが、ここにもその一例がある。そして、灌水儀礼は、死んで生まれ変わるという象徴的な意味を有するともいわれる。

母なる河と呼ばれ、親まれてきたメコンは、人々にとって生活の場であり、憩いの場であるのだが、もとより聖なる場でもあったのだ。

●銀細工師の一日がはじまった

ルアンパバーンの朝、鶏の鳴き声とともにしだいに夜が明けていく。

12月3日、朝5時過ぎ。あたりはまだうす暗い。タート村へと向かった。

ルアンパバーンは昔から銀細工が有名である。お店は市場とその周辺に集中しているが、かつてとくらべて数は減ったという。タート村には銀細工の数少ない伝承者がいるというので訪ねることにした。

町の中心に位置する、郵便局の前を南に向かって少し歩くと、右手一帯の地区がタート村である。約200世帯からなり、銀細工の村として知られた村である。その伝承者の一人パーイさん(72歳)を訪ねた。

タート村付近は、鶏の鳴き声が聞こえるだけで、ひっそりとしていたが、灯りがついて、どの家でも一日の生活が始まっている。玄関の門扉を叩くと、

「サバイディ(おはよう)」

奥から、パーイさんが出てきて、鍵をあけてくれた。

家の裏手にある別棟の厨房では、娘さんたちがご飯を炊いている。勿論、自分たちが食するのだが、お坊さんたちの托鉢に施すためでもある。

パーイさんの1日は、僧侶への布施から始まる。いや、これがラオスの人たちの1日の始まりなのである。ふかふかに炊きあがったもち米を銀の器に移すと、パーイさんは、パービエンというショールを肩にかけて、家を出る。表通りには、すでにいち早く女性たちが待機していた。

しばらくすると黄色の衣をまとった僧侶の一群がやってきた。女性たちは立ち膝をついて居ずまいをただし、銀の器からご飯を施す。パーイさんも施す。また、別の寺院の僧侶たちが列をなして歩いてくる——。

こうして、黙々と、何百年と続いてきた朝の行事が繰り広げられる。僧侶はこの施しに対しお礼の言葉を言うことなど決してありえない。なぜなら、布施は、人々が功徳を積んで、天上界に生まれ変わるために行うものであり、返礼などされると、せっかくの功徳が失われてしまうと信じられているからだ。布施をさせてもらっているのである。

この他にも、自ら出家したり、寺に寄進したりするなど、功徳を積む方法があるが、古代インド時代から続く、上座部系仏教圏にみられる在家者の信仰の姿である。

——家に戻ると、パーイさんは玄関





の脇の樹木にまつられた神棚に、托鉢で残ったご飯をお供えし、手を合わせて祈る。そして裏の工房に行って、銀細工の窯に種火を入れた。

こうして、匠の一日は、ブッダとともに、カミとともに始まった。

●パーイさんと〈もてなし家族〉

「さあ、一緒に食事にしよう」。

7時頃から、朝食がはじまった。工房のあるテラスには机と椅子があって、そこに家族全員が揃って、一緒に食事をとるのだ。我々もご相伴にあずかった。

パーイさんと奥さんのカーオさん。長女ソムチットさん(38歳)。その夫のトーウムサワン(38歳)さん。孫(長女の子ども)のスティダちゃん(12歳)。アヌシット君(7歳)。そして、次女のマンボンさん(23歳)の7人家族である。それにヴィエンチャンに住んでいる姪のブアチャンさんが来ていた。

「これはルアンパバーンでしか食べられないのよ。めしあがれ」

マンボンさんがすすめてくれた。彼女は自宅の一室を使って美容師の仕事をしている。すすめられたのは、カノン・モートーというお菓子である。この地方では油で揚げた菓子類が多い。

「日本ではバスケットボールは盛んですか?……」

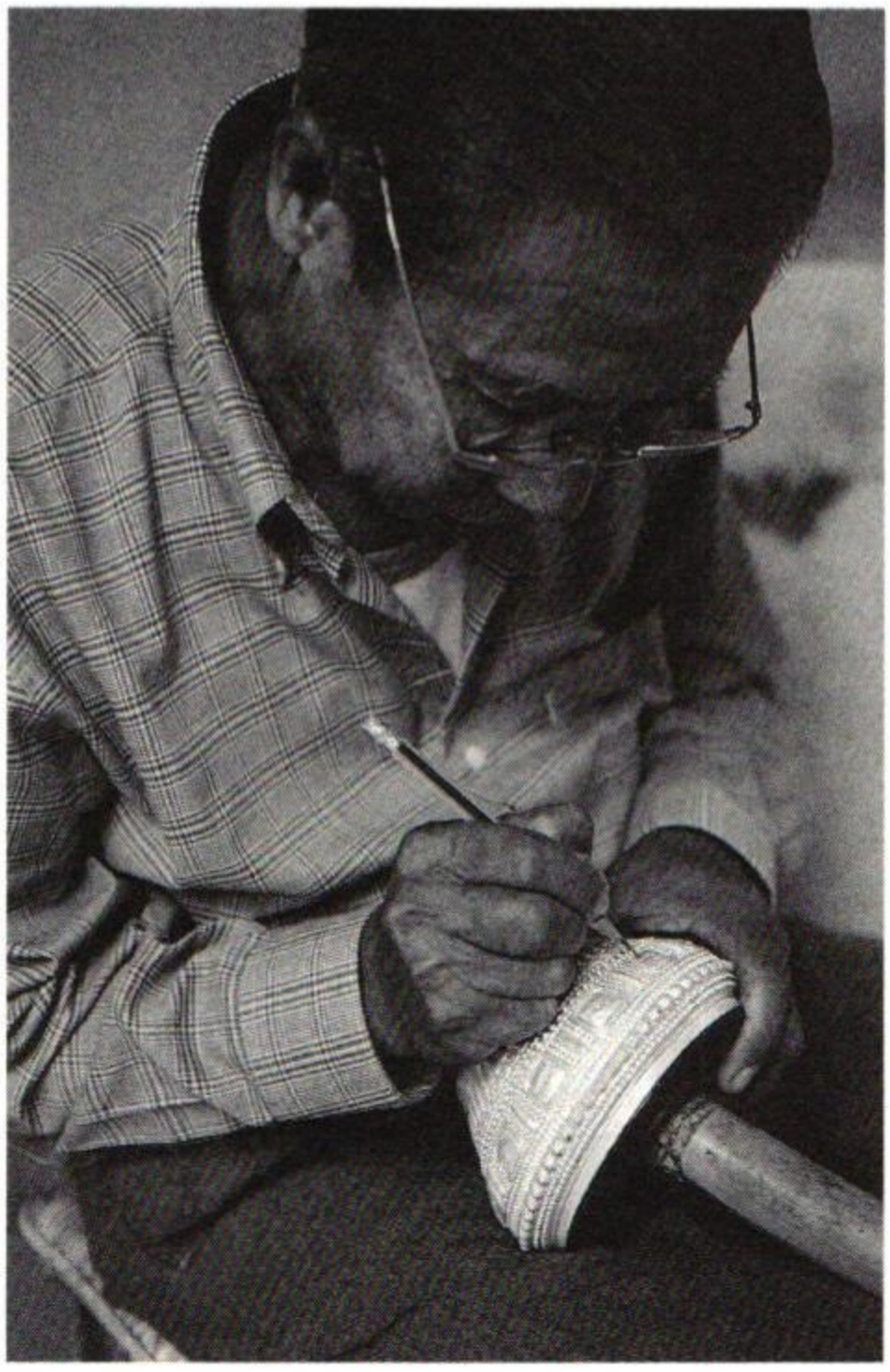
生野菜をちぎりながらトーウムサワンさんが質問する。彼はスポーツジムでバスケットボールの指導者をしているという。道理で長身と思った。奥さんのソムチットさんは小学校の先生。どうやら教育者同士として引かれ合って結ばれたようだ——。

この歴史の町にバスケットボールを教えるジムがあるということ自体、ちょっと意外だったが、たしかに新しい文化も入り込んでいる。町の中にはディスコもある。古都の夜はひっそりと静かなのかと思っていたが、夜11時頃まで、若者が路上で歓声をあげていたりする。聞いたところ、彼らはメコンの川向こうの村の青年たちで、深夜までディスコで踊りを楽しんで、また、舟で村へ帰るのだという。

新旧の文化の同居がラオスの特色でもあり、現実である。

勿論どこの国にも言えることなのだが、この国の場合、それがきわだっている。

たとえばヴィエンチャンなどの都市部では、コンピュータなどの最新機器が使われているが、反面、ラオスではいまだ電気が通っていない地域も多い。そんな地域では、日本人には昔懐かしい謄写版(手動式の簡易印刷器)が活躍している。ラオス教育省とSVAが協力して全国の小学校に配布されようとしているのだ。この印刷器はもともと日本で



写真右頁:銀細工を今に伝えるパーイさん。伝統的な技法で作る人は、この町でたった2人だけになってしまったという。火の中に銀を入れて熱し、取り出して打つ。これを何度も繰り返し、圧延する。そして細密な絵柄を打ち込んでいく。
左頁:パーイさんの銀細工の作品。器は、お祭りや寺院に行くときなどに用いられる。①カン②オーリャン③カンキェン④オーキェン⑤ライター⑥キッポン(髪どめ)

誕生したものなのだが、本家では廃れ、この国では今も重宝されている――。

「昔ながらのやり方でつくる人は、いなくなってしまってね」

朝食ののち、仕事にとりかかりながら、パーイさんはぽつりと語る。伝統的な技法で銀を細工する職人さんは、今では、ルアンパバーンで二人しかいないという。パーイさんはその一人である。

窯(タオ)に風を送ると、炭火が起きてくる。

「うちは先祖代々銀細工で生計をたててきたんだよ。わしは、父親から教えてもらって、24歳ぐらいの時から始めたかなあ」

火の中の器に銀を入れて熱し、取り出して、打つ――。また火の中に入れて、打つ。これを何度も繰り返して圧延していく。

そして、次に細密な絵柄をコツコツと打ちこんでいく。これには寸分の誤りも許されない。集中力と根気のいる仕事である。

「これはオーキェンという器。5日間でできあがる……。250グラム……。店で買うと50ドル……。オーというのは、十二支ということだ。十二支の動物の柄を打ち込んである」

――1人前になるにはどれぐらいの期間かかるもんですか?

「5、6年でなれるさ」

――どんな修業をするんですか?

「手本は師匠の作品。それを見て学ぶんだ。とくに下絵があるわけではない。自分のイメージで覚える。サイズをはかる物差しがあって、それを目安にしてつくるんだよ」

――後継者はいるんですか?

「近くの村の若い衆に教えているんだが。今日もやってくるはずだよ。……でもこの時間になって来ないところを見ると、今日は来ないのかもしれんな」

そう言って笑った。

パーイさんは工房の庭に作品を並べて見せてくれた。

①カン(完成まで20日間ぐらいかかる)②オーリャン③カンキェン④オーキェン⑤ライター⑥キッポン(髪どめ)

お祭りや、寺院にお参りに行くときなど。つまり聖なるハレの時、この銀細工の器が用いられるという。

「わしのいのちもそんなに長くないが、みんなの信仰心がなくならないかぎり、銀細工は続いていくだろうよ」

パーイさんは、そう語ったきり、静かに銀を叩き続けるのだった。

●プーニュー、ニャーニューは わしらの先祖じゃ

――「さあ、今度は日本のことも聞かせてくれるかい」

気がつくともう昼である。再度「一緒に食事を」とすすめられ、昼食まで頂戴しては失礼と思って辞退したのだが、パーイさんは、こう言って引き止めるのだった。

「遠慮しないでいいのよ……。日本人はすぐ嘘言うんだから」。

姪のブアチャンさんがそう言うと、みんなが笑った。

何を勧められても、私が「とてもセープ(おいしい)」と言って、それでいて、少ししか口にしなかったものだから、そのことをみんなは気にしていたらしい。





彼女は、ヴィエンチャンで日本人と一緒に仕事をしているせいか、日本人のことをよく知っている。彼女は悪気で言っているのではない。日本人は心にもないことをすぐ口にしてしまう。つまり、もっとホンネでつきあいたいのに、と言いたいのである。

たしかに、日本人は相手を慮ってお愛想を言うことがある。ホンネとタテマエの使い分けだ。でも彼らには虚飾としか映らないようだ——。

「今度はピーマイ（お正月）の時に来るといい。色々な行事があるからね」

「プーニュー、ニャーニューという仮面をかぶった神さまを見ることができるよ」

パーイさんは、ルアンパバーンの新年の伝統行事について、話してくれた。

ラオスの正月は、他の東南アジア諸国と同じ「水かけ祭り」である。太陽暦ピーマイの期間中だけは無礼講。町に出れば、水のかけっこである。

1日目の午前中、ルアンパバーンの人々はメコン河の対岸の、ハートサーイ・ムン・クンに渡り、ワット・シェンメンに詣で、さらに聖なる水に触れるためにその奥にある洞窟に入る。そのあと、川岸に出て、砂山をつくり始める。インド思想に出てくる「世界の中心の山」を象徴しているといわれる。

しかし、何と言っても圧巻なのは2日目と3日目に行われる新年の行列である。

2日目はワット・タートからワット・シェントーンまで、3日目は逆のコース。2キロ足らずの距離であるが、2時間以上の時間をかけて歩く。

この行列では、ちょうど秋田のナマハゲのように、赤と金の獅子の面をかぶった3人が歩く。その後ろに小型トラックが続き、陽気な音楽を奏でる。その音楽に合わせて獅子は奇抜に踊る。次に、美しく着飾った少女たちが続き、そして、山車に乗った美女たちが花びらと笑顔を振りまきながら続く。山車のあとは、一般の人たちが、ラオ・ラオというラオスの地酒を飲み、踊りながら、そして沿道の人に水をかけられながら賑やかに歩いていくという。

パーイさんが語ったプーニューとニャーニューと言うのは、実はこの行列を練り歩く、二人の赤い獅子の面をかぶった存在のことをいうのだ。

●プーニュー、ニャーニューは ナマハゲに似ている？

「プーニュー、ニャーニューというのは、この土地の先祖なんだよ」

プーニュー、ニャーニューとは、ラオス語で、「ニューおじいさん、ニューおばあさん」という意味である。

真っ赤に塗られた大きな顔。濃い眉毛、大きな目、鼻、耳、そして口。その口があんぐりと開くと真っ白な歯がのぞく。

よく見ると片方は髭をはやしている。そちらがプーニュー（ニューおじいさん）である。胴体は足元まで延びた、木の繊維でできた蓑をまとっている。

地域の人々から篤く信仰され、そして親しまれているプーニュー、ニャーニュー。王家とのつながりも深く、かつては、王様の即位式の時にも登場したという。しかし、今は、ふだんは



お寺の中にしまわれ、お正月の時しか姿を現さない。

この存在に関して、様々な伝説が伝えられている。

彼らは、この世の始まりにおいて、大地を創造した原初の夫婦であり、また、人々のために犠牲になり、人々を守護してくれる存在といわれる。

彼らはかって、地上をおおって人々を苦しめていた大木を切り倒し、その下敷きになって人々を守ったと伝わる。別の伝承では、この地を荒らしていたライオンを退治したが、その時に負わされた傷のせいで亡くなったという。

「日本のお正月はどうだい？……」

「ナマハゲと言って、似ているものがあります」

「ナ・マ・ハ・ゲ？」

秋田のナマハゲのことを話したら、パーイさんは関心を示し、是非その話を聞かせてほしいと言う。

ナマハゲとは、ご承知のように秋田県男鹿地方の正月に姿をあらわす、異形の存在である。この由来には諸説があり、はっきりしていないらしいが、男鹿の人々の信仰に根ざした地方色豊かな鬼である。

――ウォーウォー、泣ぐ子いねがー、親の言うごと聞かね子いねが――、もしいだらば貰ってゆく

――ウォーウォー、ここのエ(家)の初嫁、朝起きするが、すねがー。もしすねばまじないしてやる

今でも、大晦日の夜になると、ナマハゲが家々にやってくる。蓑の胴体に真っ赤な顔、大きな目、鼻、そして大きな口をしていてところは、プーニューニャーニューと似ている。

と言っても、中に入っているのは地域の若い衆である。12月になると、みんなで集まって、面や新藁で蓑や藁沓をつくったりなど、準備をはじめる。そして、大晦日の夜になると、公民館に集まって装束をつけ、神官のお祓いをうけ、お神酒をいただいてから集落へおりていく。

こうして、家に入ってきたナマハゲは、出刃包丁や鍬を振り回して歩きまわる。

子どもたちは、恐怖と好奇心で興奮し、中には泣きながら逃げ回る子もいる。

今年結婚したばかりの新婦も心なしか、不安気な面持ちになる。ナマハゲがやってくるのは、子どもたちと新婚の人々が対象なのである。子どもたちには、親の言うことを聞いて、怠けずに勉強するように、新婚者には、家庭を守り、怠けずに働くように戒めることで、家族の一員、集落の一員としての自覚を促すのである――。

「たいそう、乱暴な神さまだね」

パーイさんがつぶやいた。

たしかに、これだけを聞くと、ただ子どもや女性を脅かすためだけにやってくるように見える。

しかし、ナマハゲは、元々人間に幸福をもたらすためにやってくるのだ。山の彼方からやってくる我々の先祖であり、カミさまであるとも言われる。それが証拠に、ナマハゲが家に入ってくると、まず、家の主人の所へ行って「新年おめでとう」と、新年の到来を祝福し、豊作・豊漁に恵まれることを約束することになってい



写真右頁：町の中にあるシーターン小学校では、算数の授業中であった。子どもたちが黒板に答えを書き込むと、教師が大きな声で励ましていた。
左頁：毎年4月、お正月の行列に登場するカミさま、プーニュー(左)とニャーニュー(右)。一見ナマハゲと似ているが、よく見るともっと優しい顔をしている。

る。そして、面白いことに、家の主人が「お名前は何と言うしか」と尋ねると、「お山の鬼でヂヂイだ」「お山の鬼でババアだ」と答えるという。おじいさん鬼とおばあさん鬼なのだ。まるで、日本のプーニュー、ニャーニューではないかと思いたくもなる。

プーニュー、ニャーニューとナマハゲ。新年になると、他界からやってきて、人間に幸福をもたらし、そして、地域の一員として、家族の一員としての結束を促す来訪神――。そこに民族を越えた共通点を感じる。

「日本のお正月にも、赤い顔した神さまが来るんだね……」

パーイさんは、初めて聞く日本の習俗に感心した様子である。

●プーニュー、ニャーニューに会わせてあげよう

「せっかく来たのに、見られればいいのだが、お願いしたら見せてもらうことはできないだろうか」

「私たのんでみようか」

そばにいたブアチャンさんが語った。

お正月にしか登場しないプーニュー、ニャーニューがしまわれ、祀られているらしい。

祠は高床式になっていて、梯子を登ると、白いパービエンを肩に提げた一人の村人が出てきた。トンワンさん(67歳)、この祠を管理する副祭司であった。ふだんは、県の仕事をしている役人だという。

中に通されると、板敷きの広間になっていて、奥の方がカーテンで仕切られている。どうやら、そこにプーニュー、ニャーニューがしまわれているらしい。

入り口のすぐ左の一角には祭壇がしつらえられ、そこに向き合って座るよう促された。トンワンさんは、線香をともし、儀式がはじまる。言葉を唱え、しばらく祭壇に向かって祈りはじめた。我々も求められるまま、数度、一緒に床に額ずいて拝礼した――。精霊にお願いとお許しを乞う言葉のようである。

「ここが、プーニュー、ニャーニューをおまつりしている所です――」

「プーニュー、ニャーニューは、王様の先祖であり、守護霊です。そして、王国



写真右頁:ふだんプーニューとニャーニューがしまわれている祠のあるワット・アハーム。
左頁:プーニュー、ニャーニューご開帳の儀式。祭司はトン・リーさんという78歳の老女が担当した。18年前、知らない人がやってきて、「あなたが祭司としてカミ様から指名された」と告げられたという。

全体、ルアンパバーンの町を守ってくださるカミさまでもあるのです。天のカミさまで、ピー(精霊)の王様でもあります」

プーニュー、ニャーニューがどういう存在であるのか、説明が続いた。

「お正月と祭りの時しか、ご開帳しないことになっています。しかし、あなた方は信頼できる方々と思われます。今カミさまにお願いしたので、もし、どうしても拝観したいのなら、できます」

「ただし、儀式を行い、一緒に参加してもらわなければなりません。それでもいいですか?」

「是非お願いします」

そして、明朝、8時30分まで、この場所に来るように言われた。儀式を執り行い、そのあとで、プーニュー、ニャーニューと対面させてくれるという。これから、儀式の役割を担う人たちに連絡をとり、供物を揃えたり、準備をはじめるという。

我々のために特別にご開帳してくれることになった。我々が信頼に値するからというより、頼んでくれたパーイさんやその知人が、よほど信頼できる筋だったようだ。

思いがけず貴重な文化遺産に対面できる喜びと緊張感に我々は興奮していた。

その帰り道、我々の乗ったトゥクトゥクがエンストして、路上で立ち往生してしまった。

「プーニュー、ニャーニューのせいかな?」

「カミさまなんだから、そんなことしないさ(笑い)」

ブアチャンさんと運転手がそんな言葉を交わしていた。その後、旅の途上で、不思議なことやちょっとしたトラブルがあると、しばしば、こう言って顔を見合わせる我々であった。

●今日からカミさまが守ってくれる

――翌朝、8時20分頃、ワット・アハームに着いた。

いよいよ、プーニュー、ニャーニューのご開帳である。

祠に着くと、すでに10人ぐらいの村人たちが来ていた。

この人たちは、すべて祭祀をとりしきる祭司(クワン・チャム)の一族である。誰でも祭祀の仕事を担当できるわけではない。先祖代々、この一族の人だけしかできないことになっているのだ。

「さあ、中にお入りなさい」

促されて入場した。

祭壇の前に、祭司が、そして隣に副祭司のトンワンさんが坐っていた。祭司は、白髪の老女であった。

祭壇の前に、鶏やお菓子やお神酒などが供えてある。

奥には一族の方々が座っている。小さな声で、祭司の祈りが始まった――。

プーニューニャーニューへ、お願いとお許しを乞う祈りである。

我々も、一緒に床に額ずき、祈る。

言葉の意味はわからないが、我々の旅の安全と、将来の幸福も祈って下さったようである。

どれぐらいたったであろうか、式の終わりが告げられ、一族の若い人たちによって奥のカーテンが開けられた――。



そこには大きな木の箱が置いてある。

徐に蓋が開けられ、いよいよ、原初の神々が姿を現わす。

「ああ」と、一人の若者が声をあげた。何が起きたのかと思ったが、箱の中で無数の蟻がざわめていたのだ。急いで殺虫スプレーを撒くのだった。

間近に拝観するプーニュー、ニャーニュー。赤い顔に、大きな目。

こうして見ると、牙がはえて威嚇的なナマハゲの形相より、はるかに優しい面立ちである。

プーニューとニャーニューには、もう一人、別の獅子の仮面がつき従っているのだが、これはシンケーオ・シンカム（水晶の獅子・黄金の獅子）と呼ばれ、この夫婦が、七人の息子に土地を分け与えた後、ヒマラヤの森に分け入りつかまえたとされ、プーニュー、ニャーニューの養子であるともいわれている。

「誰がどれを担当するかもちゃんと決まってるのよ」

そばにいた一族の女性が教えてくれた。

若い衆が、それぞれ自分が担当している仮面をかぶって見せてくれた。

そして、踊って見せてくれるのだが、縦と横に体を揺するだけで、とくに奇抜というわけではなかった。ただ、口があんぐりと開くところが、可愛らしくさえ見える。

最後に仮面を手に持たせてくれたが、さほど重くは感じなかった。ただ、これをかぶって何時間も練り歩くのは、相当の重労働のはずである。

「プーニュー、ニャーニューは、ラオス人の先祖で、天から大地につながっていた糸が切れた時に、この二人が結び直してくれたと伝えられているんです」

さっきの女性が語る。

何やら、旧約聖書か芥川龍之介の小説にでも出てきそうな話であるが、このカミさまについては、色々な伝説があるようだ——。

ことに不思議だったのは、祭司の継承についての話であった。

その日、祭司をつとめたのは、トン・リーさん（78歳）という方である。

彼女にいつ祭司になったのかたずねると、次のように答えるのだった。

「どこからか、知らない人がやってきて、〈あなたが神さまから指名されたよ〉と告げられたのです」

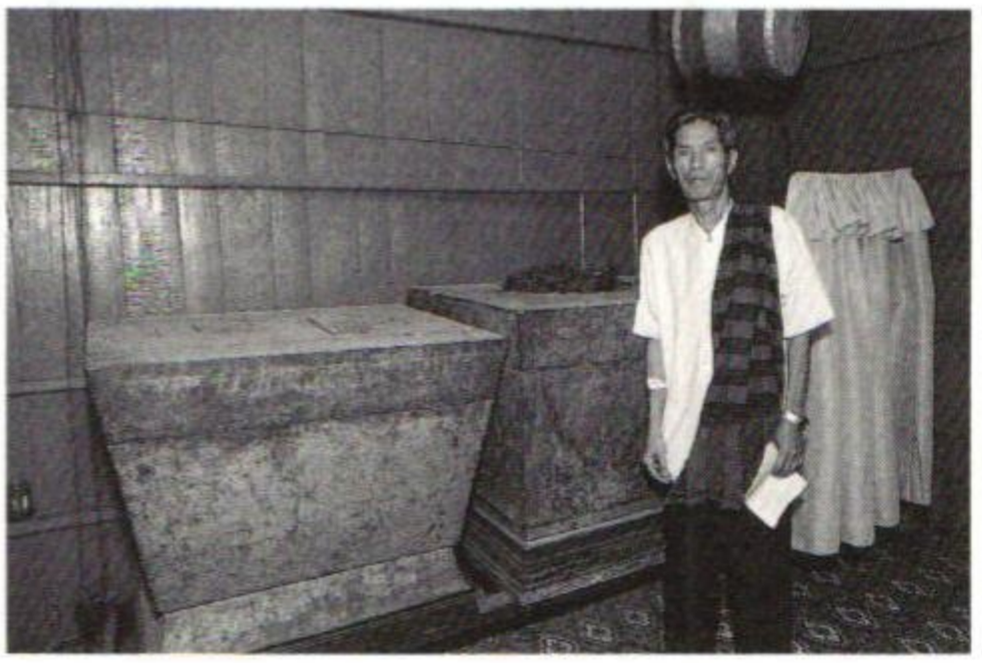
背中を向けたまま老女は小さな声で呟いた。その時彼女は50歳。それ以来、この祭司をつとめているという。

祭司は、代々、そういう形で継承されてきたという。どこからか、まったく見ず知らずの人がやってきて、突然告げられる。だから、いつ、誰に継承されるのか、まったく知る由がないのだという。人間の側が決めるのではなく、カミ様の側が決めるということだ。

トン・リーさんは、とくに神々の声が聞こえるというわけでもなく、神がかりするわけでもないという——。

「さあ、表に行きましょう」

祠の回廊で宴がはじまった。カミさまにお供えしたものを、お下げして一緒に会食するのだ。日本流に言えば「直会（なおらい）」である。祭りのあと、カミさまと一緒に飲食する儀礼であ



写真左：儀式を終えて、姿を表した神々。左からプーニュー、真ん中が、黄金の獅子シンケーオ・シンカム、右がニャーニュー。この祭祀を担当できるのは、先祖代々、祭司の一族だけである。誰がどの仮面をかぶるかも決まっているという。
右：プーニュー、ニャーニューが奉納されている木の箱とトンワンさん。

る。これが終わって、はじめて、この儀式は終了するのだ。

ラオ・ラオというラオスの酒の廻し飲みがはじまる。

回されたら、必ず飲まなければならない。それが流儀である。しかし、まともにつきあうと、大変なことになる。相当な度数なので、完全にグロッキーとなってしまう。目を盗んで、脇に適当に捨てるのがコツなのである。いや、それも、ラオ・ラオの飲み方の流儀になっているのだ。

若者たちが、それぞれ自己紹介してくれた。プーニューをかぶっていたのはチャンタリーさん(45歳)。観光の運転手をしているという。ニャーニューの仮面をかぶったのはワッ(ト)さん(19歳)、煉瓦職人である。ライオンの面をかぶったのはペットさん(27歳)、家具職人。そして、さきほどの女性はソンチットさん。ワッ(ト)さんのお母さんであった——。

「はい、これはお守り。持っていきなさい。とても霊験あらたかだよ」

トンワンさんが、何かの毛を赤と白の糸で結んだものを手渡してくれた。

プーニュー、ニャーニューの蓑の一片を結んだものだという。

「以前も日本人にこれをあげたことがあったんだが、その後、〈地震に遭遇したが、助かった〉と連絡が来たよ。だから、きっと守ってくれるよ」

プーニューニャーニューは、霊験あらたかとされ、土地の人の篤い信仰を集めている。定期的な祭祀のほかに、どこか旅に出る時とか、願い事がある時は、祭司に頼んで供え物をしてもらう。女性の産後明けや結婚の時もお供え物をして祈ってもらうという。

パーイさんも、かつて大病した時に、祈ってもらったらすぐ治ったという。ブアチャンさんが教えてくれた——。

こうして、プーニューニャーニューの拝観を許されたこの日、我々にとって忘れがたい日となった。

後日談になるが、帰国後、このことをラオスに詳しいある知人に早速伝えた。すると、「信じられない」と言ったきり、しばし絶句してしまうのだった。

その話によると、お正月以外、プーニュー、ニャーニューを人に見せることなど絶対ありえないはずだという。それどころか、以前は奉納している祠に近づくことさえできなかったという。それほど、厳しい戒めがあったらしい。「伝統を守る気概が失われてきたのだろうか」と、その人は彼らの変化を真剣に心配していた。

そんなに大変なことであったかと、こちらとしては只々驚くばかりであった。そして、何百年の伝統を破る一役を買ってしまったのだろうかと、戸惑いも隠せなかった。それにしては、あまりにも自然に対面できたのはなぜだろう？いや、我々の意気に感じてカミさまは道を開いてくださったのだろうか……？

我々としては何とも不思議としか言いようがないのである——。

あの日以来、財布の中にあの〈お守り〉を忍ばせているのだが、このことを知って以来、尚一層その重みが感じられてならないのである。



メコンの畔の匠たち



●ルアンパバーン名物「あげまん」の老舗

ルアンパバーンには、他の地域にはない名物がある。

カノン・モートーというお菓子も、おすすめの一つである。

いわば、餡の代わりにバナナが入った「揚げ饅頭」と言えばよいだろうか。

浅草の雷門あたりで売っている「あげまん」は、一見天ぷら風なのだが、ここのは、小さな真ん丸のお饅頭である。

「そりゃみんな大好物さ。市場に出すとすぐ売り切れてしまう。ヴィエンチャンにおみやげに持っていくと喜ばれるよ。見ていきな」

こう語る銀細工師のパーイさんに紹介され、パーイ家のすぐ裏手にあるブンサイさんの家にお邪魔することになった。

パーイさんの家の隣はもう別の村、フーシアン村である。この村はおよそ180世帯。昔からお菓子づくりの村として知られてきたらしい。しかし、今では、ブンサイさんの家でしかつくらなくなったという。

12月5日、朝5時過ぎ、ブンサン家にうかがうと、お菓子づくりはすでに佳境に入っていた。

外はまだ暗いのだが、電気の灯りの中、家族総出。時おり、吹き出す汗をふいている。

「朝4時頃からつくり始めるんです」

ブンサイさんが言った。

この家では先祖代々、このお菓子をつくっている。もち米のなかにバナナを入れて、やしの実、砂糖でまぶし、そして油で揚げる。つくり方自体は簡素であるが、1日千個に及ぶという数をこなすのは大変である。

「わしかい？26の時からつくってるよ」

ファンさんは今年76歳。ブンサイさんのおとうさんである。菓子づくりを始めて50年だという。木の皿に水を湿らせて、餅米をのせて延ばす。そして、団扇であおいで、籐のお櫃に詰める。

「私は中学3年生、この子は5年生。毎朝、学校に行く前に手伝っているんです」

かたわらでは、孫たちがしゃがみ込んで手伝っている。もち米のなかにバナナを詰めている。それを今度





はおばあさんが油で揚げるのだ。

家族みんなが、何らかの役割を担当している。

市場で買うと1個100*キープ。ちょっと高いが、とてもおいしい。ただ、脂っこいので、そんなにたくさんは食べられない。

こうして、朝4時頃からつくり始め、できあがったものからすぐ市場にもっていく。市場には家族の誰かがすでに出かけていて、ちゃんと場所を確保し待機しているのだという。

パーイさんも言っていたように、このお菓子は地元の人だけでなく、ヴィエンチャンの人たちにもとても人気で、朝6時頃、市場の店に並べると、たちまち売りきれてしまうという。次々につくって、結局、1日に800から千個ぐらいつくるのだが、いつも完売だという。

もう一つの部屋には、できたてのカノン・キノウ(ねずみの糞)と呼ばれるお菓子が並べられていた。小麦粉と餅米と砂糖でつくるお菓子だという。

「行って来るぞ」

6時過ぎ、ファンさんは、肩にパービエンを提げて、お寺に向かう。できたてのお菓子を、彼らの寺であるワット・フーシアンに持っていくらしい。

朝一番のお菓子は、僧侶に捧げるのだ。

●手漉き紙をつくる村
——サンコーン村

その後、ルアンパバーン周辺の村をいくつか訪ねることにした。

村の匠たちを訪ねるためである。

「どうだい。乗らないかい」

鳥打ち帽をかぶった小太りの男が寄ってきた。トウクトゥクの運転手である。

髭面でちょっと物騒な感じがしたのだが、

「彼は大丈夫です。地理に詳しいし、時間も守る人です」

プッターが、以前、頼んだことがある運転手とのこと。安心だというので、1日チャーターすることにした。カンムーンという男であった。

ホテル・ニュープラバンの前の空き地には、いつもモン族の女性たちがずらりと品物を並べ、手作りの織物や土産物などを売っている。そして、その脇はトウクトゥクの溜まり場になっている。旅行者と見ると、運転手たちが声をかけてくる。ちょっと遠出をするなら、貸し切りとしてチャーターしたほうが便利である。交渉しだいだが、だいたい5万キープぐらいで1日どこへでもつきあってくれる。

午前7時半過ぎ、町を出発し、河沿いの道を北上する。もうもうとたちのぼる砂埃をかぶりながら、約40分もするとサンコーン村に到着する。ここは手漉き紙を創っている人たちがいる村である。

車を降りて、一軒の工房に案内された。門を入ると、広い原っぱの中に紙が整然と干してある。そして、じゃぶじゃぶと音をたてながら、ちょうど作業をしているところだった。

「この木からつくるんです」

若い男が、そばにある一本の木を指さした。その家の長男でゆくゆくは、父親の後を継いでこの工房を背負っていくという。

この木はポーサーという木で、ここ



写真右頁上:ルアンパバーン名物、カノンモートー。バナナ入りの揚げ饅頭である。小さく真ん丸でとてもおいしい。が、脂っこいので、そんなに沢山食べられない。
右頁下:炊きあがったもち米を木の皿に移すファンさん。
左頁:もち米の中にバナナを詰めるのはお孫さんの役割。
*レート:1円が35キープ(98年11月現在)

で創っている紙はチァサーと呼ばれる。「チァ」は紙という意味、「サー」は木のことである。1キロ1800キープするらしい。

ドラム缶に皮を剥いだポーサーと水と灰を入れて、ぐつぐつと柔らかくなるまで煮る。

夕方6時から翌朝8時までかかる。古い木ほど時間がかかるという。以前は、薬品を使ったことがあるが、今は使っていないらしい。

そして、次に煮あがって柔らかくなったポーサーをたたく。

水を張った型枠に、ポーサーを入れてのばし、均等の厚さににになるように水の上を静かにたたくのだ。

そして、均等になったら、外に干して乾燥させる。

ここでは赤い花を散りばめた紙もつくっている。

この花はドックティアというらしいが、南国の陽射しのような、ピンクがかった鮮やかな赤が実に美しい。あるいはブーゲンビリアと同じ種類かもしれない。

ふつうの紙は1日100枚、花の入った紙は10枚ほどつくるという。

「仕事ですか?朝は、7時半から11時半まで。午後は1時半から4時半まで働いてます」

「私は10歳の時にならいました。昔はお母さんやおじいさんもやっていたもんです。私の長女は学校の教師ですけど、出勤前に手伝ってくれるんです」

水の中のポーサーを静かにたたきながら、アンポンさん(65歳)は語った。

彼女はこの工房のあるじの奥様である。

工房の敷地の中に大きなショールームがある。ここでは、乾燥した紙にアイロンをかけ、紙をカットする最終工程が行われている。

そこで、作業しているのが、この工房のあるじ、タン・マ・ニップンさん(73歳)であった。

ショーウィンドウの中には完成品が展示されている。

ドックティアの赤い花びらが入った表紙のノートがひときわ目を引く。

ノートブックを開発し、作り始めたのは9年前からで、最大のヒット作だという。

「売れ行きですか?モンの人たちがよく買いに来ますが、ぼつぼつです。お客さんも時々来るけどそんなに買ってくれるわけじゃないし……」

ニップンさんは語る。

モンの人たちは、アヘンを吸うためにこの紙を使っているのではないかというが定かではない。

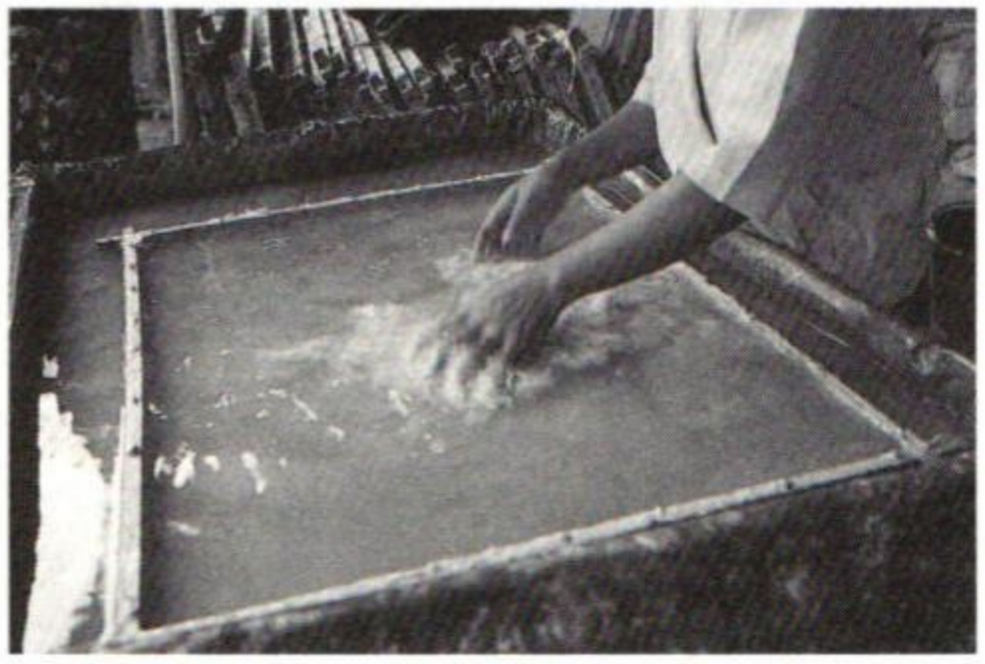
このチァサーという紙は、日本で目にする和紙とくらべると、はるかにボッテリとして厚手である。

最近、日本ではタイ楮をはじめ、東南アジアの楮を輸入しているときくが、日本の倍の早さで成長するため、強靱性には不安が残るといわれる。繊維の間に入り込んだ脂肪分が墨をはじいたりと書道用としては難点を示す場合もあるのだという。

たしかに、日本人は紙にこだわってきた民族かもしれない。昔の人は障子や提灯や行灯など、光と灯りの空間をつくるために紙を利用してきた。そして、和紙に柿渋や油を塗って雨具にした。最近は和紙デニ



写真右頁右:ポーサーという木からつくるこの紙は「チァサー」と呼ばれる。ドラム缶でポーサーを煮て、きれいな水に晒す。次に型枠に水を張り、ポーサーを敷き詰め、軽く叩いて漉いてゆく。
右頁左:乾いた紙を綴じてノートブックを製作する、タン・マ・ニップンさん。
左頁:漉いた後、水分を抜いて、庭で乾燥させる。赤い花の入った紙が一際鮮やかであった。



ムを使ったスラックスやジャンパーも開拓されているらしい。そう言えば、信じられないようだが、紙の建築も存在する。神戸市長田区鷹取教会のチャペルは、震災で崩壊後、紙製のチャペルとして復興している――。

「これは先祖から代々受け継がれてきたものです。100年ぐらいはたっているでしょう」

息子さんがショウケースから徐に取り出して見せてくれたものがある。紙づくりの秘伝書だという。

誇らしげにページをめくってくれるのだが、褐色がかって変色し、半ばボロボロになっている。他人にこんなに簡単に見せていいのだろうか。

中に仏像ともマンダラともつかぬ図解がみられた。

「どんなことが書いてあるんですか？」

「いやあ、紙の作り方について書いてあるのは間違いないんだが。何せパーリ語で書いてあるもんで、わからんのだよ」

ニップンさんが答えた。

おおらかというか、なんというべきか……。鑑定してもらえば、ラオスの紙の文化史が紐解けるかも知れないのにと、つい、老婆心に駆り立てられる。

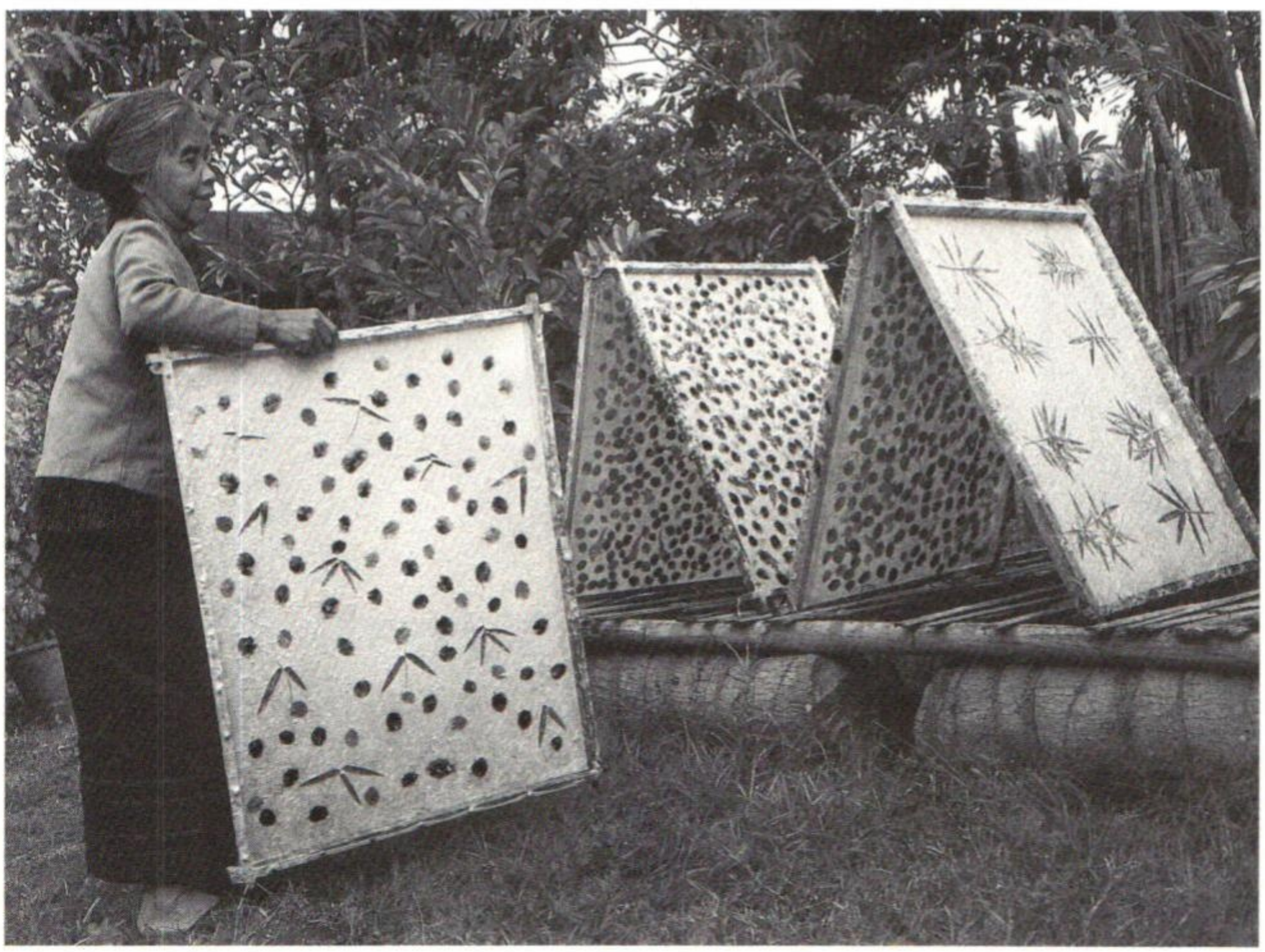
パーリ語というのは仏典に用いられた言語なので、仏教の僧侶が紙をもたらしたのかもしれない。いずれにせよ仏教と関連があると思われる。

ラオスには、もともと、バイラーンのように木片に字を書いて残してきた伝統があり、紙を使うようになるのはあとの時代なので、低地ラオの人たちではなく、黒タイの人たちか、中国人あたりが伝えたとも考えられる。

後から知ったことだが、意外にもラオスの知識人の間でも、この村の紙のことはあまり知られていないようである。

――手漉き紙は日本だけのものかと思っていたが、それは私の不勉強であった。和紙に似たものは世界中にあるようだ。ブータンにはサショーという紙があるらしいし、メキシコにはアマテ紙というものがあるという。はるばるベーリング海峡を渡ってモンゴロイドが伝えたとも言われる。とても興味深い。

そもそも人間は植物とともに暮



らし、昔も今も暮らしのそばに生き続けている。そんな植物素材のなかでも手漉き紙は最も繊細なものかもしれない。

温かい手触り――、自然の素材をこうして様々に活用し、幅を広げていった古人の智恵の深さを思わせられる。

ただ、その智恵が、森林の乱伐に向かわせる悪智恵に堕してはなるまい。

●家族みんなで酒造り
――サンハイ村

サンコーン村に別れを告げて、国道13号線をひた走る。

この道を真っ直ぐ行くと中国国境に行き着く。

9時30分頃、サンハイ村に到着した。

車のドアを開けると、すぐさま、強い匂いが鼻をつく。ラオスの酒ラオ・ラオの香りである。

サン(職人)ハイ(壺)。その名のように元々は壺づくりの村だったらしいが、いつの頃からか、酒造りの村として知られるようになったという。

メコンの河辺に広がるサンハイ村――、酒の壺が至る所に立ち並び、そちらこちらの家で酒造りに取り組んでいる。子どもたちも大人に混じってせっせと働いている。観光客が多いせいか、お酒を売る土産物屋も軒を連ねている。

ラオ・ラオというのはラオス独特の蒸留酒で、とくにお祭やお祝いの時など、彼らの生活に欠かせないものだ。中には、仕事の合い間に飲む強者もいるというのでなんとも恐れ入る。アルコール度およそ40度。ものによっては80度ぐらいのもあるというから、とても信じがたい。

「すみません」――。

振り向くと、天秤棒を担いだ少女が立っていた。土手から河に降りようとしていたのだが、私が道を塞いでいたのだ。少女の提げた桶からほかほかと湯気がたっている。今蒸しあがったもち米を河で水洗いをするらしい。

後をついていくと、他の子どもたちも、河でもち米を洗っていた。水遊びをして、はしゃいでいる子もいる。

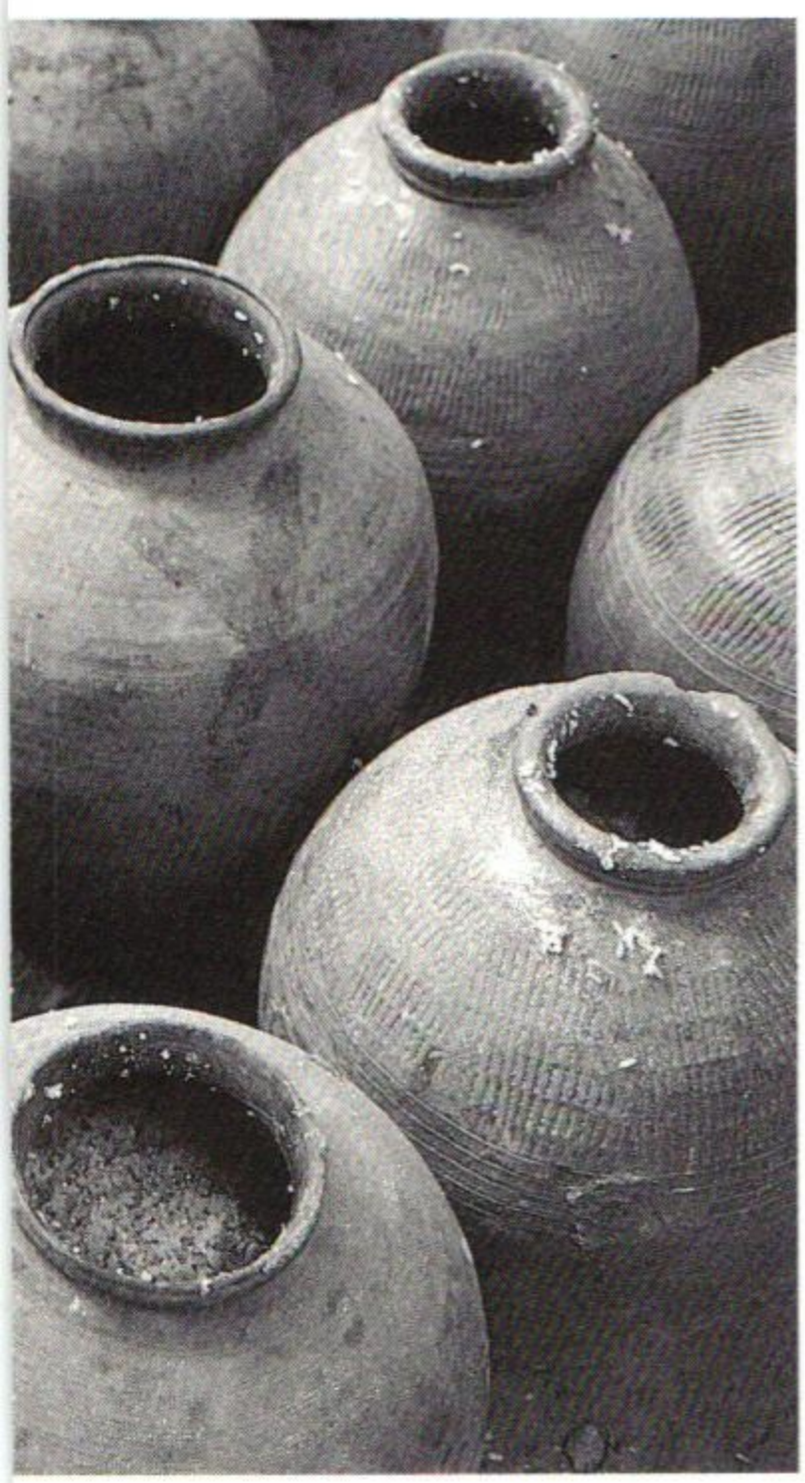
ラオ・ラオ造りは、もち米を蒸すところから始まる。そして、メコンの水で洗うのだ。ラオ・ラオの味は、メコンの味でもあったのだ。

その後、米を広げて冷やし、ペン・ラオという麹を混ぜて壺に入れる。4日間ぐらい放置する。

ペン・ラオというのはバイサーモーという葉っぱと米の粉とモミガラを練って固め、乾燥させたものである。小さな丸いビスケット状をしている。

その後、壺に水を注ぎ、さらに4日ぐらい置いておくと蒸留できる状態になる。もろみができあがるのだ。このもろみをラオ・サトーという。

「僕の名前?トゥイと言います。高校2年生。この子はチャンペン。妹さ」



写真右頁右:蒸したもち米をメコンに運んで水洗いする。
右頁左:バイサーモーという葉っぱと米の粉とモミガラを混ぜて麹をつくる。
中:米と麹を壺に入れる。しばらく放置し、さらに水を足して、もろみを作る。
左頁右:もろみをドラム缶に入れ、薪を炊いて下から熱し、上から水を注いで冷やす―。
左頁左:しばらくすると、管の先からほっかほかの蒸留酒、ラオラオが誕生する。





河のそばの小屋で、蒸留の作業が始まった。トゥイ君とチャンペンちゃんは学校が休みなので、今日は朝から1日、この仕事を任せられているのだという。

二人とも立派な働き手なのだ。

「チャンペン、早くして」

テキパキとこなしていくトゥイ君に、チャンペンちゃんは、一生懸命ついていく——。もろみの入った壺をトゥイ君に渡す。

「4つの壺のもろみで、だいたい壺ひとつ分のお酒がとれるんだ」

トゥイ君はそう言いながらドラム缶にもろみを入れる。薪を焚いてドラム缶を下から熱し、上の籠から水を注いで冷やす。しばらくすると蒸留されてできたラオ・ラオが細い管を通って滴り落ちる——。

これは〈外取り法〉という蒸留酒のつくり方である。

ラオスには、様々な民族が住んでいるため、色々の酒づくりを見ることができるといわれる。ラオ・ハイと呼ばれる発酵酒も造られていたが、現在ほとんど見られないという。これは壺酒という意味で、吸酒管という長いパイプを使って壺から吸って飲むらしい。甘酒もあり、ラオ・ワンと呼ばれている。薬酒も造られており、色々の薬物を蒸留酒に漬けた酒が市場で売られている——。

「ほらほら、見て」「でてきた」

何分たったであろうか。管の先から、湯気が吹いた。ラオラオの誕生である。普通は1時間ぐらいかかるというが、20分ぐらい待っていたら出てきた。

よい蒸留酒の目安というのは、アルコールが強いこと、燃えること、振ると泡がたつことだといわれる。

一口飲んでみた。

「メコンのほとりで味わう原酒は風流だった」と言ってみたいところなのだが、アルコール40度を越える酒はあまりにもきつかった。

中国の詩人李白は、酒に酔い、川面に映った月を手に取ろうとして水に落ち、酩酊したままおぼれ死んだと伝えられる。もちろん、あくまで伝説に過ぎないのだが、このメコンの畔でもあり得ないではないと思った。

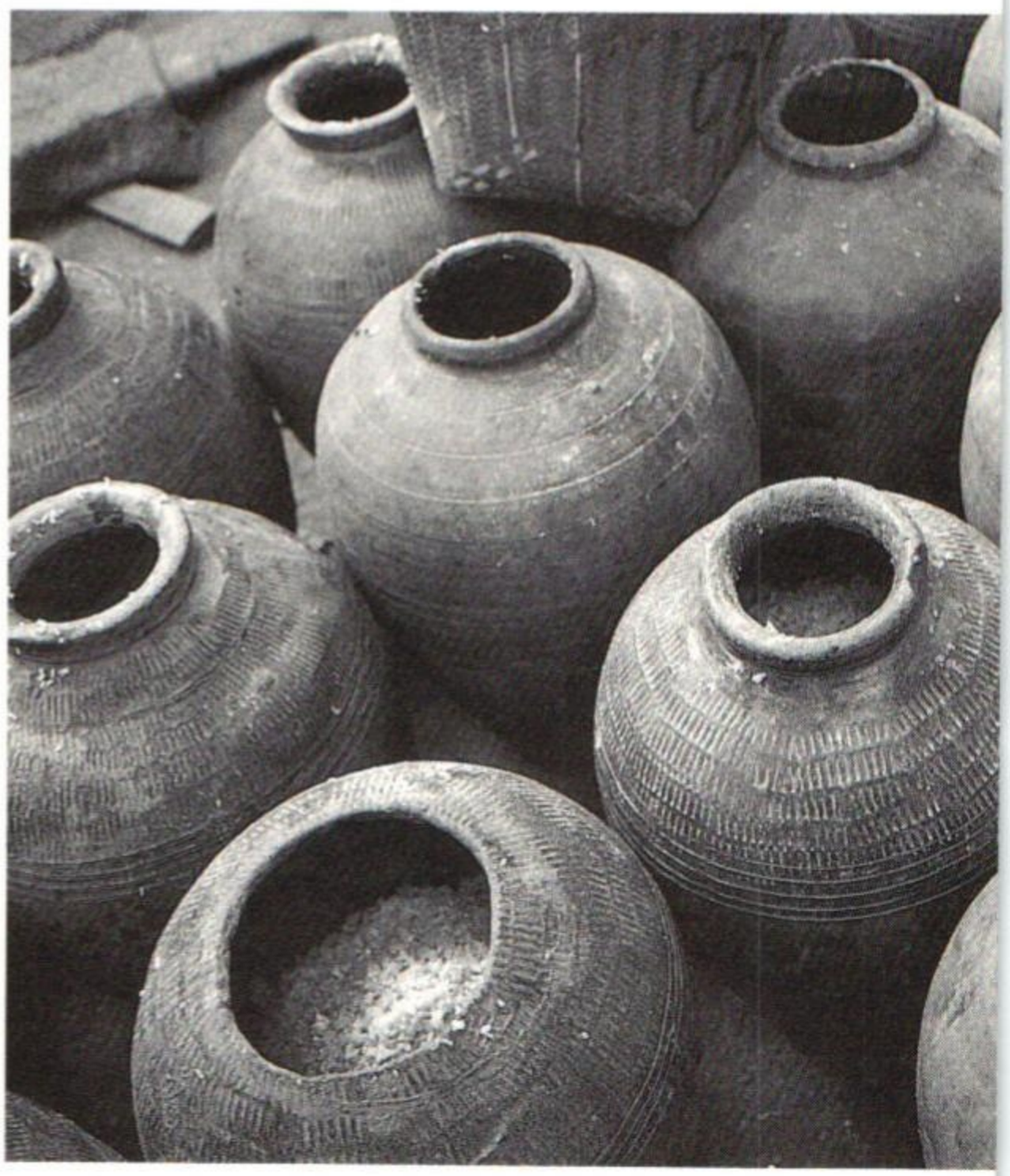
いや、こんなことを思ったりして——どうも私も酩酊状態だったのかもしれない——。

「ドスン…ドスン…」。

と音がする。

行ってみると、若い女性がコモンといわれる足踏みの杵でバイサーモーの葉っぱを粉にしていた。ペン・ラオをつくっているのだ。近所の子どもたちが取り囲んで見ている。

彼女は、トゥイ君の一番上のお姉さんであった。土産物屋で店番をしている男女も、トゥイ君のお兄さん







とお姉さんだという。両親は?と聞くと、庭の片隅を指さす。お母さんは縫い物をし、お父さんはせっせと薪を割っている。

彼らは12人家族、家族ぐるみで酒を造っている。

どの家もそうだった。家族みんなで仕事をしていた——。

●仏たちは河を見つめていた

——タムティン洞窟

午前11時頃、サンハイ村で小舟をチャーターし、タムティン洞窟へと向かった。

メコンを北上するのだ。

船頭が紐を引くと発動機が小気味よく震動を始め、あたりにこだまする。

サンハイ村の前を流れるメコンの流れは急である。水流は渦巻き、岩にぶつかり、砕ける。

水位の低い河には、大小の岩が点在し、航路標が立ち、そして、舟の往来を見守っている。ドーンクワという川中島では何やら土砂を掘っている人々がいる。砂金を採っているのだ。土砂を掘って砂を籠に入れて運んでくる。そして、何回も篩いにかけて砂金だけ選り分ける。根気のいる仕事である。

時々、川を下る舟とすれ違う。子どもたちが手を振る——。

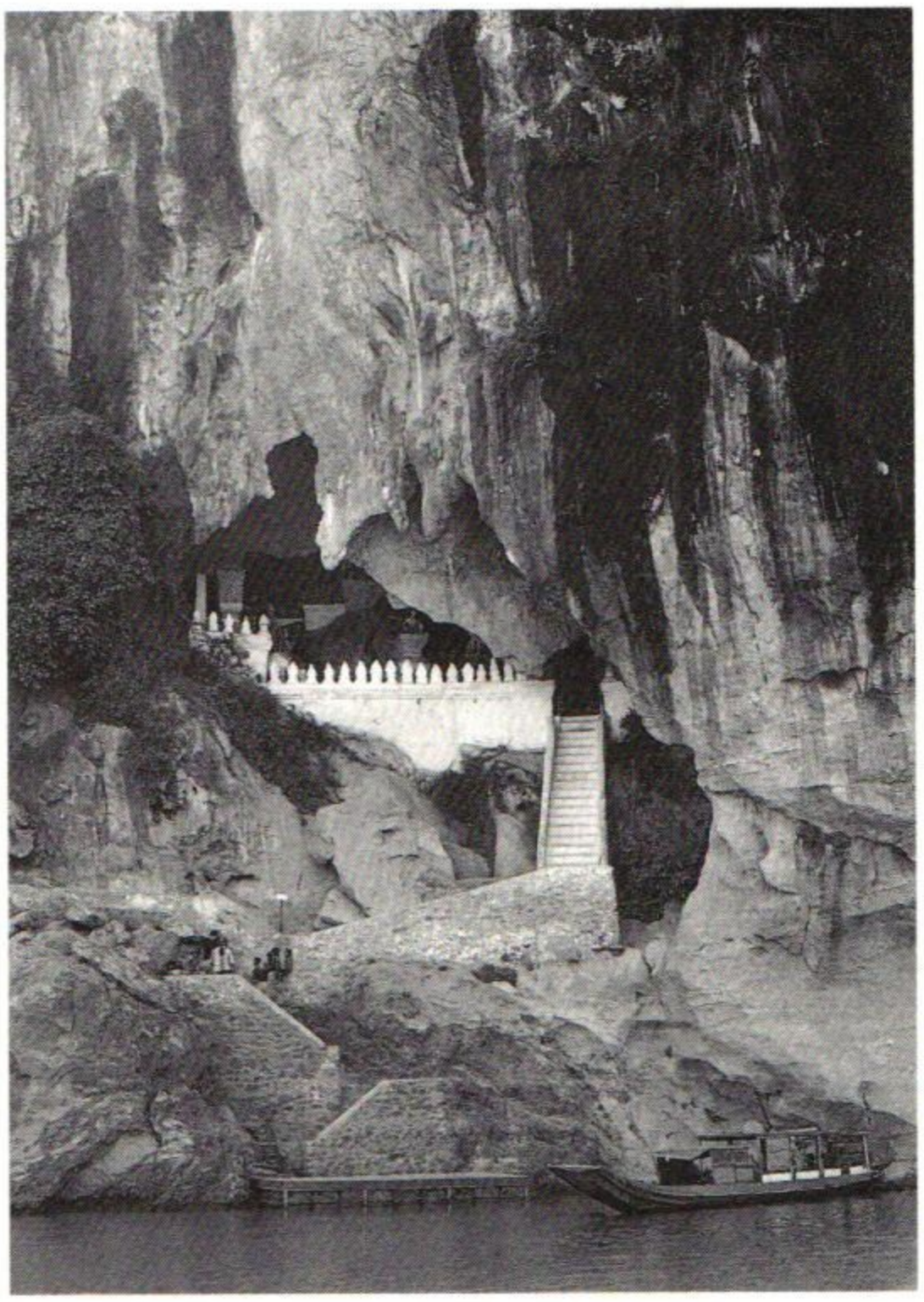
人々にとって河は重要である。メコンの流れは人や物や家畜も運んでいる。人は舟に乗って魚を採り、竹や酒や果物を売りに行き、遠くの親戚を訪ねる——。

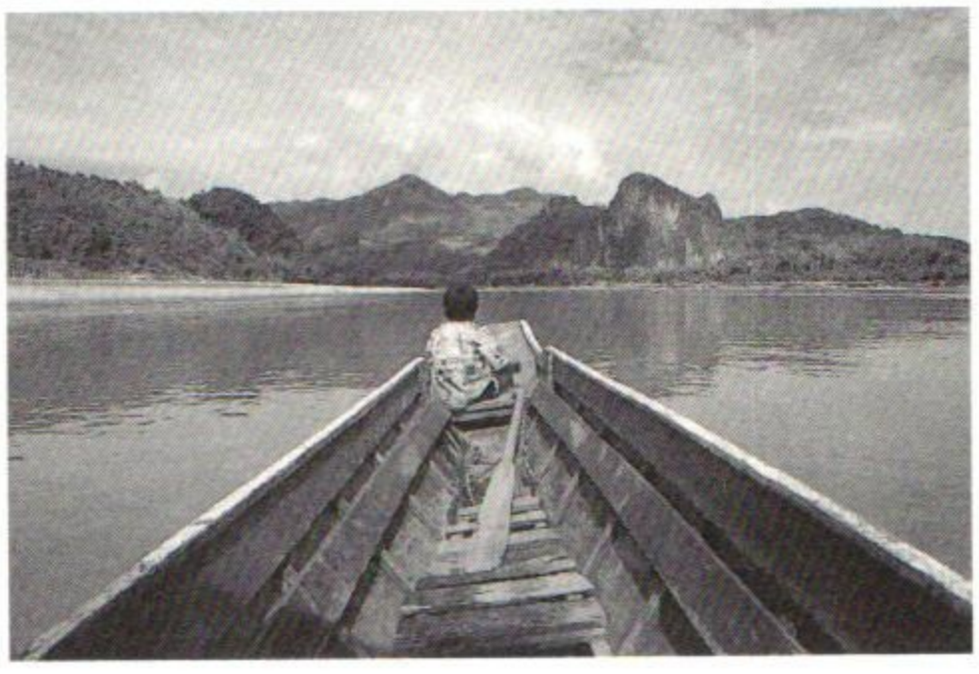
45分ぐらいたつと、断崖の岩肌に大きな裂け目が見えてきた。タムティン洞窟である。タム・ルム(下洞窟)とタム・トゥン(上洞窟)からなる。

かつて、ここは僧侶の瞑想の場所であったといわれるが、それ以前に、この地方の人々のピー信仰か河の精霊に対する信仰の場所だったともいわれる。

16世紀のセーターティラート王の時代に仏像を安置しはじめ、1960年には3万7千体あったというが、以後1975年まで、歴代の王が維持管理を担当したという。

「昔はこの仏さまには近づけなかっ





写真右頁上:タムティン洞窟。かつては僧侶の瞑想の場所といわれる。
右頁下:ルアンパバーンからメコンを北上し、2時間ぐらいすると、タムティン洞窟に着く。

たんだよ。とくに女が近づくと鼻血が出たりしたもんだ」

タム・ルム(下洞窟)の入り口には、お供え用の線香やロウソクやチャンパーの花を売っている老女と娘が座っていた。入り口の脇に座っている仏像を指さして、老女がこう語るのだった。

中は真っ暗なのでろうそくが必要だ。かつて、許可がないと入れなかった時代もあるらしい——。

河に面した崖づたいの細い道を行くと、タム・トゥン(上洞窟)である。狭くて急な石段をのぼり、見上げると、洞窟の中、急勾配の斜面に、所狭しと大小の仏像が並んで、しばし圧倒されてしまう。

若い女性が線香をともし、しばし、一心に祈っていた。

父親に連れられて来た幼子も手を合わせている。

もう何年たつだろうか、京都、三十三間堂を詣でた時のことを思い起こす。

はじめて訪ねたのは、まだ十代の頃であった。暗いお堂の中に、千本あるといわれる夥しい手や顔をもった千体の観音菩薩を目のあたりにした時、只々、圧倒される思いであった。信仰心という以前に、そのグロテスクな異形になんとも不気味な心地がしたものである。

あの夥しい手は、様々な手練手管を用いて人を救おうとする観音の慈悲をあらわし、千という数は、無限をあらわすのだという。

その後、二十年以上もたってからのこと。病気療養後、京都に立ち寄った時、千の観音像は以前とは違って見えた。

その時同行した友人は、「苦しみに絶えている姿にも見える」と言った。

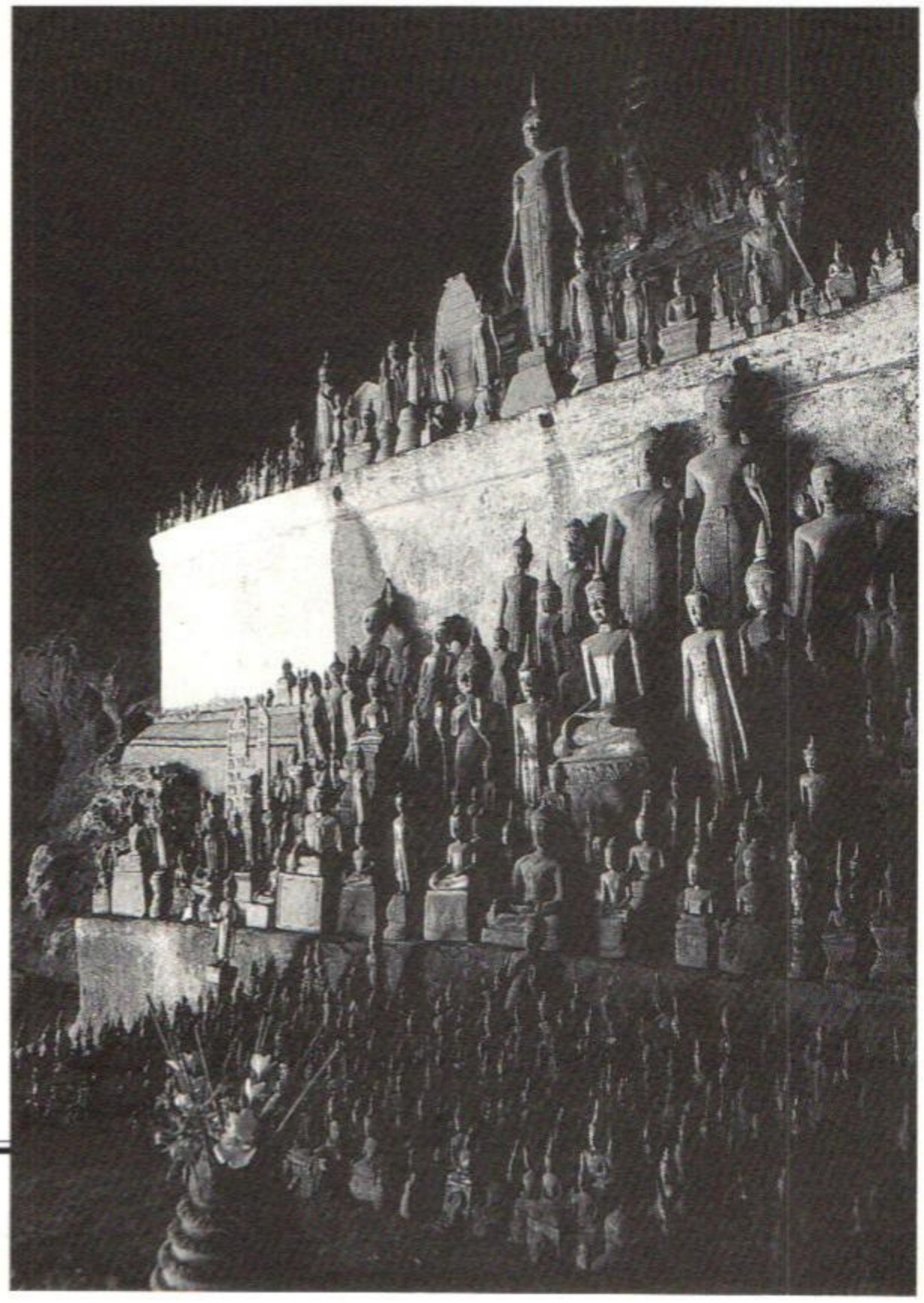
同感だった——。

この洞窟に、それこそ無数に並べられた仏像。それを運んだ人々の心情を知る由はないのだが、どんな思いであったのだろうか——。

人間にとって、幸福は抽象的であるが、不幸は具体的であるという。ラオスもこの国ならではの数々の困難を抱えている。

医療体制ひとつとっても充分とは言えない。少し大きな病いであれば、隣国タイに渡って治療を受けねばならない。それ相応の経済的負担も強いられる。貧しければあきらめざるをえない。また、この国にはインドシナ戦争当時の不発弾や地雷がまだ沢山残っている。この地域でも重傷を負ったり、手足の指を失う子どもたちの事故が起きている。

我々とはまた違った切実感や祈り心が仏像をここまで運ばせてきたのかもしれないと推測される



写真左頁:所狭しと大小の仏像が並んでいる。16世紀、セーターティラート王が安置しはじめ、3万7千体はあるという。お正月には参詣者で賑わい、洞窟内まで入り切れず、引き返す人もいるほどだという。

——。

観音信仰の起源については色々な説がある（もとより、上座部系仏教のこの国に観音信仰は存在しないのだが）。インドの西北部を流れるインダス河の下流地域の民衆の信仰にはじまったともいわれる。海に面した、南インド・マラヤ山にある丘が観音の住所であるともいわれる。いずれも水辺に面した地域である。

観音信仰も、こういう場所からはじまったのだろうか——、洞窟の前を流れるメコンを目にしながら、そんなふうに想像した——。

石段のところで、男が拝観チケットを売っている。

「わしは向こう岸のパーク・ウー村のもんだ。交代でキップ売りをやってるのさ」

「1日の参拝者？そうさなあ、50人ぐらいかな。しかし、ピーマイ（正月）の時はそりゃ混んで、身動きとれんよ。上まで登れなくて戻る人もいるぐらいさ」

対岸のパーク・ウー村は、50世帯、250人。由緒のある村である。

その村にはセーターティラート王によって建立された寺院ワット・パーク・ウーがあり、歴代の王がお正月に参拝したという。

陽射しが一段と強くなってきた昼下がり。我々はパーク・ウー村に立ち寄って、サンハイ村まで戻った。

今度は上流から下流へ。さすがに早い、15分ほどで到着した。

●織物はラオスの女性の誇り

——パノム村

12月6日、織物の村を訪ねた。ルアンパバーンの町からカーン川に沿って南へ行くと、ほどなくパノム村に着く。

ここは、織物の村として知られている。ルー族の村である。

村に入ると、すぐ右手に小屋がある。サモーソンと呼ぶらしい。

「公民館のようなもんです」

と、プッターが教えてくれた。

中に入ると、一斉に若い娘たちの視線を浴び、一瞬たじろいでしまった。

「いかがですか——」

彼女たちは、こちらに向かって、手に手に織物をかざすのだった。

部屋の壁を背にしてぐるりと桟敷が並び、そこで50人ほどの若い娘たちがそれぞれの家で織った織物を並べて売っているのだ。さしずめ、共同販売センターといった所であろうか。

かつて、ラオスでは、織り機は女性一人に一機あったと言われるが、この村でも、高床家屋の床下や軒下に織り機があって、少女や時にお年寄りまでが軽快な音を立てて機織りを行っている。

サモーソンの前を左に入って、しばらく歩くと、織物を売るお店が軒を並べている。観光客も多いようだ。タイ人の団体旅行の一群がバスで来ていた。

一番奥まった所に、機織りセンターのような場所がある。織り機が沢山並べられ、女たちが織っているところをつぶさに見ることができる。

ラオスの織物の歴史は古く、紀元前にはすでに中国から伝わっていたという。そしてランサン王国が建国された14世紀には、ファーグム王のも



写真右頁：ルアンパバーンの町をカーン川に沿って少し行くと、織物の村として有名なパノム村に到着する。機を織る村の女性。
左頁：この地方の織物は金糸や銀糸を使うところが特色といわれるが、チャムマリーさんが見せてくれたものは、4色の、大小の獅子の柄のものであった。90歳になる母親が織ったもので、今の若い人には織れないという。

とに各地の領主から絹織物が献上されていたという。当時、すでに、養蚕、染色、織りの技術が普及したと思われる。

布の模様は各地の特徴をよくあらわしている。ヴィエンチャン地方独特のものは絣。シェンクァン地方では中国神話に登場するナーク(龍)の模様を多く見かける。南部のパーク・セー地方ではクメールの領土であったことから、その影響が色濃く残っている。茶と黄色を基調にして、王宮、人物、象、馬が1枚の布に絵巻物のように織り込まれている模様が独特といわれる。そして、ルアンパバーン地方の織物には金糸や銀糸が多く見られる。王の住む都であったことから、衣装もきらびやかになる傾向があったのかもしれない。

「きれいでしょ?どう?」

一軒のお店で、品定めをしていると、機を織る手を休めて、女主人が声をかけてきた。チャムマリーさん(32歳)、10歳の時から母親から習ったという。

「1人前になるには5年ぐらいかかるだろうね」

「私たちは北ラオスから移動してきたんだけど、これは伝統的な柄。うちの母(90歳)が織ったものです。できあがるまで、1カ月以上はかかってるわね」

「4色使って、大きい獅子と小さい獅子の柄。これは今の若い人には織ることができないね。今のような織り方になって40年になるわね」

織物の技術は、古来母から娘へと受け継がれて今に至っている。

綿つくり、綿紡ぎ、糸撚り、染色、機織り、という織りの工程は気の遠くなるような根気が必要である。

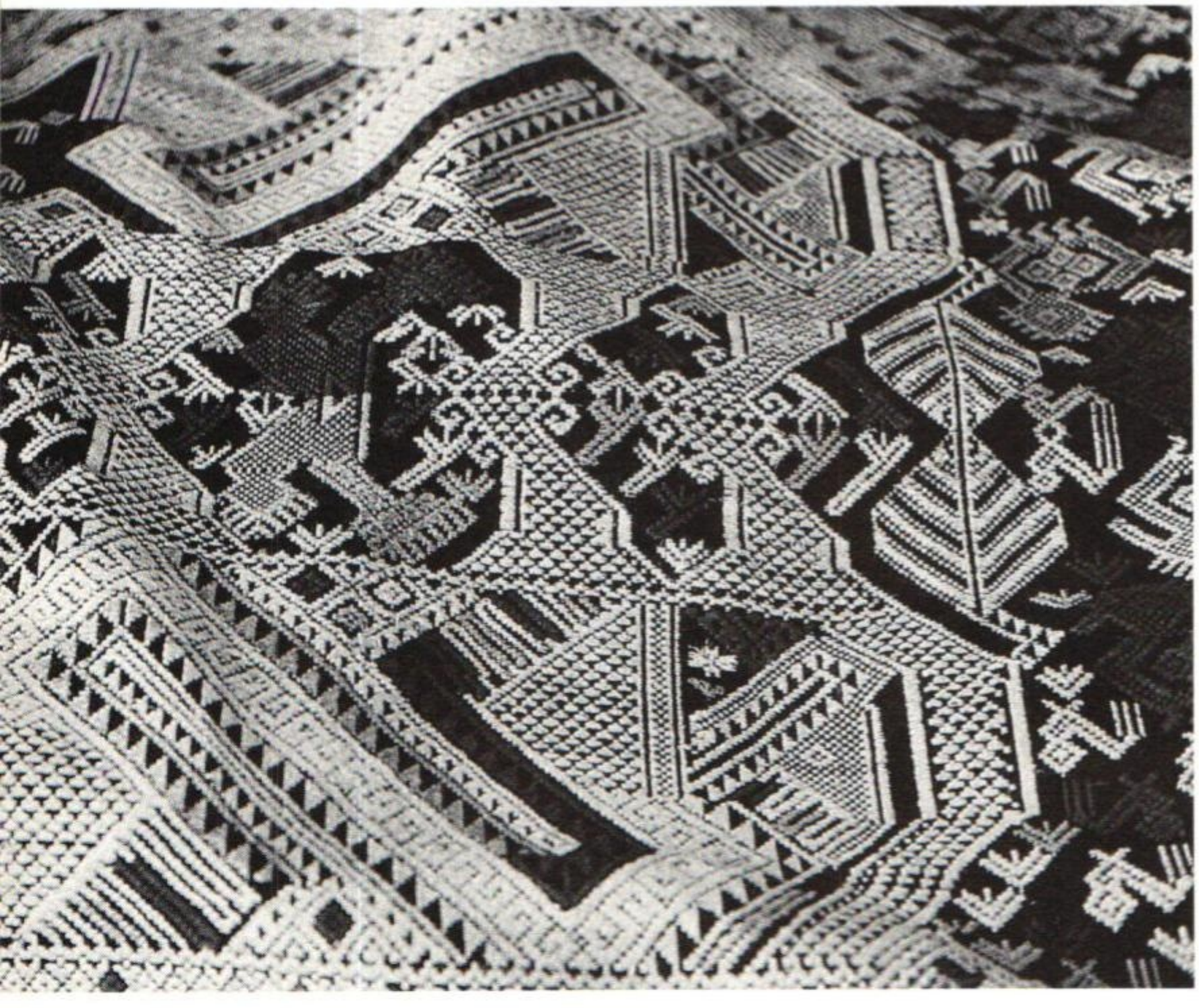
ラオスの女性の粘り強さがこの技術を伝承させたのだろうか、それとも、この技術が、彼女たちを粘り強くさせたのだろうか——。

「一番のおすすめ?全部そうよ。これは私が考えてつくった柄。黄色とピンクの色の組み合わせもきれいでしょ。買っていってください。2万5千キープでいいわよ」

彼女はオリジナル製品を差し出した。たしかに、黄色とピンクの組み合わせは、あまり目にしない。タイ人の観光客にとても受けているという。

伝統的な柄だけでなく、今の人の感覚に合わせたものを工夫しようとしている。

話を聞かせてくれたお礼もかねて、少し値切って買うことにした。



遥かな山里、カミは森に棲んでいた

●地獄も極楽も心の中にある？

——サンティ・チエディ

12月7日の朝、タートルアン・ルアンパバーンに向かった。

某案内書によれば、その寺の裏に懺悔小屋が並んでいるとある。この国の僧侶たちがどのような場所で修業するのか、知りたいと思ったのだ。

しかし、いくら探してもそれらしいものが見あたらない。寺の裏手の僧坊に行ってお坊さんに聞くと、「ここにはない」、「それはワットポンパオにある」という。どうやら某案内書の間違いなのであった。

パトウパクマオ通りに抜けて、車を高台の方へと走らせた。どんどん登っていくと、閑静な丘の上に、白亜のお堂が立っている。それが、サンティ・チエディという仏塔である。ワット・ポンパオのすぐそばにある。

プーシーに登ると目立つのですぐわかる。プーシーからちょうど南東の方角、森の中に真白な建物が建っているが、それがこの仏塔である。

——入り口の扉を開けてみたが、鍵がしまっていた。

誰もいないようだ。

運転手のカンムーンが、僧坊にお坊さんを呼びに行ってくれた。

しばらくすると、鍵をジャラジャラいわせながら、一人のお坊さんがやってきた——。

何やらブツブツ語っている。

「静かにしろと書いてあるのに、いつも、うるさくされるので困るんだよ」

いかにも迷惑そうである。

「ご機嫌斜めのようです」

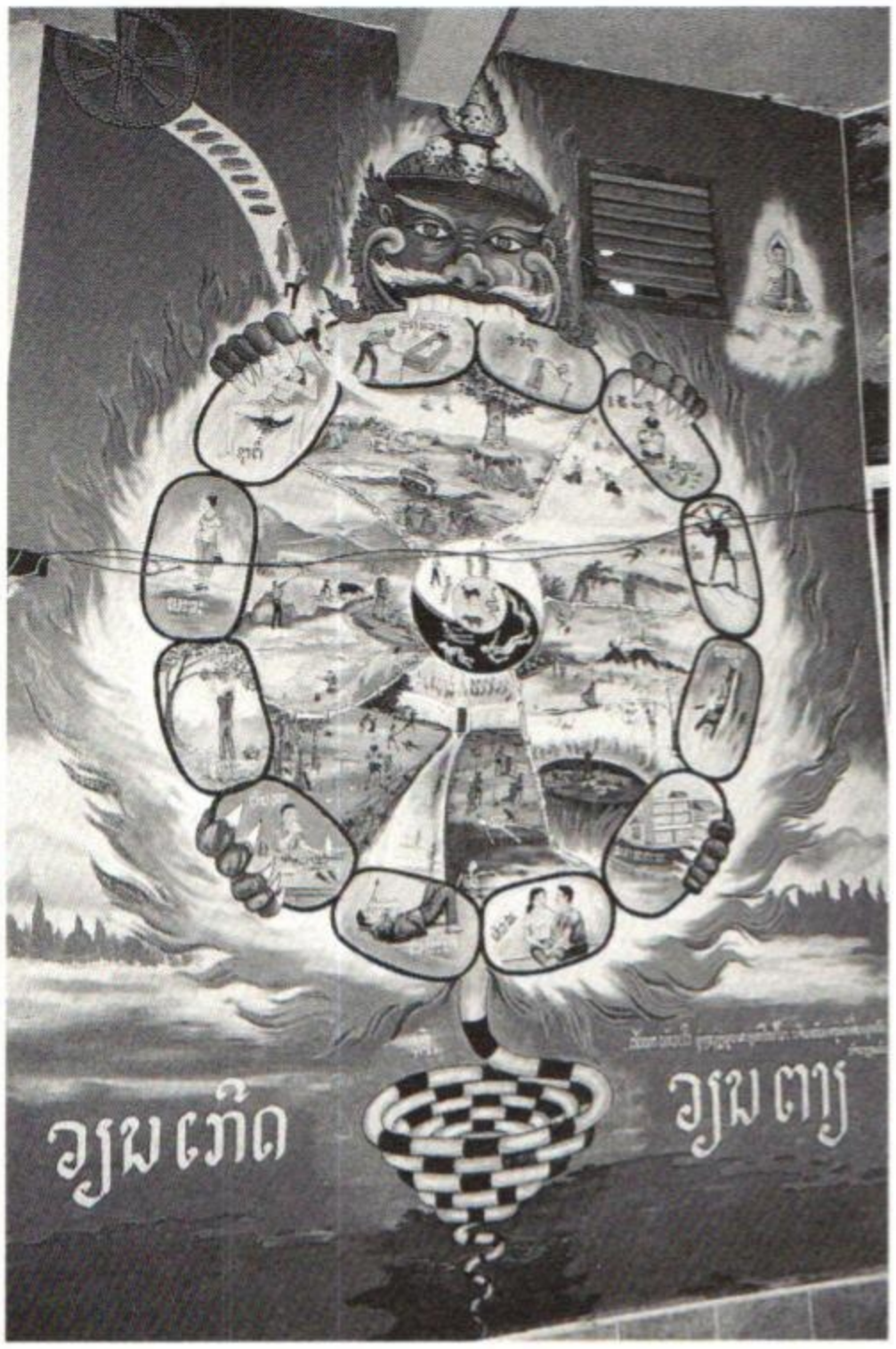
プッターが、小声で教えてくれた。

時折やってくる参詣者がきまって騒がしいので迷惑しているらしい。

そのお坊さんは、堂内の窓や扉の鍵を開け放ち、そそくさと立ち去ろうとした。

あわてて堂内の絵図について、説





明を求めると、

「そこに書いてあるから、それを読みゃわかるだよ」

と、解説パネルを指さし、実にすげない。

さすがにちょっとムッときてしまった。

お坊さんに腹を立てるなど、私としたことが罰あたりな話であるが、でも、その顰蹙の訳がわかる気がしてきた。

この仏塔は、通常のお寺とは異なるのだ。サンティというのは、パーリ語で静寂とか、心の平和。そして、チェディというのは仏塔という意味である。文字通り、ここに来て、自分の人生の道行きを振り返り、心の静寂を取り戻すための場所なのだ。当然騒がしくない方がいい。

堂内を巡るうち、静かに自分の内界と向き合うようにつくられていることが感じられてくる。

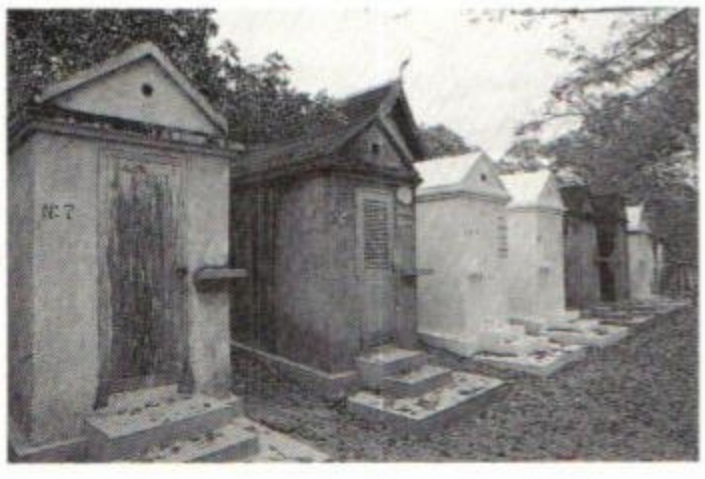
中は5階建てになっている。1階は講堂。2階は仏典が配架された資料室。3階から上は仏像の部屋になっている。

1階の講堂は石の床でできた広間である。入り口の正面に、仏像が座っている。そして、まわりの壁には悟りを開くまでのブッダの物語と、なまなましい地獄の絵が描かれている。ひときわ目を引くのが輪円の中に様々な人間の姿が配置されたマンダラのような絵図である。よく見ると、誕生からはじまって、赤ん坊、少年少女、青年、壮年、老人という順序で男女の絵が描かれている。人間が生まれて死ぬまでの、いわば人生の四季である。



これらは、日本流に言えば絵解きの絵図であろうと思われる。

わが国の寺院では、お盆の時など、うす暗い本堂で、住職が「六道図絵」などを示しながら、人が生まれてから死ぬまで、そして、死後は生前の行いに応じて、地獄に落ちたり、極楽浄土に生まれたりすることを、わかりやすく話す。時おり、



写真右頁:町の南東、森の中にサンティ・チェディと呼ばれる5階建ての仏塔が建っている。
左頁左上:1階の壁面に描かれている、ブッダの開悟までの物語、地獄の世界。
左頁右:同じく1階の壁面。人間の生から死までを表すマンダラのような絵が描かれている。
左頁左下:森の中には、僧侶が籠もって修行する懺悔小屋が並んでいた。

住職と聴衆の問答が交えられ、説法が行われる。

今でも京都の西福寺などでは毎年、8月8日から10日まで、旧暦の盂蘭盆にその「六道図絵」を公開し、絵解きを行うという。

ここサンティ・チェディでも僧侶が説法することもあるようだが、単独で、これらの絵を眺めながら、自分と向き合うこともできるよう配慮されている。

飢餓地獄。そして、修羅界であろうか、まさに切りかからんとするシーンなど、素朴な筆致であるが、それが却って拷問のシーンのようにも見えてなまなましい。これらの六道世界は、もとより死後の世界を表わすものなのだが、現実にラオスに起きた現実世界のようにも見えてくる。厳しい内戦を経た彼らの記憶を投影しているのであろうかと想像させる。

仏教ではこの六道世界(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)を、人間の心の中の世界であり、また、その心が投影した世界であるとも説いている。

目には見えない超現実の世界を想像するとき、人は無意識のうちに宗教というものの根に触れているのかもしれない。宗教は教義や組織によって成り立つものではない。たとえば、地獄を空想し、「この世の地獄だ」「自分の心にある世界だ」と感じ入った時、すでに人は宗教の世界に足を踏み入れていると言えるのではなかろうか——。

この仏塔は住民の寄付によってできたもので、1969年に着工し、1987年に完成したという。

寄進の功徳によるご利益を得るためだけでなく、己れの人生を顧み、心の静寂を求めるゆえに建てたのであろうか——。

お堂の石床の感触が、ひんやりと素足の裏から伝わってくる。このお堂に踏み入るラオス人の信仰心を思った——。

外に出ると、ご機嫌が直ったのか、さっきのお坊さんが運転手と談笑していた。

「この寺には20年いるよ。このお堂は私が一人で守っている」

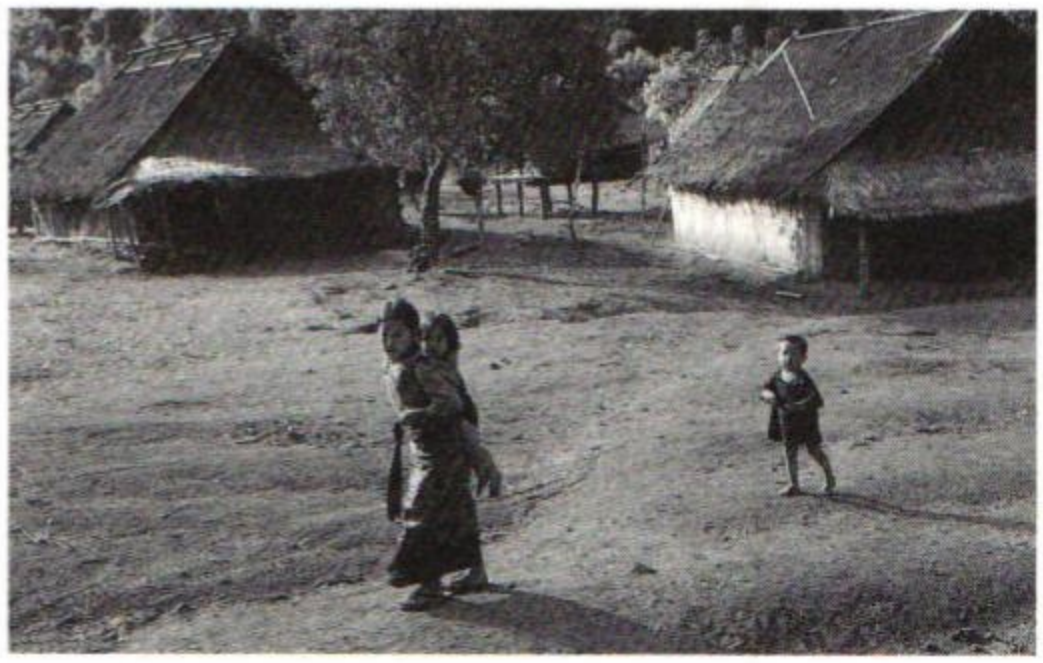
名前はブンタンさんというらしい。メコン河の向こう岸の村、シアンメン村の出身とのこと。さっきとはうって変わって、にこやかな表情なのに、戸惑ってしまう。

「カオカム(カオパンサー)と言って、お坊さんが反省して、懺悔する修行があるんだが、今年も11月の10日間、この下の懺悔小屋に入って修行した」「森の中で坐ったりもするよ」

チェディの坂をくだると、森の中に点々と小屋が並ぶ。寺のすぐ裏手には、真新しい白壁の小屋が向かい合わせに15棟ずつ並んでいた。それが、僧侶たちが入って修行する懺悔小屋である。カオカムの期間中、食事は村人が小屋の外に置いていく。僧侶は外に出ることはないのだという。

あたりはひっそりと静まり返っていた。

厳粛な修行の雰囲気が伝わってくるようで、車に乗るのも忘れ、しばし佇んでいた——。



写真右頁:山の裾野に広がる集落、モン族の村、ロンラオ。働き盛りの男女は、朝早くから、何キロも離れた畑に弁当持参で出かけている。
左頁:庭先では老婆が刺繍の手仕事をしていた。頭には帽子をかぶり民族衣装を着ている。

●モン族の村に間違って行った話
――ロンラン村とロンラオ村

その日の午後、モン族の村を訪ねようとロンランという村へ向けて出発した。

ルアンパバーンから、車で1時間以上かかる所だという。

南東の方角へと車を走らせる。大変な悪路である。煙を巻き上げながら凸凹の道を走る。

時おり、籠を背負ったモンの人たちが歩いていく。

車1台がやっとの道幅なので、路肩に身を寄せて、道をあけてくれる。彼らは、村から4、5時間かけて、歩いてルアンパバーンにやってくるという。往復は1日がかりである。

何度も峠を越えたが、最大の難所でとうとう立ち往生してしまった。ダットサンの軽トラックを改造したトゥクトゥクでは、なんとも心もとない。ちょっと急な坂は登りきれないのだ。全員車を降りて、後ろから押して、エンジンをかける。「ここで、日が暮れてしまったら…」と、必死の思いで何度も車を押すのだが、かからない。20分以上かかって、やっと、坂の上に辿り着くことができた――。

それから1時間ほど走ったであろうか、カンムーンが車を止めた。

どうもそこがロンラン村のようだ。

小高い山の裾野に集落が広がっている。広い原っぱの真ん中にネットが張られ、子どもたちがセパタクローに興じている。

この村は約100世帯。500人ぐらいの人たちが住んでいるという。

働き盛りの男女は朝早くから、何キロも離れた畑に弁当持参で出て働いている。

村にいるのは、子どもたちとお年寄り、乳飲み子を抱えた父親か母親である。

庭先では、老婆たちが刺繍の手仕事をしている。黒い布に色とりどりの刺繍が施された独特の民族衣装を着ている。

そして、子どもたちが、家の前で、陣取りゲームそっくりの遊びに夢中である。

一軒の家の前で、若い夫婦が佇ん



でいた。

5日ほど前に父親が亡くなり、喪に服して仕事を休んでいるという。

家の中に案内してくれた。うす暗い部屋の中は、農具や炊事のための窯が備えられているだけで、とても簡素である。仕切りの陰には、赤子がすやすやと眠っていた。3カ月前に生まれたばかりだという。

「父はとてもやさしい人でした……。父の代わりにこの子を授かったと思ってます」

夫のクォーさん(27歳)は語った。妻はチァさん(20歳)。二人は結婚して2年たつという。

これも何かのご縁と、弔いたい心地にかられたが、埋葬場所はここから約30分ほど山の中だと聞いて、あきらめた。

このロンラン村は、内戦中はパテト・ラオ軍についたといわれる。

そして、この村出身のセン・チッ・タは勇敢に闘った国民的英雄だといわれる。今では、この村を訪れる外国人観光客も多いと聞いたが、そんな様子はまったく感じられない。

センチッタのことを村人に聞いたのだが、誰に聞いても「そんな人は知らない」「ここにそんな人はいなかった」と言う。

「ここは、ロンラン村でしょ?」

「いや、ロンラオ村だよ。ロンラン村じゃない」

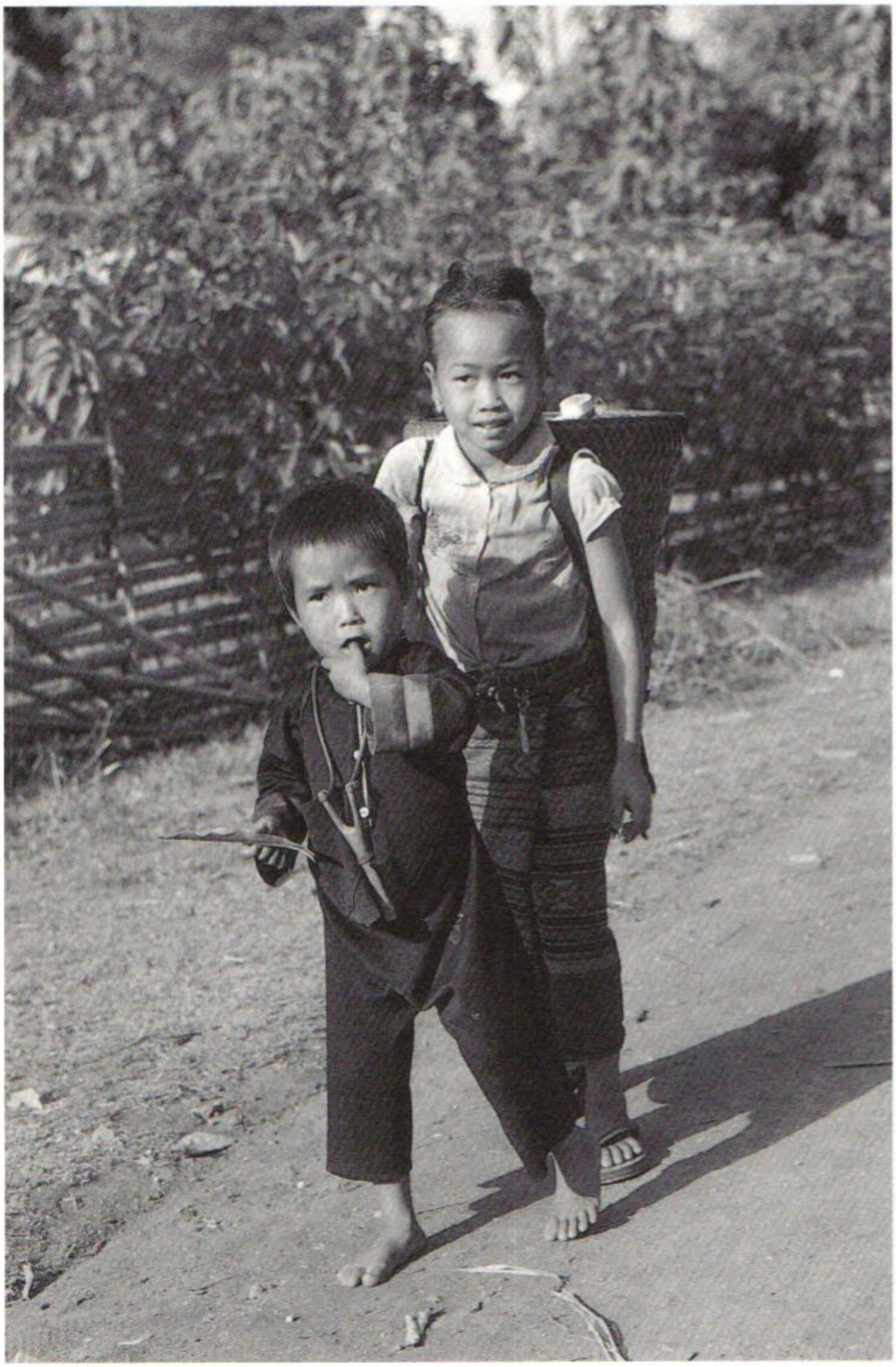
「……えっ、ロンラン村に行きたかったのかい?」

カンムーンがロンラオとロンランを聞き違えたようだ。ロンラン村ではなく、ロンラオ村という別の村に来てしまったようだ。

「でも、あの村はやめた方がいい。去年発砲騒ぎがあった所だから……」

カンムーンは怖いもの知らずだと言わんばかりに引き止める。

実は、モンの人たちはラオスにおいて反政府勢力と見られている面がある。アメリカに渡ったモンの人たちが



が後方から支援しているともいわれる。一方で、今や政治的意図はなく、ただの盗賊と化してしまったという話もある。しかし、確認しようがないので、何とも定かなところはわからない。

ちなみに国連機関の車が襲撃されたこともあるという。

ラオスは1975年に解放されたのだが、一部には、まだ解放されていないと主張する人たちもいるのだ。とくにヴィエンチャンからルアンパバーンにいたる13号線のビア山塊周辺やジャール平原近郊の山では、モン特殊攻撃隊3千人弱が抵抗を続けているといわれる。

しかたなく、カンムーンの言葉にしたがって引き返すことにした。

●柱に祈りを捧げる人たち
——パーノーン村

「ドンシャン、ドンシャン。ドンシャン、ドンシャン——」

暗くなる前に着くようにと、スピードをあげて、一路ルアンパバーンまで向かったのだが、30分ほど走ると、にぎやかな音楽が聞こえてきた。道に沿って集落が広がっている。木立ちの間に、カラフルな飾りが見えた。

祭りのようだ。

あわてて車を停めて、降りた。入り口に手作りの小さなゲートが立っている。

「ようこそピーマイ(お正月)の祭りに」とかいてあるらしい。

村の正月だったのだ。

「おお、日本からやってきたのかい。そいつは、縁起がいい」

「さあさ、ぜひ、一緒に祭りに加わってください」

我々を見つけると、男たちがやってきて、「日本人が来た」、と声をあげながら、腕をとって会場のなかに案内するのだった。

最前列の特別席に通されたが、スピーカーから耳をつんざくように、ラオスの流行歌が流れてくる。大声でないと話が聞こえない。

真ん中には簡単な舞台が備えられ、若い男女が輪になって踊っている。

そして、周りでは椅子とテーブルで、村人たちが宴を繰り広げている。

そこは、パーノーン村という村。ラオ・トゥン(山腹のラオ)と呼ばれる諸族の一つ、カム族の村であった。モンクメール系の人たちである。

彼らのお正月は、4月ではなく、毎年12月に行われるという。そして、今年は、昨日から今日にかけて、つまり、12月6日から7日にかけて行うことになったという。

住民は59世帯、300人余り。この正月では低地ラオ族の人たちのように水をかけ合ったりすることはないそうだ。

「村長と副村長です」

「このめでたい時に、おいでいただいてありがとうございます」

いつの間にか誰かが呼んだらしく、村長と副村長が揃ってやってきた。そして合掌して恭しく挨拶をする。

お正月に遠方より来客が訪れることは、大変めでたいこととされているようで、どうやら、我々は、「まれびと」として迎えられたようだ。

「まれびと」とは、異郷から時おり

写真右頁:子守をしたり、野菜を運んだり、モンの子どもたちも大人と一緒に一生懸命働いている。

やってくる神聖な来訪者のことで、村里を訪れ祝福を与え、そして立ち去っていくとされる。こうした観念は日本はもとより東アジアや東南アジアに広く見られると言われる。

我々ごときが、なんとも恐れ多いことであった――。

ぜひ儀式を行う場所を見てほしいと、別の小屋に案内された。

「これがラックバーン、村の柱です。この村ができた時に立てたのです」

副村長のオンケオさん(52歳)が説明する。

この村は1988年に隣の村から引っ越してきて、その時、真っ先にこの柱を立てたという。いわば、村のルーツであり、中心である。

この柱のある小屋は、普段は集会所として使われるとのことだが、お正月にはこの柱に対し「ピティブン・プッピー・コーンパオカモ」という儀式が行われるという。この柱に大地の精霊あるいは村の神さまが宿っていると信じられているのだ。

「儀式は村長が行うことになっているのです。残念ながらついさきほど終わったばかりです」

今度は村長のウィヤンポーンさん(46歳)が語った。

村長も副村長も、「私が話す」と先を争うかのように、村のことを説明しようと一生懸命である。

柱のまわりは、たくさんの供え物で埋まっていた。

タネ、モミ、カボチャ、4つの壺、4匹ずつの牛と豚の肉。それらに鶏の血をかけるという。そしてラオ・ハイ(甘酒)も捧げられている。

柱には「タレオ」という、お守りが架けられている。

動物などに荒らされないように、お米がよくとれるようにとの願いが込められているという。そして、果物が沢山とれるようにと、バナナも下がっている。葉っぱには花が巻いてある。

昨日と今日、2日間のお正月。これらの供え物は、昨日、各家庭から持ち寄って準備され、そして、今日は昼の12時、村人がこの小屋に集まって、年に1度の会合が開かれたという。

この1年間、どんな悲しいことがあったか、どれだけ収入があったかなど、みんなで反省し、新年の段取りを準備するのだという。

その後、1時頃からさきほどの儀式を行い、宴に入ったという話であった――。

大地の精霊、ないし村の神が樹木に宿るというこうした信仰は、東南アジアに広く分布している。山から村に木を迎えて立てるという儀礼もいくつか知られている。

北ラオスのラフ族では、「新年の木」を村の広場に立てるといわれる。



また、ビルマの赤カレン族でも柱建ての行事を行う。2大年祭の一つが、4月の稲の播種の直前に行われ、村の中や近くの広場に柱を立てるとのこと。毎年1本の新しい柱が立てられ、古い柱は立ったままにしておき、倒れたり腐ったりしても取り替えないという。

そう言えば、思い起こすのは諏訪の御柱祭りである。あの祭りも、山から木を伐って来て社殿の四隅に立てるまでの、柱建ての行事である。

――御小屋の山の樅の木は里に下りて神となる。

木遣り唄のこの言葉にあるように、御柱は神の依り代と考えられているのだ。

ふと偶然立ち寄った村であったが、ラオ・トゥンの人たちの正月に立ち合えたことは、とても幸運であった――。

「どうか、一緒に踊っていってください」

と、村長と副村長が何度も勧める。よほど輪の中に入りたかったのだが、

「もう、出発しないと、本当に明るいうちに帰れんよ」

とカンムーンに諭され、やむなく車に乗らざるをえなかった。

帰路は、途中で立ち往生することもなく、車は順調であった。

――町が近くなってきた頃、小さなダムがあった。ナムドム・ダムである。

「おかげて1日中、電気がくるようになったよ。3年前からなんだ」

カンムーンが語った。

それまでは、3日に1度の割で、電気がこない時もあったという。

メコン河ひとつ隔てた対岸の村は、まだ電気が通っていない。今もランプ生活である――。

電力の供給は、ラオスの数少ない輸出品目の一つなのだが、自国にはいまだこういう現実が存在している。

夕暮れのルアンパバーンの町が見えてきた。

家々に灯りがつき始めていた――。

●プーニューとの別れのとき

12月8日、出発の朝。

ホテルの前、朝食に出かける我々の姿を見つけると、カンムーンがやってきた。いつものように、トゥクトゥクの溜まり場で客待ちをしていたのだ。

「やあ、いよいよ帰るんだなあ」「またおいでよ。そんときは、また、おいらの車に乗ってさ……」

「一緒に写真をとろうよ」

「えっ、おいらも入るのかい」

よほど嬉しかったのか、相好崩して、照れること照れること――。

彼がはじめて帽子をとった。

すると、なんと見事に頭が禿げあがっている。

誰かに似ている。

「プーニューだ！」

と、咄嗟に口走ってしまった。

一瞬、まずいことを言ったと思ったが、カンムーンは只々笑って照れるばかりであった――。

準備万端、いよいよ出発。

ホテルの玄関に出て、トゥクトゥクの溜まり場の方を見たが、今日の客がついたのだろうか、プーニュー、いや、カンムーンの車はすでになかった――。（了）

写真右頁：カム族の集落、パーノーン村はちょうどお正月の真っ最中であった。彼らは、カミが宿る〈ラックバーン〉といわれる村の柱に対し儀式を行う。村の正月と〈聖なる柱〉について説明する副村長のオンケオさん。



ナーガの眠る街
ルアンパバーンのボートレース

――鈴木玲子

「ボートレース大会」はラオス語で「ブン・スワンファ」という。「ブン」は「祭り」、「スワン」は「競う」、「ファ」は「船」の意味である。雨期の終わりの頃にラオスの大動脈であるメコン河沿岸各地でボートレース大会が開催される。なかでもラオス旧暦9月下弦13日と下弦14日に行われる村対抗のルアンパバーンのボートレース大会は盛大で美しいと評判である。

ボートレース大会

ルアンパバーンのボートレース大会は一週間ぐらい前から村ごとに練習が始まる。「ファ・ワット」(＝寺の船)と呼ばれるボートは、普段は村の寺の境内に置かれている。本番さながらに猛々しいかけ声がメコン河の支流のカーン河に響く。ルアンパバーンの男性が一番熱く燃えるのだという。漕ぎ手は40歳以下のその村出身の男性が原則である。原則といったのは、現在勝ちそうなボートにスポンサーがついていて、スポンサーが強そうな漕ぎ手を選ぶので、その村人とは限らないのである。スポンサーは粉石鹸の会社であったり、各省庁の県役場であったりする。スポンサーは、漕ぎ手が力が付くようにと練習のたびに玉子や牛乳を支給していた。そしていよいよ本番の日を迎える。それは古都という名にふさわしく、水の守り神ナーガ(＝龍)への拝礼という儀式にのっとって行われる。2日間にわたるボートレース大会は大体次のとおりである。

◆◆◆

旧暦9月下弦13日

●午前6時～10時　「ロ、ラート」(＝縁日の日)

24/VII

ボートレースの様子。後方がスタート地点。



ブン・カオパダップディンの托鉢。男性は立って、女性は座って托鉢をする。



「ターオ・カムラー」というナーガが眠る岸辺に長老がカトンを奉納する。

ナーガの眠る街
ルアンパバーンのボートレース

（＝ムー・チェーク）

……プーシーホテルの十字路から県立競技場まで路上には、駄菓子や玩具、ゲームが並ぶ。たくさんの人で道はあふれる。

午後7時　「コップガン」（＝前夜祭）

……夜通し応援団らが飲めや歌えやの宴会

◆◆◆

旧暦9月下弦14日

●午前6時～8時　「ブン・カオパダップディン」（＝飯供え祭）

（＝ムー・ダップ）

……祖先霊を天から呼んでごちそうを食べてもらうために皆、寺へ行く。バナナの葉で作った盆に御馳走一式を盛って、仏塔の周りや敷地の四隅に置く。その後托鉢や読経をする。

●午前9時　オールや供えものの準備・参加者集合

……船艇以外の必要なものを本堂の前に並べ、漕ぎ手たちはスポンサーや村人達の差し入れを食べて力を蓄える。船は練習時からすでに寺近くの川縁に浮かべてある。

「ヘー・ナーンフア」（＝船美女の行列）

……船の準備が整ったところで、その村の長老、美女、漕ぎ手の順に列を作り、寺を3周する。「仏法僧」の意味である。僧侶より聖水をかけてもらい、寺を出発する。船のあるところまで歓声や太鼓を叩きながら行進し、船に乗り込んでレースの勝利と安全を祈る儀式を行う（後述）。

●午前10時　カーン河に集合

……メコン河は水量も多く、水流も激しいので、支流のカーン河で行う。ゴール地点にて登録後、スタート地点で出場順に整列。

●午前11時　県知事・来賓者「パームサイ」到着

……「パームサイ」はその昔、王が王宮の裏のメコン河から玉船に乗ってここまで来てレースを見たとされる見晴らし台で、ゴール地点でもある。



「へー・ナーンフア」
僧侶より聖水をかけてもらい、レースの勝利と安全を願って行進する。
（イサラー・ヤーナターン氏撮影）



●午前11時30分　開会式

……「ナーンダム・ナーンドーン」の船を先頭に出場順にパームサイに来て来賓の前で一礼。その後、全船がパームサイ地点に集まり、開会式。

●正午　「ナーンダム・ナーンドーン」の儀式

……黒装束の女性の船と白装束の女性の船が競争する（後述）。

●午後12時30分　競走開始

……コースはカーン河橋や下流にある中州からパームサまでで、全長約2キロ。

●午後4時　決勝

……トーナメント勝ち抜き戦。

●午後4時30分　閉会式

……優勝者には、銀の器（1キロの重量分）と10万キープ（約5千円）が知事より渡される。

●午後5時　閉会

●午後6時　勝利のパレード

……3位以内の村は勝利の酒に酔い、歓声を挙げながら村へ帰る。

◆◆◆



細長いのが船首と船尾につけるマークベン。手前がナーガに捧げるカトン。右が神に捧げるカン。

ナーガの眠る街
ルアンパバーンのボートレース

以上がボートレース大会の大体である。特筆すべき点は、「ヘー・ナーンファ」と、「ナーンダム・ナーンドーン」というルアンパバーン特有の儀式である。

ナーガへの儀礼

「ヘー・ナーンファ」は前節でも挙げたように、寺から出発して船に乗り込みレースの勝利と安全を祈る儀式である。「ヘー」は行列、「ナーンファ」は、「船美女」の意味である。行列は先頭から長老、美女、漕ぎ手の順に並び、長老の手にはナーガに捧げる料理の入った「カトン」、美女の手には天の神に捧げる花器の「カン」、漕ぎ手のキャプテンや村の実力者の手には船首と船尾につける飾りの「マークベン」が持たれている。美女は以前は三人で船首、船中、船尾に座ったが、現在は二人、ボートの真ん中に座る。船に乗り込むとまず、漕ぎ手がマークベンのとがった方を先に向けて船首と船尾につける。「マークベン」は滴の様な形をした赤い飾りで、先に無事を祈る聖糸が巻き付けてある。船はまずカーン河のターパーファン橋たもとの木の根もとに美女が花器を、長老が三角のカトンをそえる。次にカーン河とメコン河の合流地点の向こう岸の木の根もとにもう一人の美女が花器を、長老がもう一つの四角のカトンをそえる。これはターパーファン橋の川底には「ターオ・カムラー」というナーガ(龍)が、カーン河河口には「ターオ・トングアン」というナーガ(龍)が川底に眠っているという由来による。土地神でもあるこのナーガが暴れると河が荒れて船に勝利を呼ぶことができないのだ。特に「ターオ・カムラー」の気性はとても激しく、その昔、前夜祭で酒に酔った象がこのターオ・カムラーの住みかである穴に落ちたところ、タオ・カムラーは激しく怒って丸飲みし、象の血も爪も残らなかったという言い伝えがある。長老の捧げるカンには、ナーガの好物や紙人形が入っている。紙人形は、ナーンファと呼ばれる美女を捧げる代わりである。そのナーンファの捧げるカンは、天の神(テーワダー)のためである。長老は線香とろうそくを立ててつぶやく。天と地の両方に勝利と安全と繁栄をお願いするのである。

もう一つのレースの先頭を飾る「ナーンダム・ナーンドーン」の儀式とは、黒装束の女性(＝ナーンダム)と白装束(＝ナーンドーン)の女性ばかりが漕ぐ2隻の船が競走し、必ず白装束の方が勝つ儀式である。「ナー



「ナーンダム・ナーンドーン」の船。
漕ぎ手はシェンメーン村の女性達。
(イサラー・ヤーナターン氏撮影)

ンダム」はコックファにいたナーガで、「ナーンドーン」はコックトーンにいたナーガである。「ナーンドーン」は、幸運を招くナーガで、意味は「白い婦人」。「ナーンダム」は、不幸を招くナーガで、意味は「黒い婦人」。皆が幸せに暮らせて、富と繁栄を街にもたらすためにもナーンドーンが勝たなければならないのである。

ルアンパバーンには、15頭のナーガが川底に眠っているそうだ。ナーガは水の神であり、その土地の神である。水をこの地にもたらしてくれてこそ、稲も育つし、お腹一杯食べられて家も村も豊かになると言う。優しいナーガ、気性の激しいナーガ、幸運のナーガ、不幸のナーガなどいろいろいるが、15頭のナーガのお陰で豊かに富と栄光を築いてきたルアンパバーン。ボートレース大会は、そんなナーガへの感謝と供養を兼ねている。それはまたちょうど祖先霊を天から呼び寄せて供物を食べてもらう祭りの日でもあり、天の神への感謝や供養も行われるのである。ルアンパバーンのまだ王がいた頃は、王自らが

おわりに

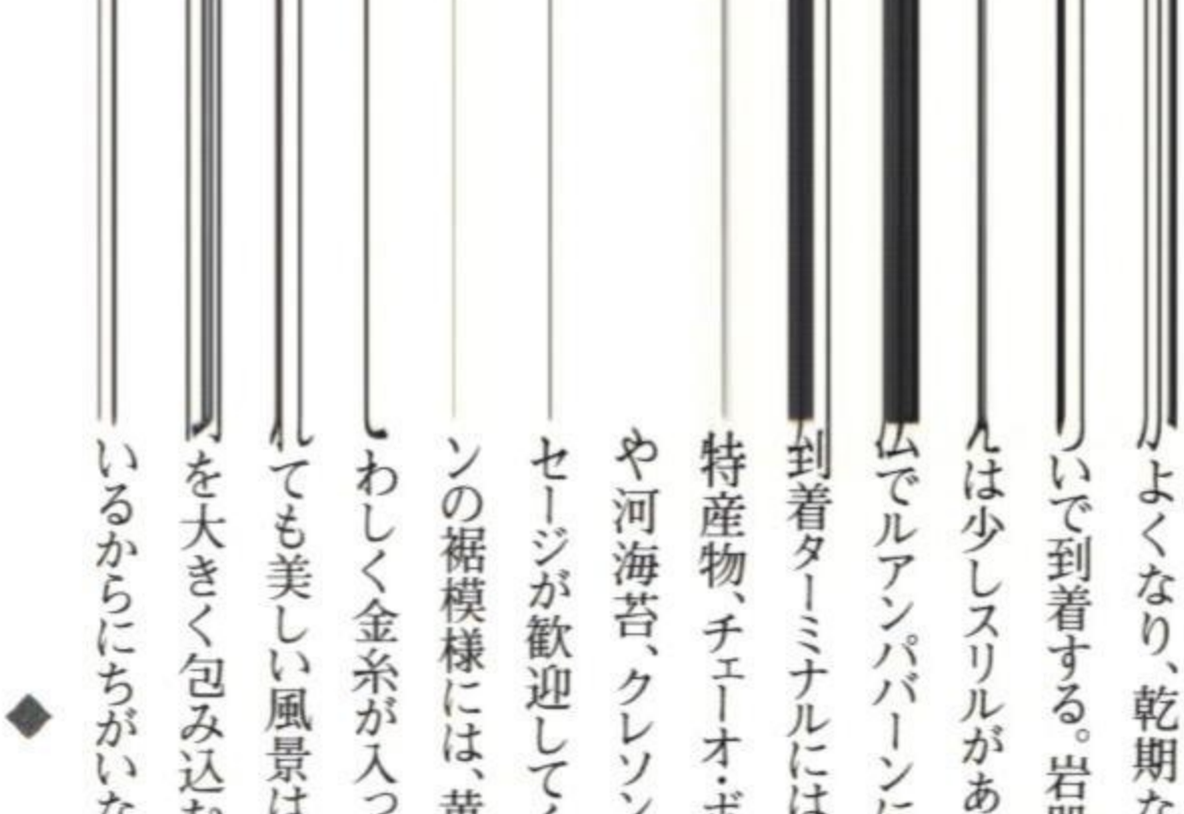
首都のヴィエンチャンから飛行機で一時間もかからない。プーシーの山の上にそびえる黄金のチョームスィー塔を囲んで並ぶ町並みとメコン河が左手に見えたらルアンパバーン到着

◆

る。15頭のナーガの王は、この仏下に眠って守っているそうだ。真いルアンパバーンの空港に降り立、四方を山で囲まれている穏や空気に包まれる。バスでヴィエンから入る方法もいい。道路状よくなり、乾期ならば8時間いで到着する。岩肌の見える山は少しスリルがある。どちらの仏でルアンパバーンに入るにして到着ターミナルには、ルアンパバー特産物、チェーオ・ボーン（辛い味や河海苔、クレソン、水牛の皮、セージが歓迎してくれる。女性ンの裾模様には、黄金の古都にわしく金糸が入っている。何度ても美しい風景は、その下にこを大きく包み込む15頭のナーいるからにちがいない。

福知人ヴ号附

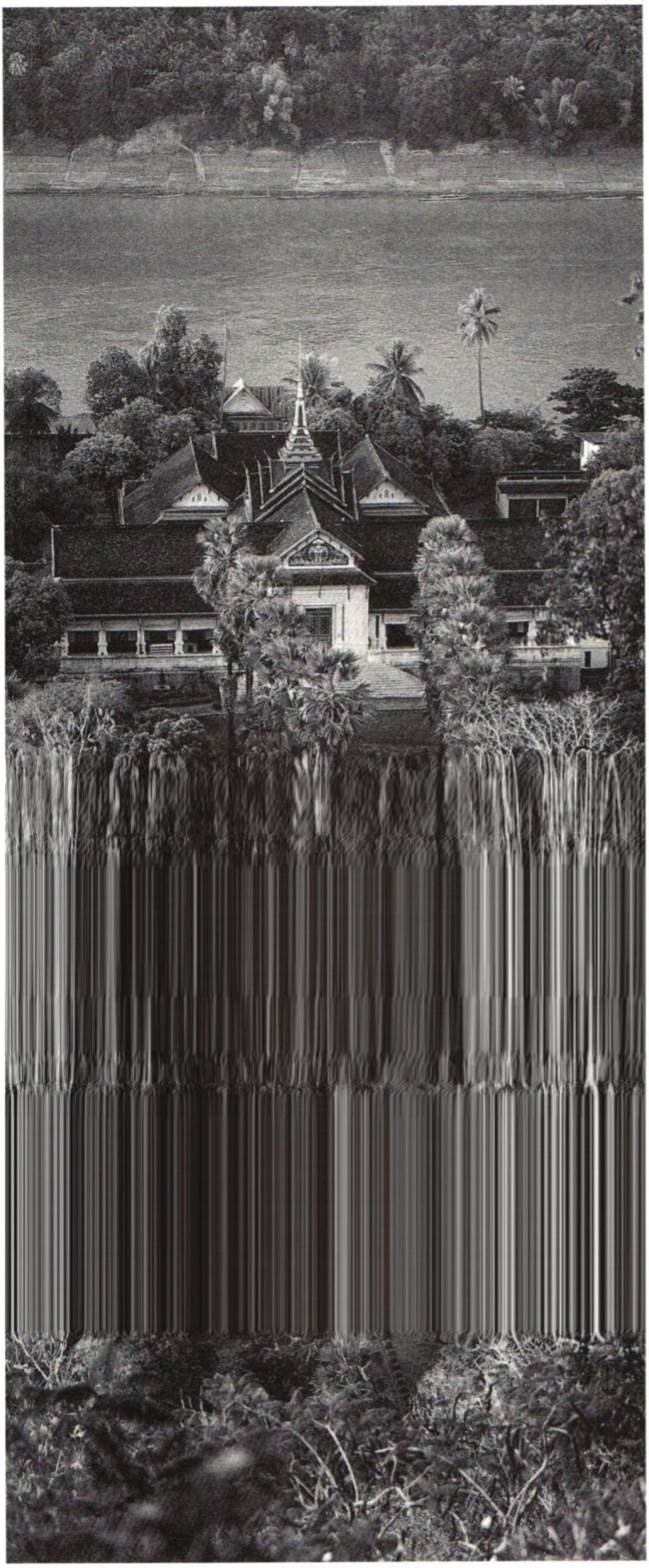
執筆中にシャンティ、96年秋紹介したマハー・ピラー・ウィーランサー氏の訃報をきいた。また一アンパバーンを心から愛し深く人が他界された。記してご冥お祈り申し上げる。



縁日の定番ゲーム。ボールが番号のある枠に入れば、その番号の景品がもらえる。

ラオスの古典文学
——新しい姿を求めて

——ウティン・ブンニャウォン　翻訳・鈴木玲子



王朝時代の栄華を偲ばせる、ルアンパバーンの王宮博物館。旧王宮。

海外の文学者は、ラオスの現代文学より古典文学の方をよく知っている。なぜならば、古典文学はフランス(注1)などによって海外に知られる機会があったが、一方の現代文学は第二次世界大戦後に生まれた文学で、海外に知られる機会がむしろ少ないからである。

古典文学は、「ランサン文学」とも呼ばれている。その理由は、ランサン王国時代の16世紀から17世紀のウィスンナラート王(1501~1520)とスリニャウォンサー王の時代に発展したからである。そしてスリニャウォンサー王崩御の後、国は三つに分裂した。ランサン王国時代は終わりを告げ、シャム国(注2)に支配されることとなったのである。

◆◆◆

ウィスンナラート王時代は、ラオスの文学界にとって特筆すべき時代である。というのも、ランサン王国年代記である「クンブロム伝承」が文字化され、仏教が採り入れられた時期でもあるからである。仏典や「ナーンタンタイ(Panchatantra)」などのようなインドの説話をラオス語に翻訳する宗教学者達がたくさん輩出した時代でもある。ウィスンナラート王時代に次ぐポーティサラート王時代は、当時強く信じられていた精霊信仰や占星術を廃止した。そして1523年には、外交官を(タイの)チェンマイ(ランナー王国)に派遣し、高僧をラオスへ招聘すると共に60巻の仏典をランサン王国に持ち帰った。ランナー王国(チェンマイ)とランサン王国の友好関係はますます親密なものとなっていった。そのため、両王国の文学が似ていても不思議ではないのである。

一般に研究者達の間では、ランサン王国の仏教と文学の黄金期はスリニャウォンサー王時代までと考えられている。なぜならば、次のような史実と資料が残されているからである。このスリニャウォンサー王時代は、オランダ東インド会社が置かれているバタビア(注3)のオランダファン・ディエマン(Van Dieman)の名代でファン・ウストホッフ(Van Wuysthoff)という西洋人がランサン王国を訪れ、1641年ヴィエンチャンのタートルアンでスリニャウォンサー王に拝謁した。翌年の1642年にはイタリアのイエズス会士団(Missionary Giovanni-Maria Leria)がランサン王国を訪れた。レリア神父一行は、当時の都ヴィエンチャンの様子を次のように記している。

「…都は高い城壁と水路で取り囲まれている。もう一方は、メコン川に面していて外敵からの侵入を防ぐのに都合がよい。王宮はきちんと美しく建てられている。遠方より眺めると、それは高くそびえ立ち、空に届きそうなくらいである。

またこの王宮はとても広大で、多くの人が住んでいる。もし注意深くしなければ、それはまるで一つの国のようにも思えてくる。…」

これと同様の記述が「サンシンサイ（またはシンサイ）」というランサン王国時代の代表的文学作品の中にも出てくるのである。

◆◆◆

ラオス文学の研究者であるマハー・シーラーウィーラウォン氏は、ラオスの文学界にとって重要な位置を占める「シヤオサワート」の中にヨーロッパ諸言語からの外来語が書かれていると記している。「レンズ」という語はまさにその例で、これはヨーロッパ諸国の船による航海の際に使用された「Lens」、即ち望遠鏡のレンズに由来する語である。このことは、この代表的作品であるラオス古典文学がちょうどランサン王国の黄金期に書かれたことを意味するのである。

当時は仏教が盛んになった時期でもあった。その影響で宗教学者達がインドの説話をラオス語に翻訳したり、僧侶が文学作品を創作した。文学作品を創作できる立場にあるのは僧侶のみ（注4）であり、寺院が文化の中心地であったのだ。そして当時の文学といえば、やはりインドから伝来した「ジャータカ物語（Jataka）」（注5）である。これはお釈迦様の前世である十生大神の生まれ変わりの物語である。ラオスの博学者層は、それに似たさまざまな話を追加創作して、これらもジャータカ物語であると言った。なぜならそうすることによって国民の信頼と尊敬を得たかったからであり、仏教の権威を高めるためでもあった。

文学が人々の間に浸透していったのは、寺院の力に拠るところが大きい。僧侶は集まった民衆に、仏教の徳を説く一方で、文学作品を語って聞かせたのだった。また葬式や妊婦の出産儀礼や一族のさまざまな祝い事や儀礼など、場合によっては自宅で行われる宗教儀礼のときに文学作品の読み聞かせが行われたりした。この時代にはまだ



バイラーンを手にする僧侶。

本を印刷出版するということが行われていなかったのである。

◆　◆　◆

古典文学はバイラーン(注6)に書かれている。バイラーンからバイラーンへ次々と書き写されていく過程において様々な表現や格言(Vertion)が少しずつではあるが異なっていった。その原因は次の二つが考えられる。まず写本する者が、その地方にあった表現を加えていったからである。また次から次へと書き継いで行くということは、書き写し間違いも生じ得るのである。そのため意味不明な格言や話のつながりの悪いところが見受けられ、読んでも難解なところが出てきたりする。このようなことがあるために、たとえ現在の正書法による本が印刷出版されるようになっても、現代の人々は古典文学を好んで読むということをしない。もう一つ読者を困難にさせているのは、パーリ語やサンスクリット語に由来する難解な語や既に使用していない古典ラオス語の語が使用されていることである。従ってラオス古典文学はお年寄りの語りによったり、モーラムの語るラムを聞くことによって受け入れられることが多い。けれどもこの二つのいずれの方法も作品を短く要約したものでしかないのである。

「サンシンサイ」(注7)という文学作品はラオスの中で最もよく知れ渡っており、新しい正書法体系で何度も本として印刷出版された作品である。これはマハー・シーラーウィーラウォン氏が多くのバイラーンを比較研究し、正しい格言を選んで編集を重ねたことに拠るからである。更に彼はバイラーンの傷みが激しいために解読不能な箇所を補筆したり、パーリ語やサンスクリット語を知らない者が書き写したために生じた間違いを校正した。「サンシンサイ」はラオスの名作(Masterpiece)なのである。その他にも「ナーンタ



お寺に保存されているバイラーン。

ンタイ」「パラック・パラーム」「パウェートサンドーン」「マホーソット」「タオフン・タオチュアン」「タオシヤオサワート」「シェンミエン」「クンルー・ナーンウア」「カムパー・ピーノイ」「チャンパーシートン」などの傑作がある。

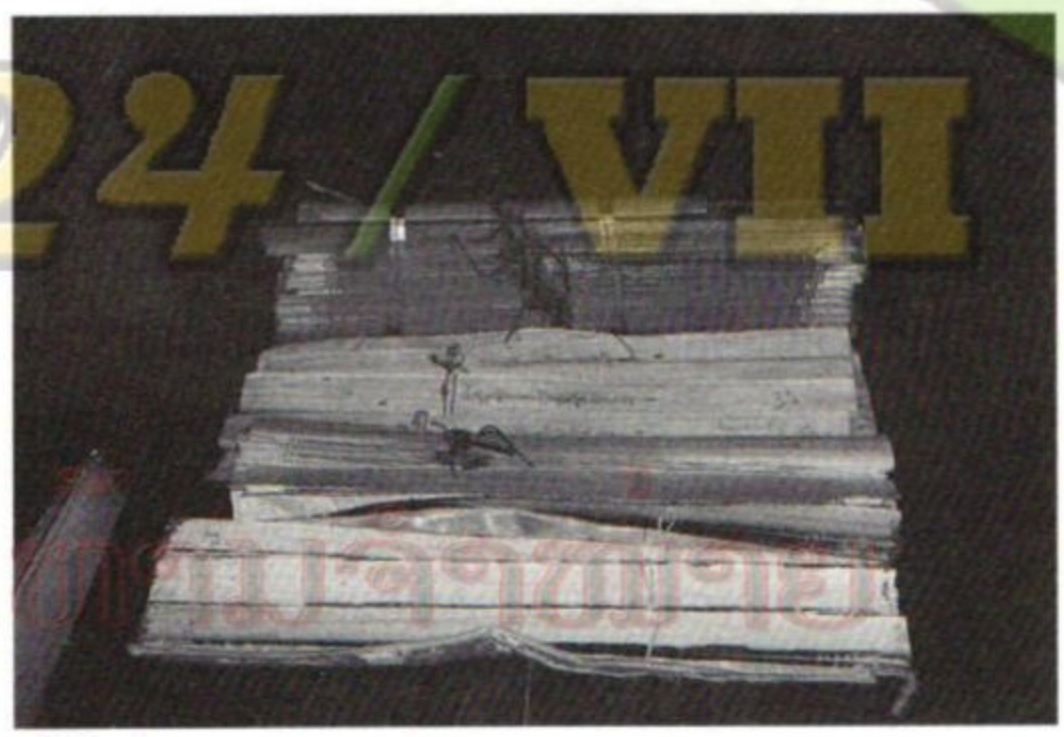
◆◆◆

現在、古典文学は新しい姿を見せることによって大衆に受け入れられ出している。どのようなことかというと、読みやすく文を改訂したり、絵本(Picture book)にしたり、人形劇にしたりするということである。「シンサイ」「マホーソット」「クンルー・ナーンウア」「シェンミエン」「チャンパーシートン」「ナーンテンオーン」「カムパー・ピーノイ」などの全てが読みやすくするための何らかの工夫がなされたことによって大衆から支持を得た。なかでも「カムパー・ピーノイ」は、まず絵本(Picture book)にした後、日本の「おはなしきゃらばんセンター」の援助を受けラオス国立図書館が人形劇にしたことによって古典文学が若い世代に受け入れられたひとつの成功例といえるであろう。

◆◆◆

このような新しい姿で大衆に姿を現した古典文学は、国民の文学への関心を高めることに貢献した。一般の人々は自分自身で初めから終わりまで文学作品を読むようになった。それ以前は話の冒頭のみ読んで、途中でやめてしまった。なぜなら昔の人が書いた言葉が難しくてわかりにくかったからである。また学生や研究者は、昔の社会や文化、言語をもっと詳しく知りたいという欲求からオリジナルを読みたいと思うことがあるかもしれないが、そのようなときに読みやすいように改訂した文学作品は大いに彼らに役立った。

私は、古典文学、即ちランサン文学は、次世紀の国民の重要な意味のある娯楽の一つになると信じている。それらはマンガ本やビデオという新しい姿に変えることによって我々の前に現れ、成功を



バイラーン。

収めるであろう。ウォルト・ディズニーがアラブの物語の姿を変えて、大いなる成功を収めたのと同じように。

◆◆◆

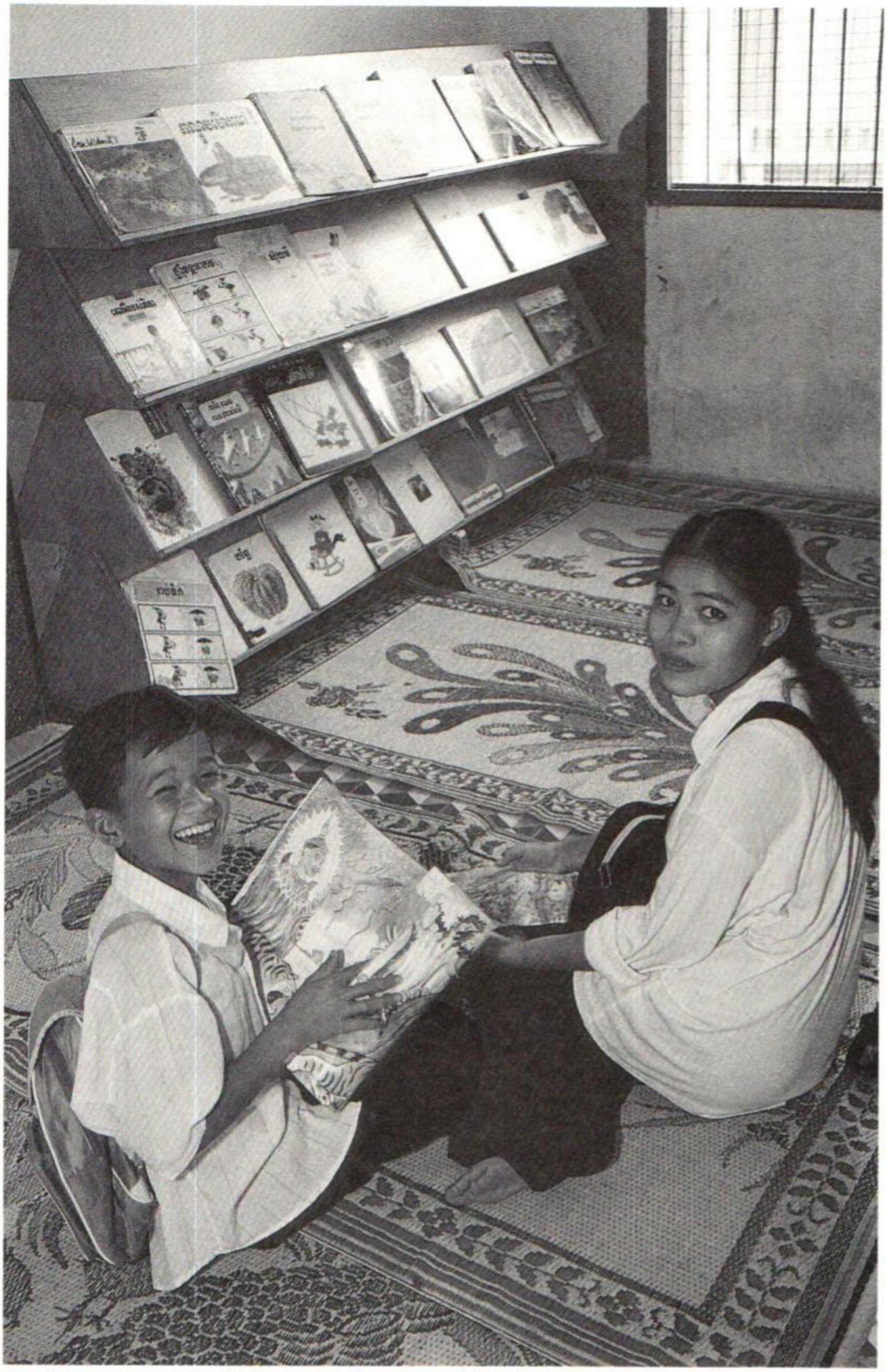
●●●●●●●●●

【編集部注】

（1）フランスはラオスの旧宗主国。

（2）現在のタイ王国。

（3）オランダ植民地時代のインドネシアの首都ジャカルタの名称。



民話の絵本を読んでいる子どもたち（ヴィエンチャンにて）。

（4）僧侶にならないとパーリ語、サンスクリット語を学ぶことができないため、たとえ文学者であっても出家した後でなければインド文学を翻訳することはできなかった。

（5）有名な仏伝文学であり、釈迦の前世物語、過去世の釈迦が国王、バラモン僧、商人、様々な動物などの姿をかりて、種々の善業、功徳を行った説話を収録したもの。紀元前3世紀頃のインドの当時の伝説がもとになり、仏教的色彩が加わってできたものといわれる。東南アジアをはじめ、ペルシア、アラビア、日本の文学にも影響を及ぼし、世界説話文学の研究上、重要な位置を占めるといわれる。

（6）バイラーンとは、ニッパ椰子の葉。中国や日本の竹簡や木簡と同じように、ラオスに紙が入る以前にニッパ椰子の葉に綴った様々な記録の総称である。細長い木簡状にそろえられた葉の上に、鉄筆を使って文字を手書きで刻み、インク代わりに樹皮などの煮出し汁を擦り込んで文字を書く。その一枚一枚を二ヵ所に穴をあけた穴に紐を通して綴じていく。このバイラーンを守ってきたのが仏教寺院である。

（7）サンシンサイとは、ランナータイ王国初代の国王メーンラーイの生涯を描いた叙事詩である。

◆　◆　◆

執筆者の紹介

ラオスの文学界をリードする作家・文化人

――ウティン・ブンニャウォン氏

ウティン・ブンニャウォン氏は、1945年、ラオス人民民主共和国の北西に位置するサイニャブリー県ボーテーン郡で生れた。幼少時代をこの地で過ごし、10才のときに進学のため、首都ヴィエンチャンの親戚の家に移り住む。家が貧しかったために親戚の家でさまざまな手伝いをしながら学校へ通ったという。ヴィエンチャン高等師範大学を経て、国家出版局に編集委員として勤務する。そして間もなく執筆活動を始める。処女作品は1973年「女性の中の女性」で、女性の強さ・美しさなどをいろいろな女性を取り上げて描写した。

1980年～85年、モスクワの国家出版局に在勤後、1990年より情報文化省文学局の副局長となる一方で、作家活動も佳境に入っていく。この80年代後半から90年代前半の間、当時の「ワンナシン誌」等などの文芸誌に「異常な死に方」「ジャール平原からの声」「ココナッツ殻の財

産」「灰」など、次々と現代短編小説を発表していった。なかでも1991年に出版した「お母さん―短編小説集」は、わかりやすい現代語で母の尊い愛情や貧困の中でも忘れられない友情、美しい自然描写などを描き、作家としての地位を不動のものとした。彼の作風には、幼少を自然の美しい地で過ごし、幼くして母の元を離れて過ごしたことが望郷や自然愛、母への憧れとなってその後の作品にも表われ続けている。1992年にはフリーとして作家活動に専念。また執筆活動をする傍ら、ラオス作家協会の設立、同協会の仲間達のなかでも常に指導者的立場でラオスの文学界を引っ張ってきた人物といえよう。氏の作品は、これまでにロシア語ベトナム語タイ語等に翻訳されている。

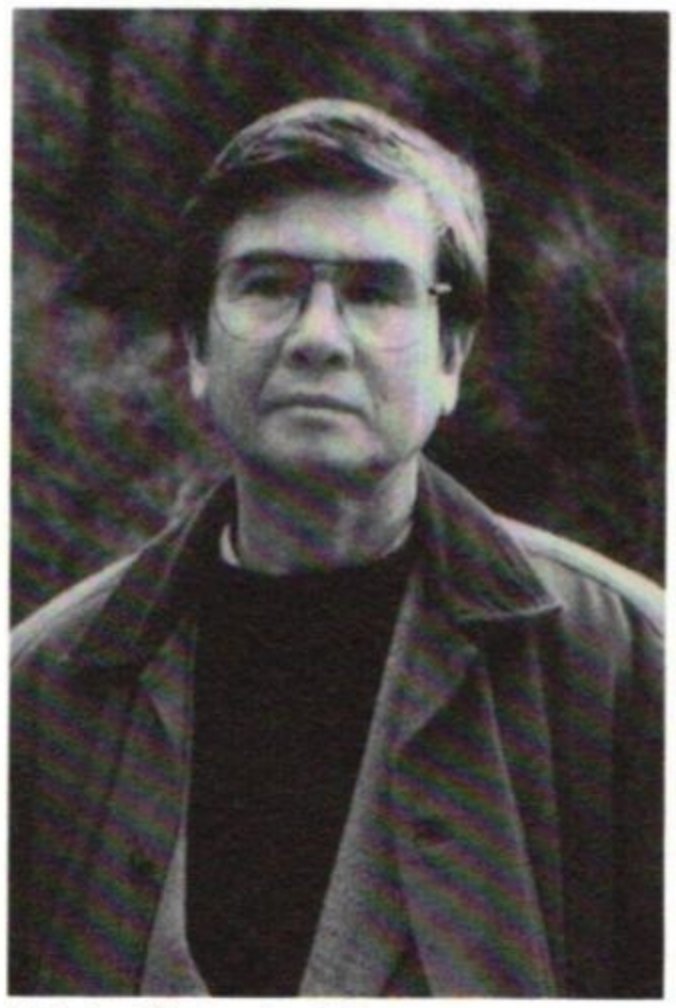
近年は、現代小説以外にも、ラオスの古典物語をわかりやすい現代語に翻訳し出版する試みも行っている。大学ではラオス語の他にラオス文学史、古典文学に見るラオスの伝統文化等を講義している。その温厚でやさしい瞳の中にもラオスへの熱い想いが伝わる講義と人柄は学生の絶大な信頼と人気を得ている。

（鈴木玲子・記）

もあるドアンドゥアン女史と共に文化活動も行っている。子どもは娘2人。義姉はやはり文化活動家で著名なダーラー・カンラニャー女史という文化人一族でもある。

アメリカ、ワシントン州立大学で教鞭を執った経験もあり、1998年からは東京外国語大学外国語学部東南アジア課程ラオス語専攻、総合文化講座の助教授に着任し、現在東京に在住している。大学ではラオス語の他にラオス文学史、古典文学に見るラオスの伝統文化等を講義している。その温厚でやさしい瞳の中にもラオスへの熱い想いが伝わる講義と人柄は学生の絶大な信頼と人気を得ている。

（鈴木玲子・記）

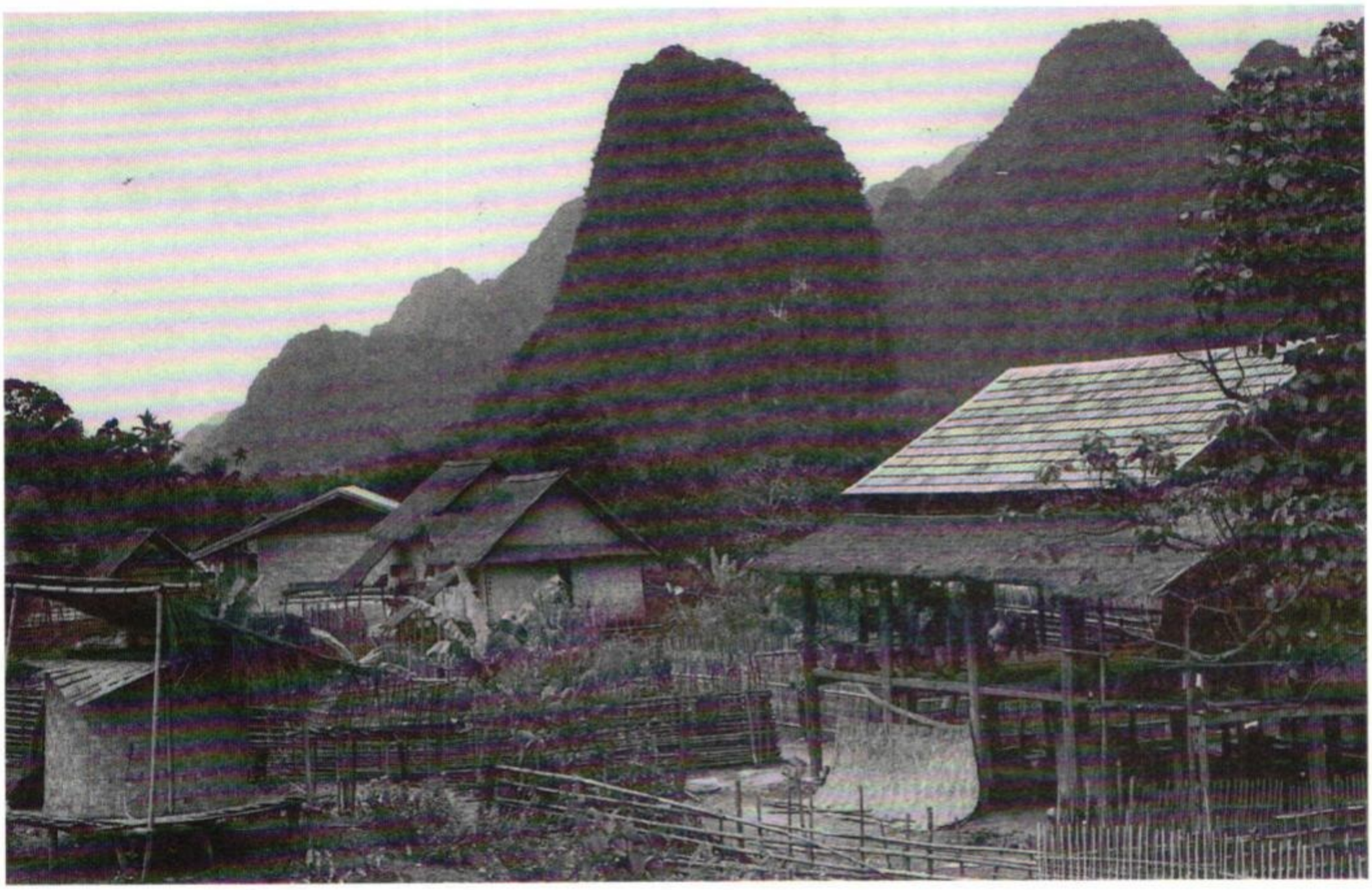


ウティン・ブンニャウォン氏。

岩田慶治が語る

「アジア・奥の細道」

ラオスから歩き始めたアニミズムの旅



パ・タン村　北部ラオスの家と村、石灰岩の山々が村をとりまいている。この大きい岩山がパ・タン

「朝、庭におりたって木々にあいさつする。『今日は木蓮さん』、『今日は泰山木さん』。もちろん、木は返事をしない。しかし、泰山木の枝にぶらさがり、木蓮の肌に触れていると、ゴツゴツした、ザラザラとした肌ざわりを通して、木々の返事が返ってくる」（岩田慶治著『アニミズム時代』より）

この言葉だけを見ると、岩田慶治さんという方は詩人か文学者かと思われるが、れっきとした文化人類学者である。東南アジアでフィールドワークをかさね、そこで出会った山河大地と自由に対話しながら、自然と人間を包括する共生の思想、草木虫魚教（アニミズム）を展開してきた方である。

小雪の舞い降りる2月、京都は銀閣寺にほど近い、疎水に面した閑静な自宅にうかがった。自宅には旅先などで集めた沢山の蛙の置物、そしてご自身が描いた森や木々の油絵のキャンバス。それらが所狭しと並び、さながら岩田マンダラであった。

参禅やヨーガにも取り組み、海外調査の途上では短歌を詠まれるなど、研究という以上に、アニミズムそのものを生きているように見える岩田さん。ラオスから始まった、そのアニミズム探究の旅についてお話を聞いた。

（聞き手・構成／大菅俊幸）



岩田慶冶氏（自宅にて）

●ラオスの心をたずねる旅

――ラオスとのそもそもの出会いはいつ頃だったのですか？

1957年でした。稲作民族文化総合調査団の一員として、タイ、カンボジア、ラオスをめぐったのですが、その時、通りかかった北部ラオスの村がとても気に行って、翌年、一人でその村に調査のために入ったのです。それはパ・タン村という村で、とても美しい村でした。

バンビエンという町から国道13号線に沿って、北へ約20キロほどのところにあります。ナム・ソン、ナム・パ・モームという二つの川の合流点に位置し、東側には海抜1、200メートル前後のパ・ルアン、西側にはパ・トンチンという石灰岩質の鋭く、鋸のように尖った山々が連なっていました。

その村で、たまたま空き家になっていた家を借りて住んだのですが、夜はポー・ボアという村人の経営する雑貨屋の物置をあけてもらって、そこで寝ました。

木の椅子と木のベッドがあり、石油ランプが下がっていました。それに私のトランクが一つ。ショルダーバッグが一つ。それだけでした。

昼間はポー・ボアの案内で村の家々を一軒ずつまわり、夜は石油ランプの下で翌日の準備を

しました。折々にフィールドノートの余白に詩や歌のようなものをつくっては書き留めたりもしました……。この村は私にとって最初の海外調査地だったんです。

●カミと出会ったとき——パ・タン村のこと

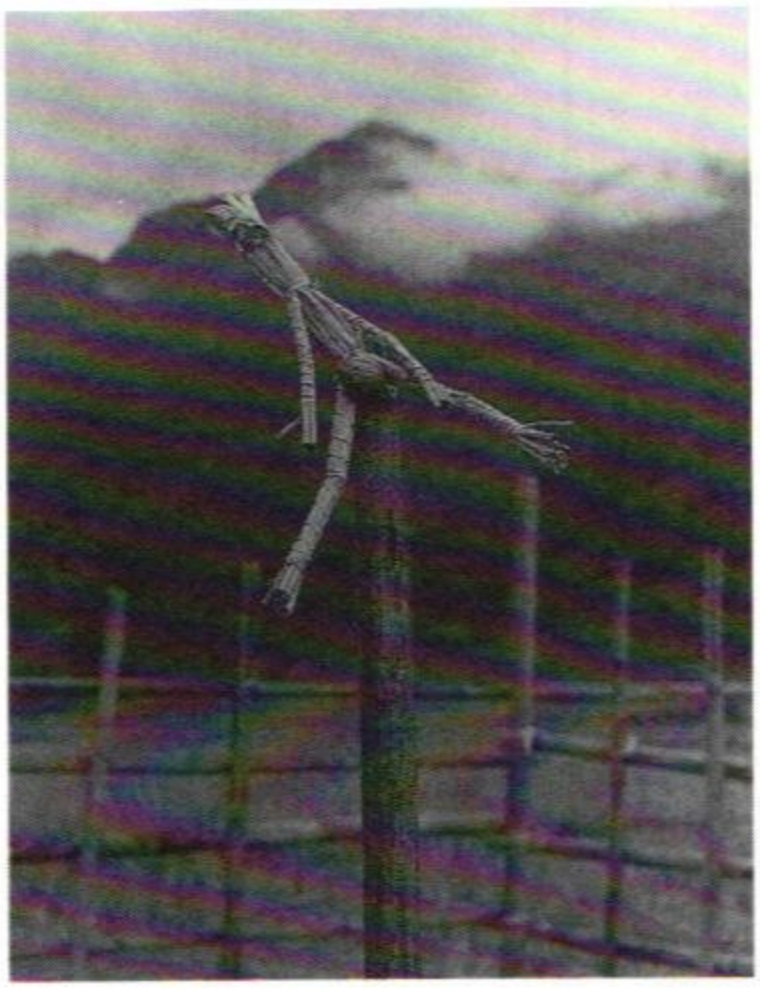
——村での印象深い出来事について聞かせていただけますか?

村の真ん中に大きな菩提樹がありました。太い幹のまわりは一人では抱えられず、2、3人でやっとでした。昔、この村の僧が町の寺を巡礼していた時に持ち帰って植えて、それから百年たった、と村人は言うのですが、正確なことはわかりません。豊かな葉っぱをいだいた菩提樹で、村人の自慢のタネでした。昼間の菩提樹は遠くから見てもよい形で、何億という葉が一枚ずつ、ゆらゆら、さらさらと揺れていました。

しかし、夜になると一変しました。この村は谷間の村なので、山から吹き下ろす風の勢いが強く、それが夜がふけるにつれて勢いを増し、ゴーゴー、ゴーゴーと葉っぱが鳴って、一人で寝ていた私はこわくなりました。その木にもたれかかると虎に喰われないと言われていましたし。

ラオスの村人と話していると、人によって、地方によって違いますが、神様の名前が沢山でてきます。ピー・ドーイ(ピーは神、ドーイは山)、ピー・マイ(木の神)、ピー・ヒン(石の神)、ピー・ナム(水の神)をはじめ、洞窟の神、虎の神、舟の神、水田の神、畑の神など、全部をあげきれるものではありません。

ある日、はだしになって川を渡ろうとしたら、水の勢いがとても強くて、中流まで進んだところで川底の石にすべって、転びそうになりました。「そうだ。このあたりに水の神がいたんだ。気やすく渡ってはいけなかったのではないか」と反省してしまいました。村人は川のそこここに精霊がいると言っていたからです。



脱穀作業を守る人形、土地の守護者—シャン・ミァン(パ・タン村)

ピー・ナムが潜んでいるとも言っていました。

それから、村はずれにパ・タンという石灰岩の峰がそびえていたんですが、村人の話ではこの大きな峰の割れ目に仏像が安置されているということでした。そのことを確かめたかったのですが、そのあたりには虎がいるということで、あえて近づかないことにしていました。この岩じたいがカミさまの象徴だったのかもしれません。

●澄んだ眼で自然と文化を見直す

——いわば、カミとの出会いということになるのでしょうか。そのような体験がその後の研究の出発点になったのですか?

そうです。その後、タイやカンボジア、ボルネオなど東南アジアをまわり、スリランカ、インド、ネパール、ブータンへも出かけましたが、カミが身

近にあらわれるという村人の話や振る舞いを列挙すればきりがないことになります。その人たちの自然への振る舞いに触れて、われわれのつくってきた文化というものを見直さなければ、と思いはじめたのです。

人間は、自分の見方で、自分流に解釈して自然を捉えてきたと思うのです。人間中心に振る舞ってきました。自然の全体を見なかったといってもよいでしょう。

木と言えば、昼の輝く姿だけを見て、夜の暗黒のなかの姿を思いやらなかった。石と言えば、川原にいくらでも転がっている石ころだけを見て、その石に寄せる人間の深い心を知りませんでした。水についても同じで、人間が利用する水にだけ関心をもって、水の立場にたとうとしませんでした。生き物についても同じで、人間の役に立つかどうかという点から判断して、よい動物、悪い動物と品定めすることが多かったのではないでしょうか。それは人間中心の見方です。

人間は、そのようにしてそれぞれの流儀で自然を取り込み、文化あるい伝統という絨毯を織り上げ、その上で暮らしてきたわけです。そのおかげで暑さと寒さから身を守り、病気と飢えを遠ざけることができました。しかし、森林の破壊が進んだり、生き物の種が絶えたり、身のまわりの自然に大変多くの歪みと不調和と破壊が起こっていることに気づかなかったわけです。

こうしたわれわれの文化をもう一度よく見直さなければなりませんね。

●アニミズムとは――大地の智恵、身体の智恵

――それがアニミズムの探究であったわけですね。アニミズムというものについて少し詳しくうかがえますか?

さきほど、ラオスの村のことを話しましたが、人間が魂をもっている。そして同じようにすべての生きているもの、生きていないものも魂あるいはカミをもっている。そういうもの同士としてつきあう。それをアニミズムといいます。しかし、これまで、このアニミズムの捉え方は、仏教やキリスト教などの高等宗教とくらべると、迷信や誤解を含んでいるので低次な宗教だと見なされてきました。だから、どんな民族もアニミズムの段階を卒業しなければならない。それが未開、野蛮から文明にいたる当然の道すじである。そう考える人が多かったのです。しかし、私はこういう考え方に疑問をもっています。自分たちを文明人と思っている人の傲慢と誤解がアニミズムをおとしめてきたのではないかと思うのです。

木々に挨拶をする。もちろん木は返事をし



パ・タン村よりナーム・ソンをさかのぼって荷物を村びとにかついでもらう。奥地の村に向かう。

ません。しかし、木の枝にぶらさがり、木の肌に触れていると、ゴツゴツした肌ざわりを通して木々の返事が返ってくる。自然のなかの応答、感覚のやりとり、そこにアニミズムの出発点があると思うのです。こういうやりとりは、我々のまわりにいつも繰り広げられています。そのなかからカミが誕生します。そして、アニミズムと呼ばれる最も根源的な宗教が生まれると思うのです。ですから、アニミズムというのは、宗教の出発点であり、すべての宗教の根底にあるものだと思います。

――従来のアニミズムの捉え方は、自然や宗教を自分の外に置いている。しかし、自分の内側の問題として捉え直さなければならない、ということにもなるでしょうか。

そうです。――ハッと驚く。不思議だ。これはただごとじゃない、と立ち止まる。ここに人間の文化を越えたものが露出している。カミだろうか。ひょっとすると自分が自分に出会ったのだろうか。何となくこころが落ち着く。そういう経験や事実と、その解釈の伝統につけられた名前、それがアニミズムです。ですから、自分の体験であり、自然と自分が触れあっている、そういう体験がアニミズムなのです。そもそも誰でも体験できる、すでに体験しているものなのです。だからアニミズムという言葉でなくてもかまわないのです。それで、私は草木虫魚教という名前をつけたりもしたのです。

――自然保護の運動などについてはどのようにお考えですか？

森を大切にしよう、海を大切にしようということ自体、もちろん、結構なことです。しかし、もしも人間がコントロールできる世界として、自然を下に見ているとしたら、それはアニミズムではありませんね。人間が積み重ねてきた悪智恵の総決算ということになるんじゃないでしょうか。自然が人間と対等であり、両者が共存しているのがアニミズムですから……。

――お話をうかがっていますと、「山川草木、ことごとく皆仏と成る」という仏教思想のような感じもしてまいります……。

人によっては、「あなたのやっていることは仏教に近い」と言うかも知れませんね。私はとくに意識していたわけではないのですが……。ただ、道元は次のように言っていますね。私なりの現代語訳ということになりますが……。

「仏教経典を読んでいるうちに、読んでいる自分のからだとこころ、つまり、皮・肉・骨・髄がどういうものかわかってくる。そうすると、自分のからだとこころが共に脱落してしまって、そのとき突然、桃の花が自分の眼玉にぶつかって咲き、竹にあたった石の音が雷鳴のように耳の底



ブン・コーン・ホットという村の行事。まず僧侶が必要とするあらゆる物資、布団から歯ブラシにいたるまでを寺に寄進し、次に僧侶をかついで僧堂を3周、最後に僧の頭に水を注ぐ。この夜はラオスの踊り、ランボーがおどられる。村人の楽しい一日である。（パ・タン村）

から聞こえてくる。こうして経典が違って見えてくる。その新しい経典というのは、尽十方界、つまり宇宙全体、山河大地、つまり世界のすべてであり、草木であり、自分であり、あなたであり、坐ったりするときの身のまわりのすべてだ。……」（自証三昧）

これは本当のアニミズムのことを解説してくれているのではないかと思うのです。禅仏教とアニミズムは同じところから出発し、同じところを志向している。辿り着けばもともと同じ場所なのではないでしょうか。アニミズムは宗教という言葉以前の大地の智恵であり、身体の智恵ともいえるでしょう。

●和歌のこころとアニミズム

――ところで、最近、様々な所でアニミズムの必要性が言われているようですね。たとえば短歌の世界・歌壇においてもこれからの歌を救うのはアニミズムだと言われているようですが。

ちかごろは魂を抜かれた言葉が多くなって、コピー言語になってしまった事情もあるのでしょうか……。実は私も若い頃から歌をつくったんです。兵役にとられて、いやでも自分が自分に向き合うようになったとき、一人で海外調査に出かけたときに自然に歌ができるんです。自分との対話が歌になって吐き出されるのでしょう。私はならったこともないし、門外漢なのですが……、もともと万葉の歌の世界には、自然と自分の一体化をめざすものがあると思います。そこにアニミズムがあるのではないでしょうか。花や月をうたった歌人の西行にもアニミズム的なものを感じます。と言いますか、もともと日本文化の基底にアニミズムの心情があることと地面に着いていることと思います。

――今、西行の名前が出ましたが、歌人の上田三四二さんが、『この世、この生』という本のなかで西行について読み解いており、それを読んでとても感銘を受けたことがあります。西行という人は月や花へ憧れ、心を労した歌人といわれますが、その憧れの心は身から離れようとし、身は心を追って一寸ほど浮き上がり、それで、なお心身相即の調和を保っている。西行の身は現世浄土を求めて、地上のほんの少し――たぶん一寸ほど浮き上がっている、と言うのですね。

なるほど……。それを聞いて思い起こすのですが、スリランカの北のヒンドゥ教地帯。そこに小さい島があって、有名なヒンドゥ寺院があるんです。そこにみんな巡礼に行く。私も船に乗ってお参りに出かけ、帰りに寺院の石段に坐っていたら、サードゥと呼ばれる修行者が来たんです。汚れた黄色い衣をまとい、杖をもち、髭をのばし、頭陀袋をさげていました。そして、私の方に近寄ってきて、隣に座り、「おまえさん。この地球で一番遠い所はどこだ」って聞くのです。「それは足の裏でしょ」と言ったら、「その通り」と言って立ち去ってしまったんです……。

ですから、今おっしゃったように、地面から離れる、離れていることと地面に着いていることが別ではない。何とかもしれないが、そちらも主人公。花も主人公だし、地面も主人公。無数の主人公に囲まれて自分がある。そんな感じがします。宇宙のなかの無数の中心、その一つ。

ですから、アニミズムを見るためには、網膜と対象に距離があってはいけないんです。網膜をくっつけて見る。そうすると、見方が双方向的になる。自分が鳥を見、鳥が自分を見る。生を見ることが死を見ることと同じ。それが同時に見える……。

●これからはアニミズムの時代

――話が変わるのですが、もう一人、これからの時代にはアニミズムが必要であるとおっしゃる方がいます。社会学者の鶴見和子さんは、これからの日本を開いていく上でアニミズム

が原点となる。日本のあらゆる制度的なものを国家成立以前の段階に遡って、アニミズムを原点として見直すべきとおっしゃっているようですが、それについてはいかがでしょうか？

喜ばしいことです。でも私が嬉しいというより、草木虫魚が喜んでいるのではないでしょうか。それにしても、だいじなのは私たちの心が翻ることだと思います。それが一番難しいことですが……。

……かつて、東北タイのプルアン村というカンボジア人の村にいた時のことです。米倉の祭りが営まれ、そのとき、私もその中に入り込んで、しゃがみ込んで、祭司の祈りの言葉を聞いていたのです。稲の神にお酒をそなえてから、こう祈っていました。

「稲の神さま、長い間ごくろうさまでした。しばらく、この米倉でお休みください。そこでお願いがあります。家族の者が来て、一杯のモミを持ち出したら、どうぞ二杯にしてお返しください。二杯持ち出したら四杯にしてお返しください」

農家の主人も、祭司と一緒に祈っていました。私は聞いていて、ずいぶん虫のいい、勝手なことを言うなと思いました。しかし、よく考えると、決して虫のいい話ではなく、そこに無尽蔵、無限の世界があるということを知らせてくれていたのではないかと思ったのです。無限のシャワーが降り注いでいる。そこに触れると、モミは何杯取り出そうがやっぱり無尽蔵である。ハッとしました。稲と農民が米倉のなかで無限性、永遠のいのちを感じていた。そう言ってもいいんじゃないでしょうか。現代人は、無限や永遠の感じを忘れかけていますが、むかしの人は無限というひろがり、永遠という時間のなかで暮らしていたのですね。

そういう智恵は、文字や言葉ではなく、体から体へ伝わるもののように思います。無限が祭りのなかにあるということを体で教えてもらったと思っています。ゴソゴソと村人と身体を触れ合いながら——。

それから、インドのカシミールに行った時のことです。そこはイスラム教が信仰されている地域です。農家の庭で川の音がするので「あそこにも神さまがいるんじゃないですか」と聞いたんです。一神教なわけですから、憤慨して怒られるかと思いましたが、そうじゃなかった。そして、木の葉がサラサラとさわいだので、「そこにも神さまがたくさんいるじゃないですか」と聞いたら、「いや、神さまは一つ」と言って天を指さすのです。「一にして多」。文字を書けないような人が、いや文字に縁がないからこそ、そのような哲学的なことを語るんでしょう。驚きました。

●旅はつづく。不思議をたずね、自分をたずねて

——では、最後に、今後どんなことに取り組もうと思っていらっしゃるのか、うかがいたいと思います。

今お話したような、いわば〈村のブッダ〉ともいえるような人たち。その人たちの智恵を探究し続けたいという思いが今もあります。……いつか、北タイの村の畦道を歩いていた時なんですが、稲の刈り束を背負った一人のお婆さんが、向こうからやってきたんです。そして、すれ違い様に、突然、「どこに行ってきたの（パイ・ティダイ・マー）」と聞くんです。ギョッとしました。私は特別の所へ行ってきたわけじゃないし……、何かしら根源的なことを問いかけられたわけで、胸に突き刺さる思いでした。

「どこに行って、今、どこにいるの？」。まるで、石見の源左という妙好人（お念仏の信仰にとくに熱心に励む信者）が、牛を連れて、毎日草を刈って、牛の背中にそれをいっぱい載せて連れて帰る。そして、家に着いて、牛の首を撫でながら、「デン（牛の名前）よ、ご苦労だったね」と言う。人間を離れ、牛を離れ、感謝の思いが広がっていく。そういう世界と同じものがあると思いました。源左は学問を離れて牛に頭を垂れているのです。

ですから、これからの学問は、解釈をするこ

とではなく、問題を提出することではないかと思うのです。「どこへ行ってきたの?」――。考えれば考えるほど奥深く、そこからキラキラとした光を発する、そんな魅力的な問いをつくるということです。

――それから、最近、わが国でも東南アジアへの国際協力が盛んに行われるようになりましたが、それについてはどのようにお感じですか?

私も一時期、先ほど話したプルアン村で、生まれてから死ぬまで、農民たちはどんな一生を送るのか聞き取りをしたことがあります。色々な質問をしたのですが、とても喜んだのは「自分たちの将来はどうありたいか」と将来像について聞いた時でした。村びとの中には、「私はまだそのことをあなたに話してないぞ」と、催促する人もいるぐらいでした。夢や希望というものは、こんなに人を生き生きさせるものかと思います。きっと、白い画用紙とペンをもらって、自由に書いて下さいと言われているように思っていたのかもしれません。「田んぼの畦道を高くしたい」とか、「電話がほしい」と、様々な希望がありました。

しかし、ここからさらに、この農民たちのために、私自身、何かすべきなのかというと、そこがまだわからないのです。身体を救うだけじゃなくて魂を救う。人間だけじゃなくて草木虫魚を救う。ともかく、だいじなのは誰においても自分で窓を開いていくことだと思うからです。すでに世界は開かれているのに、自分が開いていないだけです……。

その土地の伝統文化やアイデンティティを守ることも、もっともなことです。しかし大地に立つということが大切だと思います。こちらからあちらに伝わるためには自分がそのままでは伝わりません。水になれば伝わる。風になれば伝わる。人間の変身が必要です。はたして、そういうことができるのか……。宗教というものには不思議という場所があって、そこに行くとできるのではないでしょうか。

ラオスから始まった私のアジアの旅ですが、それは芭蕉で言えば『奥の細道』を書くための予備調査のようなものです。その経験がたまってきたので、それを自分のなかで味わい直し、そのホントの意味を見つけだす。そういう、これまでと違った旅行記が書ければいいと思っています……。

――今日はありがとうございました。

◆

仰臥して眼つむればはるかなるナム・パ・モームのせせらぎの音

――パ・タン村小吟　岩田慶治



クメール族(カンボジア人)の村社の祭り。祭りは年2回。これは取り入れの祭りで、このとき祖先の神(ドン・ター)つまり、おじいさん、おばあさんが社の木偶に寄りついて祭がはじまる。2人の司祭が祭りを司り、村びとが集まっている。(ブルアン村)

少数民族の女たち

「ドゥアへの応援歌」

安井清子

私がラオスに行く度に、必ず訪ねる村がある。ビエンチャンからルアンパバンへと続く国道13号線を、バスで2時間ほどゆられて行くと、道路沿いの土手に小さな粗末な家々が、まるで斜面にへばりつくように建っているのが見える。その村はタイの難民キャンプから帰還してきた、モン族の村である。

私が彼等と出会ったのは、もう14年前、1985年のこと。タイ東北部のルーイ県にあったラオス難民キャンプ、バンビナイキャンプでSVAのスタッフとして働き出した時だ。私はそのキャンプにいる難民の子どもたちのための図書館活動を担当していた。

ドゥアはまだ10歳ほどの女の子だった。すらっとした背をした彼女は、何が原因かは知らなかったが、右目が白濁していて、上唇が少しめくれたように腫れ上がっていた。彼女も他の子どもたちと一緒に、遊びに来ては絵本を見たり絵を書いたりしていたが、さして目立つ子ではなかった。ドゥアの下には、ほとんど双子かと思うような兄弟、バァとソォ、そしてまだよちよち歩きの末の弟、ションポー。そして生まれたばかりの妹がいた。父親は癌で死んでしまったばかりで、未亡人になったおとなしい母、そして働きもののおばあちゃん、そして両手両足が不自由なおじいちゃんがいた。そんな中、長女の彼女は、いつの間にか、一家の大黒柱のようにしっかりと育っていった。



◀「ドゥア・ブーと息子」ビエンチャン県シヴィライ村にて

「ラオス すてきな笑顔」少年の死で書いたションポー（上）は、ドゥアの弟です。ドゥアをとてもよく手伝っていた。

彼等が難民キャンプからラオスに戻ってきたのは、1993年の暮れのことであった。ドゥアたち一家も、他の人々とともに、ラオスでの生活のスタートを切った。

●

久しぶりに会う、以前は赤ん坊だった子どもたちが、すっかりやんちゃ盛りとなって、さっそく遊び回っていた。子どもたちが私の回りを跳びはねながら聞いた。

「ねぇ、きよこは何才なの？」

「はっはー、何才だと思う？百八才だよ」

私はハナからわかるウソをついた。十代前半で結婚して、すぐ母となるモンの女たちと比べると、私などのように20になっても、30になっても結婚せずに一人でいるのは、モンの人々にとっては、信じられないらしい。常識はずれだと思われるので（まぁそうかもしれないが）ホントの年齢をあまり言わ



ない。すると、それを横で聞いていた、ちょうど薪とりから戻ってきて、大きな重いかごを背負ったドゥアが、まじめな顔で言った。

「そうかもしれないわね。本当に百八才かもしれないね。だって、きよこは全然変わったように見えないのに、ほら、私を見てよ、働きづめで、こんなに歳とっちゃった。前は、私は、きよこの肩くらいの身長の子供だったわよ。それが、今は大きくなって、結婚して母になったっていうのに、きよこは相変わらずなんだもの。」

まじめに言うドゥアに、私は何と答えていいかわからなかった。この十数年の中で私が変わらないというのはウソだが、彼女の生活の変化に比べたら、たいして何も変わってない。でも、ドゥアは、もうすっかり一人前の女性となり、一児の母となり、かつ離婚していた。旦那があまりいい人ではなかったらしい。彼女は息子を連れて、家族の元に戻ってきていた。そして、二人の弟の死、おばあちゃんの死…その年齢にして、人生の辛苦と皺を重ねて生きている。

ラオスに戻ってきてまもなく、上の弟、バァは、あっという間に死んでしまった。昨日まで平気で歩き回っていたのに、寝込んだのに」と、ドゥアは泣いた。

「足を切り落としても生きている人がいるんだから、肩だし、死ぬなんて思わなかった。ションポーの意識は最後までしっかりしてたのよ。お腹がすいたとか水を飲みたいとも言ったの。でも、やっと大きな病院へ運ぶための車が到着したと思った



男の子もよく子守りをするよ

むとあっという間に死んでしまったという。たぶんマラリアだったのだろう。

そして下の弟、ションポーは、魚や小鳥を打つための、威力の全然ない銃をいじっていて、間違って自分の肩を打抜いた。噴水のように噴き出す血を、ドゥアは布で抑えながら、うめく弟を抱えて、隣村の診療所に運んだ。布はすぐに真っ赤に染まり、ドゥアも血だらけになった。結局、診療所でも適切な止血がされずに、弟は血を流し続けて死んだ。

「残念で悔しくて、ションポーは5年生になって、勉強もできるし畑仕事も手伝ってくれるし、本当にいい子だったのよ。小さい時は泣いてばかりいたけど、本当にしっかりしてきて一番姉思いだったの。来年中学にあがるから、自転車買ってよ、って言うから、心配しないでしっかり勉強しなって言ったばかりだっ

ら、医者が、輸血してからでないと運べないからって、車はまた走り去ってしまった。『どうしてぼくを乗せていかないの?』って弟が聞くから、『血を買いに行ったのよ』って私が答えたら、ションポーはね『ちぇっ、それならもう死ぬんだね』って間に合わないよ。ぼくはもう死ぬんだね』って、はじめて目を閉じて、そして死んでしまった」と、姉は泣いた。

ドゥアといつも一緒に仕事をしていたおばあちゃんが病気で亡くなった、1週間ほど後だった。「おばあちゃんが死んだ後でよかったのよ。おばあちゃん、孫が死んだの知ったら、生きているうちに悲しんだものね」

ドゥアは、最近、村の女性委員会の責任者となった。村の女性たちが作るハンディクラフトを集めたり指導したり販売したりする仕事を担当している。日が暮れて薄暗い夕闇の中で一人、小さな計算機を押し、ノートの数字を書き続けている彼女を見て、私は胸がいっぱいになってしまった。いつのまにか、まだ10才の女の子だったドゥアが…。今は、一人のしっかりとした女性である。ドゥアは悲しみをこえて成長している女性だ。

ある時、彼女は私に言った。

「この白濁した右目と、ふくれた唇は、生まれた後、まだ小さくてよちよち歩きの頃、親の不注意で、なってしまったものなの。だから私、親を恨んでいるのよ。」

ドゥアは言った。めったにそんなことは言わないに違いないが…顔に受けた二つの大きな傷。生まれた時はきれいな顔をして生まれてきた女の子が、後で身内の決して悪気ではない不注意で受けてしまった傷。彼女の心にどんな深くのしかかっていたことだろう。私は、聞くに聞けなかったそのことをはじめて聞いて、そして、ドゥアの悲しみの重さを知った気がした。そして上、どうしてこんなに背負わなくていけないのだろう?もう、それだけでも十分過ぎるほどの重みだったのに…父の死。結婚。離婚。そして、二人の弟の死。おばあちゃんの死。今、女手一つで家系を支えているような彼女…彼女の強さはこの悲しみから出ているのだろうか?でも、たぶん、そんなら、きっと強さなんかいらないに違いない。踏み越えて強くなるための悲しみなら、いらなかったに違いないんだ。でも、仕方ない。いったいどうしようもないじゃないか?

だから、がんばって、ドゥア。私はあなたを誇りに思うから…応援してるから。

そんなこと言われたって、全然うれしくもないのはわかるよ。でも、がんばって。私にはそれしか言えないから。

がんばって、ドゥア。



お母さんといつもいっしょ



ボーンサワン市内にある市場

アジアを見る視点

「変わりゆくラオス」

——竹原　茂（旧姓：ウドム・ラタナヴォン）



ジャール平原。先史時代の大きな石壷が点在している。

ラオスはインドシナ半島の中央に位置し、メコン河を中心にした内陸国である。旧フランス植民地、第二次世界大戦後も何回となく内乱が起こり、インドシナ戦争（日本ではベトナム戦争という）中でも当時のソ連、中国、アメリカ、フランス、日本、タイなどの国々から影響を受けた国である。もともとラオスは、ランサン王国（Kingdom of Lane-xang＝百万象の国）として統一した。その後、主としてタイの勢力下に入ったが、1899年フランスのインドシナ連邦に編入された。そして1949年、フランス連合の枠内で独立が認められ、1953年10月22日、フランス・ラオス条約によって完全独立を達成した。その後1957年3月11日、ラオスは対日戦争賠償請求権を放棄した。しかし、このことは一般日本人の間にはほとんど知られていない。

そして24年前、つまり1975年12月2日、無血革命（王政派と左派ラオスは仏教の教えを尊重したのだと思う）によって王政を廃止し、「ラオス人民民主共和国」となった。

ラオス北部シェンクアン県（ジャール平原）シィーポム寺院再建事業に協力する

1992年8月22日、私は当時の在日ラオス大使、カムシン・サイヤコーン氏のご理解とご協力により、シェンクアン県ポーンサワン市を視察した。その日、プーミ・ヴォンヴィテット大統領代行（1994年1月死去）とシェンクアン県知事、プーミ・ティッパヴォーン氏から2時間ほどシィーポム寺院再建とラオス再建についてお話しを聞かせていただいた。そして翌日の朝、早速シィーポム寺院現場を視察した。シィーポム寺院はポーンサワン市から約35kmの所にあるが、当時の道は悪く、橋がなかったので、日本製のランドクルーザで川に入って行ったことを今もはっきり覚えている。帰国後、早速、朝日新聞の友人にお願いしたら、大きく「ラオス復興、まず寺から」という見出しで同年10月17日の新聞に掲載してくれた。おかげさまで各方面から反響があり、私の麗沢大学の研究室の電話が鳴りっぱなしだった。朝日新聞の記事の内容がすぐれていたこともあるが、仏教とラオス再建に理解のある方々がたくさんいらっしゃることを知った。

私は「戦争で破壊したラオスの心を取り戻すのはやはりお寺しかない」と思っている。なぜなら、ラオスは仏教を信仰し、お寺は村の中心であり、人々が集まる場だからである。人々は困ったことや悩み事など、必ずお寺へ行って僧侶に相談する。そういう場を提供してあげることは、もっとも大事だと思う。私は南部ラオス（サワンナケット県）出身であるが、初めて北部ラオスの有名なジャール平原を見たとき、とても感動してしまった。なぜなら、同じラオス国内にいながら、一度も訪れる機会がなかったからである。そして、私が10年以上付き合った友人、長谷川久子さんにシィーポム寺院再建について相談してみた。翌日彼女はお友達一人を連れて、私の研究室を訪ねてくれた。私が撮ってきたビデオや写真を見ながら説明すると、その後、長谷川さんは、「先生、シィーポム寺院完成のためにはいくらかかりますか」と尋ねられた。「計画の資料によると約600万円かかるでしょう」と私は答えた。すると、長谷川さんは、「その資金はラオスの人々、村の人々のために私に出させて下さい」と語るのだった。何と優しい日本人の友達であろうかと私はうれしくてうれしくてたまらなかった。

同年10月9日、在日ラオス大使館、カムシン大使に同金額の小切手を手渡した。その後1994年3月4日から約1週間、長谷川さん、柳清子さん、五十嵐勉さん、そして楠山忠さんらと現場を視察することができた。シェンクアン県知事、副知事を初め、寺院再建委員の方々は、村の人々に

大歓迎された。1992年に行った時より、道や橋の建設が順調に進んでいたのでほっとした。そしてシィーポム寺院は、長谷川さんはじめ、日本人理解者、朝日新聞の友人、世界に散らばったラオス人、特に在日ラオス人の方々より、多大なご協力とご理解を得たおかげで、1995年4月17日にとうとう完成に至った。しかし、私はその時、おりしも大学の新年度がスタートしたばかりで、長谷川さん達を連れて、完成のお祝いに行けなかった。そのことが返すがえすも心残りである。しかし、長谷川さんの祈りが通じて、このシィーポム寺院は村の人々の役に立ち、ラオス人の心に深く刻まれたことは間違いない。心から感謝している。

知られざる不発弾の問題

さて、インドシナ戦争で多くのラオス人の命が奪われた事実は確かだが、現在でも、不発弾や地雷で命を失うラオス人がたくさんいる。去年日本テレビ「今日の出来事」で「ラオスで不発弾による被害」について放映されたが、これによると、インドシナ戦争中アメリカ軍は北ベトナムからの物資補給ルートである「ホーチミン・ルート」を爆撃し、同ルートの北部はラオス領内に落とした爆弾は300万トン～700万トンにのぼるとも言われている。特に北部ラオス、シェンクアン高原やサムヌア県などかつての「ホーチミン・ルート」周辺では不発弾が集中して埋まっている。私が1992年に同県を視察したときも、ムアンカム温泉のそばで大型不発弾を見つけたことがある。その他種類としてはボール爆弾がある。そのボールのような爆弾で遊ぶラオスの子どもたちの命が奪われる事故は後を絶たない。イギリスの地雷除去・不発弾処理専門の人道団体MAG（Mines Advisory Group）と「UXO—LAO」（Unexploded Ordamce—LAO，1996年）がヴィエンチャン近郊の訓練所に危険地区の住民を集め、探知、処理のトレーニングを実施している。しかし、農作業中などに不発弾に触れて被害に遭う村人が後を絶たず、毎年死傷者は約200人～300人にのぼる。ラオスの不発弾事情はカンボジアの地雷状況に比べてあまり知られていない。地雷は触れれば足などが損傷するが、不発弾による事故は、直接死につながることが多い。大国のエゴ、代理戦争のため、不発弾に囲まれ暮らしているこうしたラオス住民の不安な気持ちをどうか理解してほしい。専門家によるとラオス全土に埋まる不発弾を撤去するのにはあと100年かかるといわれる。アジアの戦争の後遺症を癒すために、ぜひ日本の皆様、日本政府、NGOなどに、ラオスのこの問題にもっと関心を持って頂ければと思う。

ラオスデータ

国名：ラオス人民民主共和国（LAO PEOPLE'S DEMOCRATIC REPUBLIC＝LAO P.D.R）
首都：ヴィエンチャン（VIENTIANE）
面積：23万6800平方キロメートル
人口：470万（最近のデータでは500万となった）
宗教：仏教（95% その他5%）
公用語：ラオ語（LAO）その他フランス語、英語、タイ語、ベトナム語、中国語
GNP：一人当たりUS$350（1996年）
通貨：キープ（KIP） 1US$＝4160K（1998年11月）

ASEANに加盟するラオス

長い間、世界から孤立されたラオスはやっと1997年7月23日にASEANの仲間入りをはたした。「チンタナカーン・マイ」（新思考）政策を打ち出した1986年から13年、去年の春にカムタイ新大統領が就任し、新体制がスタートした。ラオスの外交政策は、「地域の平和、安全、相互協力」と、地域をグローバル化させる「ASEAN自由貿易地域（AFTE）」に参加する準備をしていることである。私は1997年5月28日～31日まで、麗沢大学、その他、日本の10大学の教員計12

名を連れて、ベトナム、ラオスを訪れ、学校交流を実現した（日本経営教育学会＝NAMEのご協力）。そのとき、ラオス政府高官であるクケオ・アカモントリ博士、トーンライ・シースタム先生（ラオス国立政策、行政研究所）に会うことができた。両氏は最近のラオスの新経済システムについて説明して下さり、次のように指摘された。①世界の経済学者に政府の市場経済導入計画検討について理解してもらいたい。②国民全体に普及する人材が足りない。

最近のラオスの動きとしては、1994年4月にメコン友好橋（第2の友好橋は南部サワンナケートにも予定されている）が開通してから、ラオスとタイ、ラオスと世界の人々との間がさらに密となり、「ラオスは世界に解放された」というイメージが徐々に浸透してきたように思われる。そして、ホームステイや研修、留学などでラオス人が日本の国を訪れることが頻繁になった。日本政府ODA、JICA、青年海外協力隊などの関係者、専門家などが毎年数名ラオスに派遣される。その逆にラオスの若手リーダーも毎年5～10名日本に研修に来ている。また、間もなくヴィエンチャンのワッタイ新国際空港が開港する予定であり、1999年はラオスの観光年である。ヴィエンチャン首都の道路やホテル、レストラン、歓楽街やお土産屋なども2年前に旧王都ルアンパバーンがユネスコの世界文化遺産に選ばれた。ただ、地方への交通の便がまだ充分とはいえない（特に山間地方）。飛行機以外はまだ整備されておらず、道路も建設の真っ最中である。

ラオス政府観光局発行の「DISCOVER LAOS: MER1999によると、LAOS: The hidden heart of Asia, VISIT LAO YEAR—AOS」SUMMER1999—EVENTS AND FESTIVALS—には、細かくラオスの各地方の名所や年中行事の紹介が掲載されている。ラオスにはすばらしい仏教美術、仏教文化があり、人々は雄大なメコン河のゆったりした流れのようにおっとりしている。そして、適度の人懐っこさと自然な振る舞いが身についている。そんな穏やかな国民性をもち、外国人に対して大変親切なラオス人の国に日本の皆さんもぜひ、一度訪れてはいかがであろうか。


建設中のシィーポム寺院


シィーポム寺院の中の元の仏像（ブッダ）
（以前はトタン屋根の下にあったが今はコンクリートの建物の下）（1994年3月）


ポーンサワンの市場では墜落した米軍機の破片でつくった金物が売られている。


シェンクアン県ムアンカム市の温泉の近くにある不発弾の一部

東南アジアの音楽文化

世界に向かって、ゆんたしよう!

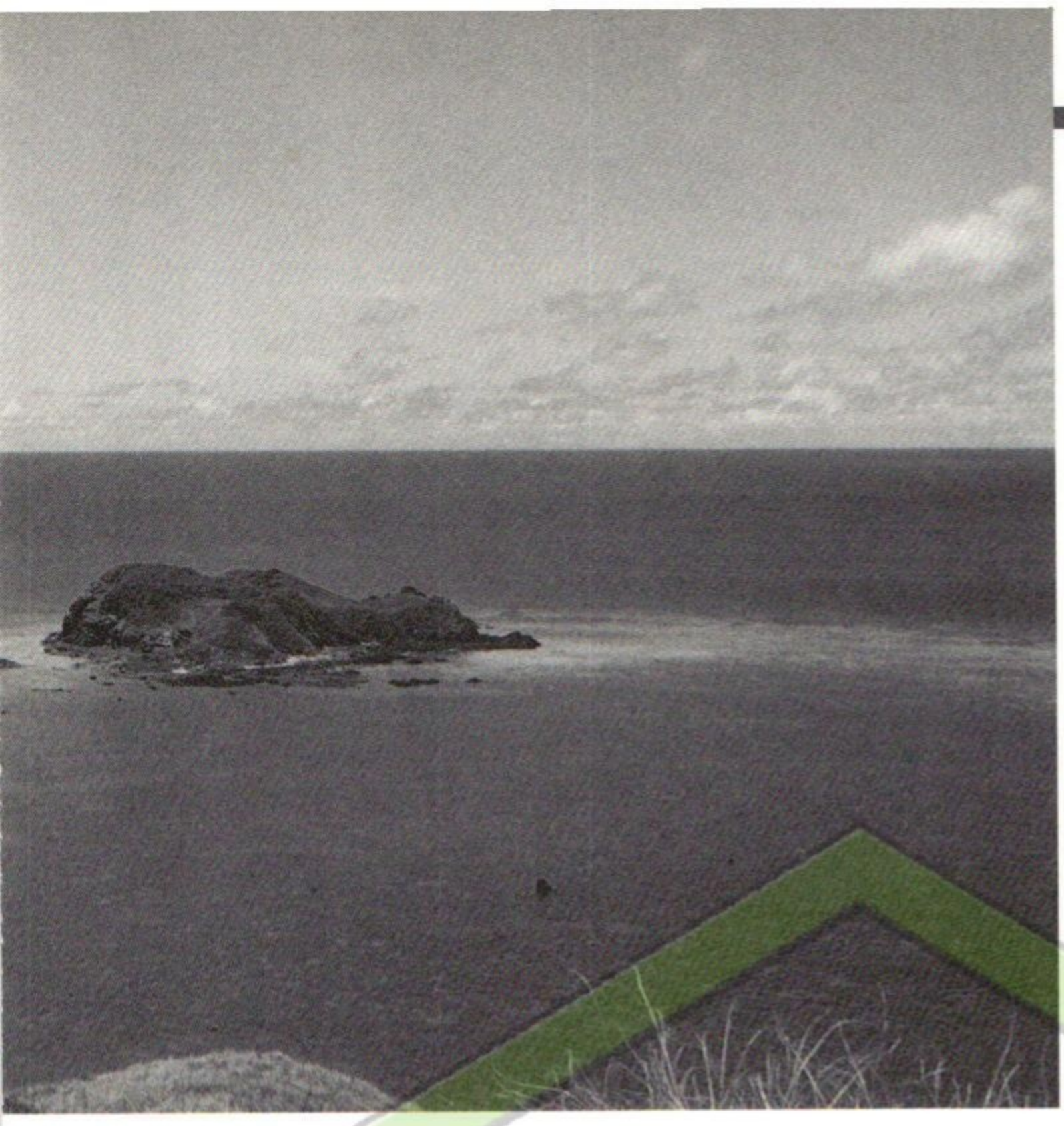
——大工哲弘の音楽世界

山見りば　八重山ゆ思い出し
海見りば　生まり島思い出し

●
●

ゆったりした力強いメロディ。沖縄県南西部、八重山地方を代表する民謡「とぅばらーま」の一節である。

那覇空港から約400km、ジェット機は1時間足らずで石垣空港に降り立つ。山を見れば八重山を思い出し、海を見れば故郷の島を思い出す……とうたわれているとおり、石垣島は山と海のコントラストが美しく、またこの島に生まれ育った人びとが抱き続ける"生まり島"への思いもひとかたならず深い。



▲「海見りば……」雄大な海が広がる石垣島の最北端、平久保崎。



この島の人たちは、石垣島を〝八重山〟と呼び、沖縄本島に行くことを〝沖縄に行く〟と言う。沖縄県内なのに、ここは沖縄ではなく八重山なのである。

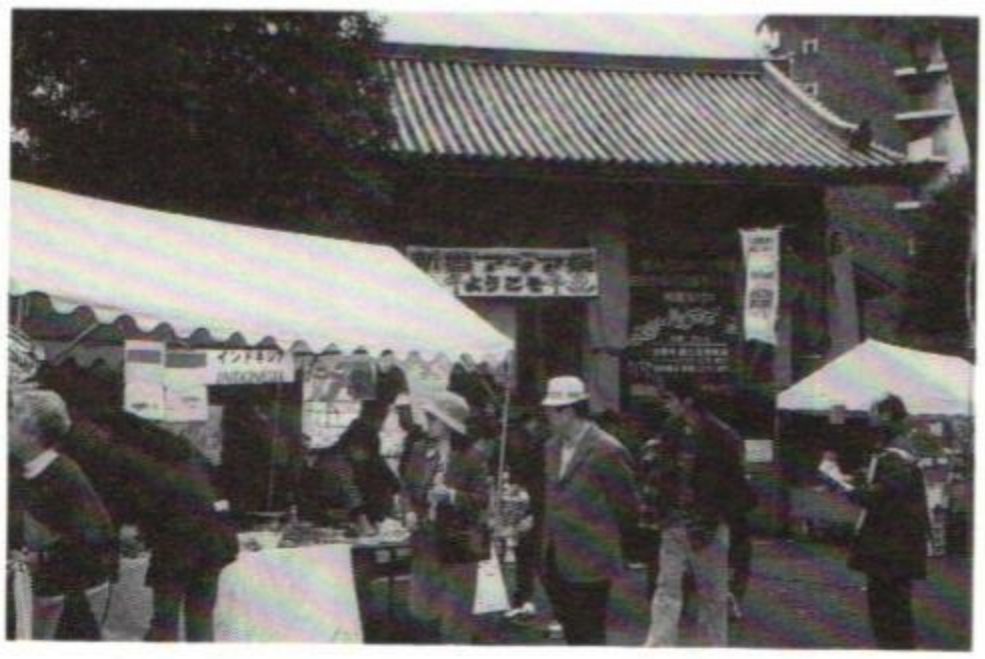
八重山と沖縄本島では、唄が違う。歌詞の方言が異なるだけでなく、唄の様式や発声法も違う。同じ琉球文化圏ではあるが、八重山地方には沖縄本島地方とは異なる独自の文化があり、八重山独特の唄がある。

98年11月22日。東京四谷の東長寺本堂に八重山の唄、八重山の声が響いた。東長寺と新宿駅に近い天龍寺で開催された〈新宿アジア祭〉(新宿アジア祭実行委員会主催・SVA共催)のなかの催し物のひとつ〈大工哲弘ミニ・ライブ〉である。

大工哲弘は1948年、石垣市新川(あらかわ)の生まれ。少年時代からうたうことが好きで、唄・三線(サンシン)(蛇皮を張った琉球三味線)に熱中した。高校卒業後、沖縄(那覇)に出て、同郷の山里勇吉に師事。職を転々としながら民謡修業を続け、やがてその実力が広く認められるようになった。現在は那覇市役所に勤務するかたわら、週末や休暇などを活用して日本全国、世界各地に出かけて行き、八重山の唄をうたっている。伝統的な三線弾き語りスタイルや、梅津和時(サックス)らと組んで洋楽アンサンブルを取り入れたアルバムなど、CDもすでに7枚発表している。

曇り空の寒い日だったが、東長寺の本堂は100人ほどの観客で埋まった。大工は、とぼけたジョークを飛ばしたり、終わったばかりの沖縄県知事選挙の感想を述べたりしながら、中尾勘二(サックス他)と桜井芳樹(ギター)のサポートで三線を弾き、うたって行く。「てぃんさぐの花」「谷茶前(タンチャメー)」など沖縄本島の唄、戦前から八重山地方で親しまれて来た「美しき天然」「ゴンドラの唄」などヤマト(日本本土)の唄、そしてもちろん「与那国のマヤー小(ぐゎー)」「とぅばらーま」「月の美(かい)しゃ」など八重山の唄……。

沖縄本島の唄でも、ヤマトの唄でも、彼のうたい方は大工スタイル、八重山風である。何よりも発声、声そのものが八重山的だ。大工は無理に声を張り上げたりせず、むしろたんたんとうたっているのだが、その声に



新宿アジア祭・東長寺会場



はどっしりとした安定感がある。重心が低い。そのおおらかな唱法、八重山独特の声の力強さは、どこから生まれて来たのだろうか。

大工は言う。

「ぼくらの世代までの体験だと思うんだけど、子どもの頃、祖父が山の畑で、農作業しながらうたってるんですね。その唄に、おばあちゃんが返しを入れる。それに、おふくろも加わる。すると、おじいちゃんの側には、親父が加わる。その声が、ずっと遠くからきこえて来るんです。そういう唄のスタイルを、ぼくなんかは見て育ったんですよ」

野を渡るたくましい声。仕事の動作と不可分のワーク・ソングである。

「おばあちゃんなんか、畑に足を一歩踏み入れた途端に、もううたってた。うたってないと仕事ができないし、うたってると疲れないんだな。そういうことを毎日やっていると、すごくいい声になる。お坊さんの声だって、そうでしょ。よく響きますよね。葬儀のときに、お経を聴いて、あん



空港にも近い石垣島市内の一角、大きなアコウの木に抱かれるように「とぅばらーま」の歌碑が立っている。

▲東長寺でのライブ

な声でうたいたいなあって思うこと、ありますよ(笑)」

八重山地方では、共同作業のなかで、さかんに男女の掛け合い唄がうたわれた。そうした集団ワーク・ソングを〝ユンタ〟と呼ぶ。〝ジラバ〟と呼ばれる唄もあるが、これもユンタから発展したものらしい。

男女の掛け合いでうたわれるユンタは、仕事をしながらうたうのだから、当然、楽器の伴奏などは付かない。声だけである。さらに、野外でうたわれるから、その声は、ひ弱な声ではありえない。

「〝とうばらーま〟も、ユンタが元になっているんですよ。というか、ユンタが、八重山の唄すべてのルーツだと思うんですね」

大工哲弘は、ユンタの〝野の声〟を受け継いでいる。

「沖縄本島には、ワーク・ソングがほとんど残ってなくて、ほとんど四畳半的なラブ・ソングが主流ですね。八重山にも、いろんな唄があるんだけど、基本的には大自然、月や星や太陽なんかが身近な生活空間のなかにあって、みんな働きながら、そういうものに向かって、天に向かうようにうたって来た……のではないかなと、まあ想像も入ってるかもわかんないけれど、そんなふうに考えてぼくらがうたっていくっていうのが、先人たちへの恩返しかなという思いもあるんですよ」

大工は96年、国際交流基金に派遣され、南アフリカ、西アフリカ公演を行なった。

「セネガルの音楽学校でワークショップをやったんだけど、バラフォン(西アフリカの木琴)の神様って言われてる仙人みたいなおじいちゃんがいてね。その人のバラフォンとぼくの三線が一緒に演奏したら、見ている現地の人たちが、三線に負けるなって、ぼんぼんうたいだすわけ。だから、こちらもやりかえしてうたったら、向こうもまたうたう。あれは、すごかったですよ。彼らは、自分たちの音楽を自分たちのなかに持ってる。

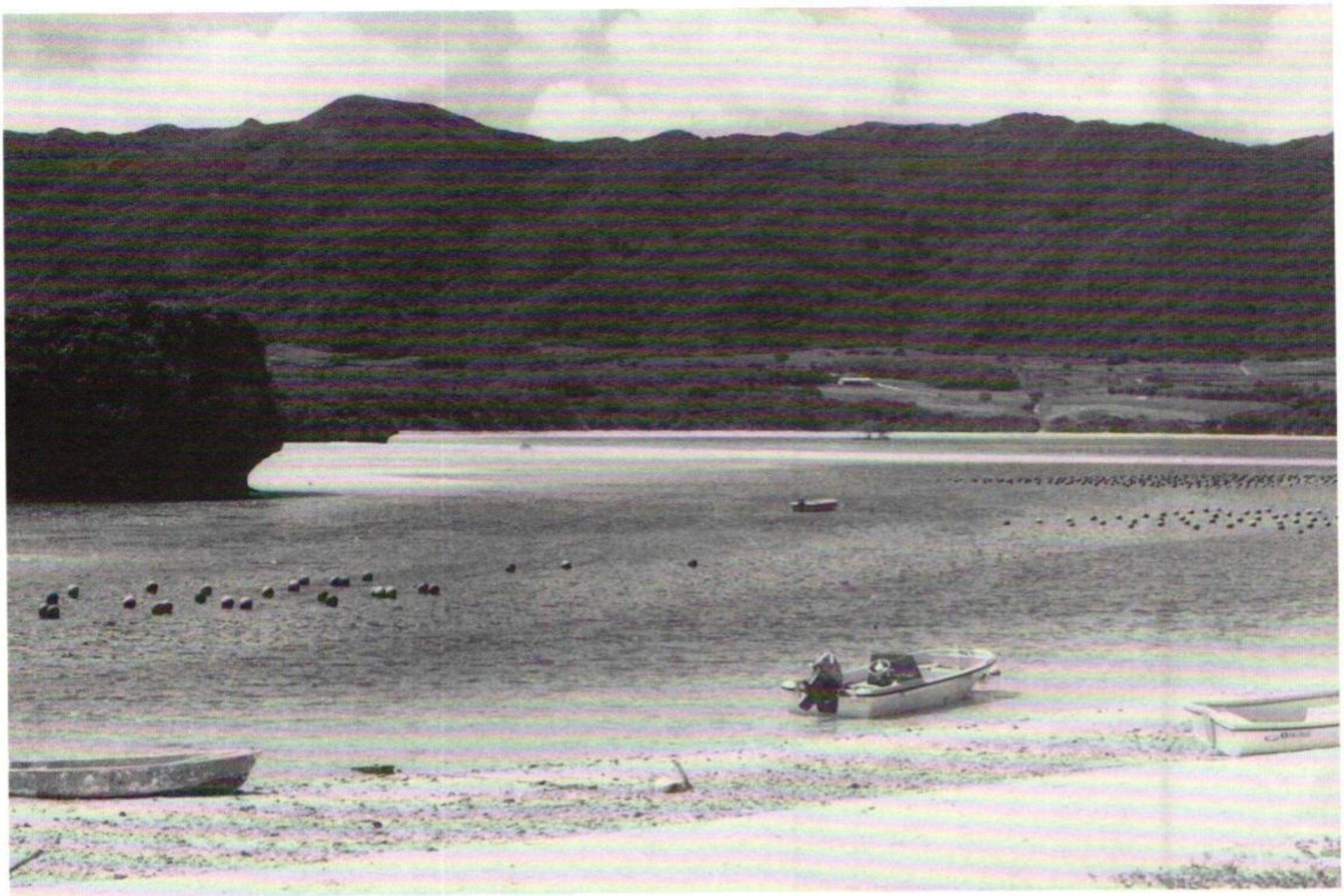
そういう体験をして、今まで八重山の唄をうたって来て間違ってなかったなという確信を強めたんです。使い古された言葉だろうけれど、プライド、誇りですよ。自信を持って自分たちの唄をうたえば、絶対に引けを取らないし、理解してもらえると思うんですね。一般に、日本人ってプライドがないから、あれにしようか、これにしようかって、いろんなものに手を出すんだけど、自信がないんですよ、ぼくに言わせれば。でも、アフリカの人たちは、自分たちの音楽に絶対的な自信を持ってる。どこにも負けないと思ってる。そんなことを、アフリカに行って痛感しました」

さらに、大工は98年、エイジアン・ファンタジー・オーケストラというプロジェクトの一員として、インド、ベトナム、フィリピンを回った。

「あのときは、マニラ公演で停電があったんです。真っ暗ですよ。でも、ぼくは横で見てたんだけど、メンバーがステージに出て、懐中電灯の光だけで、どうにかこうにか1曲やった。そしたら、演奏が終わったところで、電気がパッとついたんですよ。そのときのワーッていうお客さんの拍手が



熱唱する大工哲弘

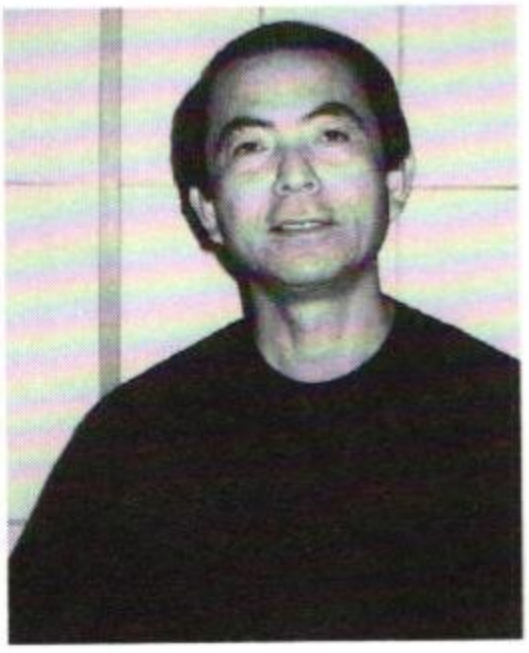


ね、唄や演奏への拍手よりもずっと大きいの(笑)。電気文明の喜びっていうかね。だったら、唄よりも、電気ショーかなんか持って行ったらどうかなって思ったりしたんだけど(笑)。

結局、そういう国に、発電機を使って大量の電気を補給しながら照明をキラキラさせてみたいなコンサートを持って行くと、音楽を聴いてもらうというより、日本の技術や豊かさを見せるだけというようなことになりかねないようにも思うんだね。そうじゃなしに、お互いに一緒なんだという同じ目線でやった方がいいんじゃないかと思うんですよ。で、こちらにはこういう唄がある。きみたちと一緒だと。そういうふうにしないとね」

つまり、アジア・アフリカ諸国に日本の現代技術文明の成果を持って行くのではなく、あえて唄を裸のまま持って行き、こちらもうたえば、向こうもうたう。うたうという基本的なところで、同じ地平に立つ。

大工のこうした発想は、とても八重山的というか、ユンタ的ではない



大工哲弘「フィリピンから東京行きの飛行機に乗ったら、すぐに八重山。ここで降ろしてくれって言いたくなった(笑)」(東長寺にて)

▲穏やかな入り江が美しい石垣島西部、川平(かびら)湾。

か。ユンタの根底にあるのは、掛け合い、唄のやりとりだ。

●●●

サァー　ゆんたしょうら
ヒー　じらばしょうら
ばがけーら　ヨウホーナ

サァー　ゆんた主（ぬす）
ヒー　じらば主
あんなり　ヨウホーナ

サァー　いずすどぅ
ヒー　なみるすどぅ
主やるい　ヨウホーナ

（ユンタしましょう。ジラバしましょう。私たちみんなで。ユンタの主人公、ジラバの主人公は誰？　うたう者が主人公だよ）

●●●

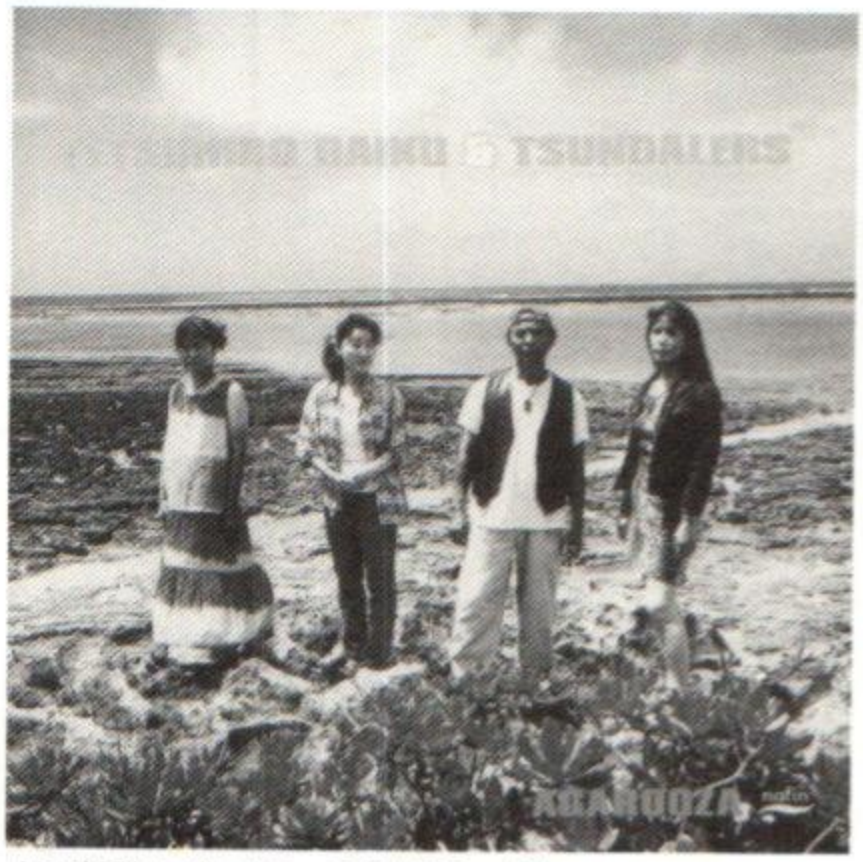
大工哲弘&ツンダラーズのアルバム『あがろーざ』の冒頭に収められている「ゆんたしょうら」の一節である。

こちらが何かを投げかける。あちらは、それを巧く受けとめ、投げ返して来る。こちらは、それを巧く受けとめ、また投げ返す。このやりとりのなかでは、あちらとこちら、どちらも主人公である。

大工哲弘は、世界中どこに行っても「さあ、ゆんたしょうら（ユンタしましょう）」という姿勢を崩さない。一挙に話は大きくなるが、国際交流とか異文化間コミュニケーションとか、そういう堅苦しい言葉は、どこかから借りてきたようで、どうも私には馴染めない。それよりも「ゆんたしょうら！」という呼びかけの方に、私の身体は反応する。21世紀は、これだな。世界に向かって、

さあ、ゆんたしょうら！

大工哲弘の太い声、おおらかな唄は、そんな思いに私を駆り立てる。



大工哲弘＆ツンダラーズ「あがろーざ」
（nafin/ビクター）


大工哲弘のアルバム「ゆんた　とぅ　じらば」
（アカバナー）



大工哲弘のヤマト唄集「ウチナージンタ」
（オフノート）

あとがき——

ラオスは癒しの国？

「ラオスは癒しの国になれると思う」——。

プーシーの丘からルアンパバーンの町並みを眺めていた時、フランスからやって来たという若者はこう言って話しかけてきた。東南アジアを旅している途中だという。

これと言って、きわだった観光資源があまり見当たらないラオス。しかし、むしろそこがいい。この国の豊かな自然や人間のやさしさに触れて、世界中の人間がリフレッシュできる——彼はそう語るのだった。

たしかに、この国の村人たちに接していると、その人情にじいんとしてしまうことがよくある。

タート村を訪ねたときのことだ。

「こんなにしていただいて、負担がかかるのでは」

「いや、この村には、いつ、誰が来てもいいんだ。何日泊まって、ご飯を食べてもいいんだ」

「それでは、食費だけでも」

「ボーペンニャン（気にするな）！出会いは、お金には換えられないんだ」

一期一会——もう二度と会えないかもしれない。このかけがえのない縁をだいじにしたい。そういう心情が村人たちのなかに息づいている——。

しかし、ラオスに長年住んでいるある日本人はこうも語った。

「この国はほんとに大丈夫かと思います」

ラオスの人たちは、他国に頼って、自力で国を盛り立てようとする気迫が足りない、と彼は心配する。その ことをラオス人に言ったら、「持てる国が持たざる国を援助するのは当然ではないか」と語ったという——。

ラオス人のボーペンニャン（気にしない）の精神は、色々な顔をもっているようだ。

●

さて、今回の旅で圧巻だったのは、何と言っても、一見ナマハゲに似た、プーニュー・ニャーニューというカミさまと対面できたことであった。

帰国するなり、そのことをラオスに詳しい知人に話したら、「信じられない」と、電話の向こうで絶句するのだった。



祭日以外は絶対人目に触れることはなく、まして、以前は奉納している祠に近づくことさえ儘ならなかったという。

「信仰や伝統を守る気概が失われてきたのだろうか」と、その人は住民の変化を真剣に心配していた。

その予想外の反応に、タブーを破る一役を買ってしまったのだろうかと、戸惑いを禁じ得なかった。が、本文にあるように、決して無理強いをしたわけではない。結局は彼らの判断によって実現したことで、不思議な縁としか言いようがないのだ。

とまれ、この一件は、「伝統文化を守るとは」と、改めて考えさせられるきっかけとなった。伝統のよさと新しい時代の趨勢とどう折り合いをつけていくか、それは、人間の永遠のテーマの一つであろうと思う。

ただ、そんな折りにうかがった岩田慶治先生の一言は、まさに私を刮目させるものだった。

「伝統文化やアイデンティティを守ることはもっともなことです。しかし、もっとだいじなのは、魂が救われることです」——。

●

久々のラオス特集。とりわけ、東南アジア研究の泰斗である岩田慶治先生に、このようなお言葉を頂戴できたことは望外の喜びである。まるで哲人が語るかのような不思議なお話に、私ならずともついつい引き込まれてしまうであろう。ラオスの作家であり文化人であるウティン・ブンニャウォン先生をご紹介できたことも画期的と思っている。鈴木玲子先生には、ルアンパバーンの貴重な行事について詳しくご紹介いただいた。本邦初である。そして、紙面の都合上、逐一お名前を挙げられないが、他のどの執筆者の文章もラオスやアジアへの愛情溢れるものである。

末尾になってしまったが、鈴木玲子先生には、ご自身の文章はもとより、ウティン先生の翻訳やら、一方ならぬお世話になった。記して心から感謝申し上げたい。

●

——欧州では空爆が繰り返され、多数の難民が路頭に迷っている昨今。人類の先祖であるプーニュー・ニャーニューは、この世紀末の状況を何と思し召されているであろうか。ご加護を祈りたい思いにかられる。

1999年春

編集部　大菅俊幸

執筆者紹介

■鈴木玲子（すずき・れいこ）

1961年生まれ。東京外国語大学大学院、地域文化研究科博士課程後期課程、単位取得退学。現在、東京外国語大学、東南アジア課程ラオス語専攻、専任講師。ラオス語学、言語学専攻。論文に「現代ラオス語ヴィエンチャン方言の音韻体系」『言語研究第106号』（日本言語学会）、著書『もっと知りたいラオス』（共著）（弘文堂）など。

■ウティン・ブンニャウォン

1945年、ラオス西北部のサイニャブリー県生まれ。1976年～1992年、ラオス情報文化省に勤務し、国営出版局外国文学編集部長、文学部副部長等を歴任。1992年～1993年、アメリカ、ワシントン大学でラオス語講師。帰国後、作家として文筆活動に専念。現在、東京外国語大学、東南アジア課程ラオス語専攻、助教授。「あの微笑み」「お母さん――短編小説集」など、多数の作品がある。詳細は、本書61～62頁参照。

■岩田慶治（いわた・けいじ）

1922年横浜生まれ。専攻は文化人類学。東京工業大学名誉教授、国立民族学博物館名誉教授。東南アジアを中心とするフィールドワークの体験から、自然と人間を包括する思想、「草木虫魚教（アニミズム）」を提唱し続けている。著書に『東南アジアのこころ』（アジア経済研究所）、『コスモスの思想』（岩波書店）、『日本文化のふるさと』（角川書店）、『道元の見た宇宙』（青土社）、『草木虫魚の人類学』、『カミの人類学』、『岩田慶治著作集・全8巻』以上（講談社）、『アニミズム時代』（法蔵館）など多数がある。

■安井清子（やすい・きよこ）

1962年生まれ。国際基督教大学卒。1985年より、SVA職員としてタイのラオス難民キャンプで5年、ラオスで2年、子どもの図書館活動にかかわる。とくに山岳民族のモンとの関わりが深い。著書に『空の民の子どもたち』（社会評論社）、『チューの夢　トゥーの夢』（福音館書店）、『森と友だち　川と友だち』（草土文化）、『すてきな微笑み』（NTT出版）。現在、モン族の民話を記録する活動にも取り組んでいる。

■竹原　茂（たけはら・しげる）（ラオス名ウドム・ラタナヴォン）

1943年、ラオス南部サワンナケート生まれ。1965年、日本の文部省の留学生として来日。ラオス政府勤務の後、一橋大学大学院経済学部修士課程修了。東京外国語大学非常勤講師を経て、1965年麗澤大学外国語学部教授、同年NHK国際放送番組審議会委員に就任。著書に、『バーツ経済圏の展望』、『東南アジアの紀行』、『タイ語入門』など多数。

■松村　洋（まつむら・ひろし）

1952年生まれ。タイ音楽を中心に東南アジアのポピュラー音楽について調査している。著書に『ワールド・ミュージック宣言』（草思社）、『8ビート・シティ』（新曜社）、沖縄音楽の本『照屋林賢・なんくるぐらし』（編著・筑摩書房）、『アジアうた街道』（新書館）他がある。

■篠田有史（しのだ・ゆうじ）

1954年生まれ。米国旅行中にユージン・スミスの遺作写真展を見てフォトジャーナリストを志す。スペイン、中南米などスペイン語圏を中心に民衆を撮り続けている。
写真展「スペインの小さな村で」「遠い微笑（ニカラグア）」（ともに富士フォトサロン）。共著に『コロンブスの夢』（新潮社）、『とんでごらん』（ジュラ出版局）、『リゴベルタの村』（講談社）。

■大菅俊幸　SVA広報課

シャンティ1999―ラオス・古都紀行
――世界遺産の町ルアンパバーンに生きる人びと
1999年5月28日
発行人…松永然道
編集……曹洞宗国際ボランティア会　広報課
発行……曹洞宗国際ボランティア会（SVA）
〒160-0015 東京都新宿区大京町31慈母会館2・3F
TEL.03-5360-1233　TEL.03-5360-1220
発売……現代企画室
〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-5
TEL.03-3293-9539　FAX.03-3293-2735
デザイン…保田一郎
印刷……（株）日本形色

現代企画室[同時代史としての現代史に迫る]

「ペルー人質事件」解読のための21章

太田昌国　新書判/248P

ペルー日本大使公邸占拠事件の本質はどこにあるのか？　社会的·政治的背景を無視し、武力による「解決」を賛美する頽廃した言論状況とたたかう21章。(97·8)　1500円

チェ・ゲバラ　モーターサイクル南米旅行日記

チェ·ゲバラ著 棚橋加奈江訳 46判/202p

ゲバラの医学生時代の貧乏旅行の様子を綴った日記。無鉄砲で、無計画、他人の善意を当てにする旅行を面白おかしく描写して、瑞々しい青春文学の趣きをもつ。(97·10) 2000円

エルネスト·チェ·ゲバラとその時代
コルダ写真集

ハイメ·サルスキー/太田昌国文 A4判/120p

ゲバラやカストロなどの思いがけぬ素顔を明かし、キューバ革命初期の躍動的な鼓動を伝える。写真を「解読」するための註と文章によって多面的に構成。(98·10)　2800円

もう、たくさんだ！
メキシコ先住民蜂起の記録1

サパティスタ民族解放軍著 太田·小林訳　A5判/468P

94年初頭に起きたひとつの地域的な反乱は、実は現代世界の構造に通底するものを持っていた。サパティスタの魅力あふれるメッセージを紹介し、その意味を探る。(95·4)　4500円

発禁カタルーニャ現代史

セスク画/モンセラー·ローチ文
山道/潤田/市川/八嶋訳　A4判変形/200P

スペインの北東に位置する小さなくにが、内戦と果てしなく続いたファシスト独裁と脆弱な民主主義への移行期をどのように生き延びたか、マンガによる歴史物語。(90·3)　2800円

アメリカが本当に望んでいること

ノーム·チョムスキー著
益岡賢訳　A5判/168P

「我々が米国内で米国の政策を阻止すれば、第三世界の人々が生き延びる可能性は増す」戦後50年の米外交政策を批判的に検討して、大国の世界支配の本質を衝く。(94·6)　1300円

迷走する復古ロシア

ボリス·カガルリツキー著
佐久間·水谷·湯川訳　46判/308P

堕落した「共産主義」体制は崩壊した。市場資本主義の「復活」は失敗した。そして次は何か？　それを準備するのは誰か？　20世紀末ロシアは誰に住みよいか？(96·9)　3000円

---

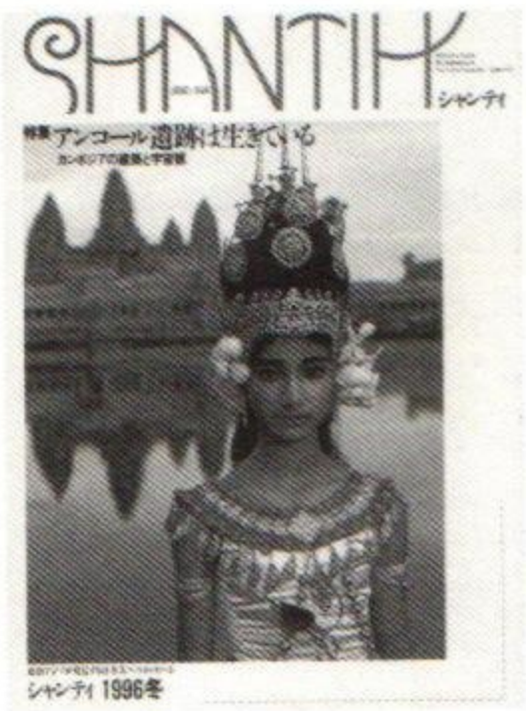
silenced by history
富山妙子時代を刻む

A4判/88P

戦後50年——〈歴史に強いられた沈黙〉を破るために、近代日本が行なった植民地支配と侵略戦争の記憶をアジアの視座から描く、画家富山妙子の作品集。(95·4)　2000円

東京都千代田区猿楽町2-2-5　現代企画室　電話03-3293-9539 Fax03-3293-2735
http://www.shohyo.co.jp/gendai/index.html

シャンティ、バックナンバーのご案内



96年冬

【特集】アンコール遺跡は生きている—カンボジアの建築と宇宙観/水と大地と空が世界を創る/浮かぶ村/アンコールワットの蛇

定価600円(税込)



96年秋

【特集】ピーマイ・ラオ—ラオスの心を訪ねて/ようこそヴィエンチャンの正月へ/リンサン村物語/ルアンパバーンの街と人々/白象伝説と宮澤賢治

定価750円(税込)



97年春

【特集】タイ・やきものロードをゆく/スコータイはやきものの里だった/ヨム川のほとりで出会った人たち/素焼きづくりの女性たち/チェンラーイの陶芸家・ソムラックさん

定価730円(税別)



98年

【特集】スバエクの物語—カンボジアの影絵芝居/聖なる芸能/影絵師の村/ラーマ物語に見るカンボジア文化/輝ける瞳/影絵の宇宙—世界と日本の影絵芝居

定価730円(税別)

次号予告　2000年3月発刊予定

東南アジア・お茶の文化(仮題)

●お問い合わせは
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3F SVA広報課
TEL.03-5360-1233 FAX.03-5360-1220

SVA会員募集

曹洞宗国際ボランティア会(SVA)は、タイ、カンボジア、ラオスで教育・文化の分野での国際協力を行っている民間団体(NGO)です。会員になると、会報月刊「シャンティ」が購読できます。また、SVAが主催する海外のスタディツァーや各種セミナーなどには優先的に参加することができます。

[年会費](会報購読料含む)

●一般会員12,000円

●学生会員 5,000円

●団体会員30,000円

以下の郵便振替口座にお振込みください。通信欄に「会費」と明記してください。

口座番号00150-9-61724

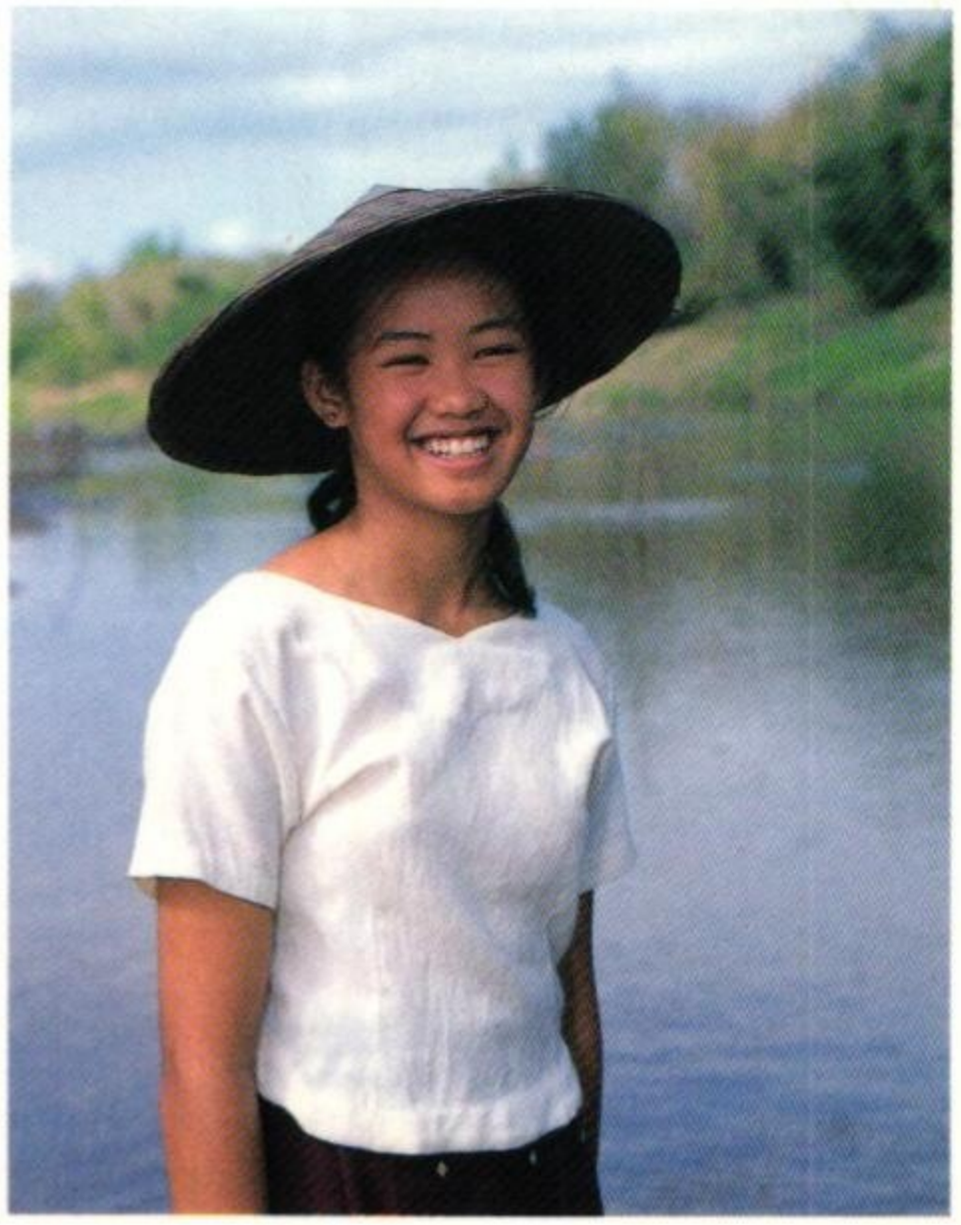
加入者名 曹洞宗国際ボランティア会

9784773895360

ISBN4-7738-9536-5
C0036 ¥730E

定価(本体730円+税)

1920036007301



本書「シャンティ」は、東南アジアを知り、東南アジアに学ぶためのビジュアル・コミュニケーションブックです。東南アジアの人々の実生活、思想、伝統文化など、アジアの「いま」を日本人にもっともっと知ってもらいたい。アジアと日本人のこころをつなぐ接点になりたい。そんな願いから「東南アジアの視点でとらえた」東南アジア情報をお届けします。

地球人であり、アジア人である日本人——
あなたの新しいアジアを見つけてください。

●「シャンティ」とは、サンスクリット語で「平和」を意味します。

発行/曹洞宗国際ボランティア会(SVA)
発売/現代企画室